

雛鳥と籠の鷹

筆折ルマンド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

飛鷹恭侍は転勤族。

学生にも関わらず、学長の命で西へ東へ大忙し。

荒魂と呼ばれる化け物が蔓延る日本で、刀使と呼ばれる女の子たちと共に、彼は誰よりも強くなることを心に誓う。

太刀の道を極め、その先の誰も守れる力に手が届くことを信じて。

……唐変木が刃物持った女の子と仲良くなって、後が怖い話とも言う。

目次

鷹の爪はまだ青く	1
回る若鷹、行く先いずこ	20
見て見ぬ振りを	31
見て見ぬ振りを〈益子薫〉	54
孤高の片鱗	62
孤高の片鱗 〈衛藤可奈美〉	76
雛鳥の翼〈衛藤可奈美〉	83
比翼恋慕	102
比翼恋慕 〈衛藤可奈美〉	108
剣術バカ2人 〈衛藤可奈美〉	118
折神の名の下に	134
去る者、来る者 〈十条姫和〉	157

人智のありか	177
大切なもの 〈山城由依〉	185
京都特異災害研究所	198
偽神刀	210
荒魂のなく頃に 〈山城由依〉	234
隣花の赤は鮮やかで	246
お昼寝 〈安桜美炎〉	264
その剣は如何程か 〈此花寿々花〉	274

鷹の爪はまだ青く

走る

走る

走る

藍色と橙色がグラデーションを作る暁の空。

刻は夕暮れ。

太陽は既にその身のほとんどを地平線の彼方に沈め、夜は間近に迫っている。

不自然なほど人も車も無い道路。

ぼつねんと光り輝く電光掲示板盤に流れる何かの注意報。

つい先ほど、最後の人がその掲示板を見て慌ててこの場を去り、それっきり動くモノはわずかに木の葉が風に吹かれて揺れるだけ。

そんな殺風景に動くモノが一つ。

信号どころか、歩道も車道も関係なしに、一直線にどこかへ向かう影。

進む先、ビルの影が途絶え、日の光が影を照らしてその姿が露わにした。

それは背丈160cmぐらいの少年だった。

少年は白い学ランに黒の防弾チョッキのようなものを着ていて、のっぺりとした白面と金の二本角の額当てを合わせた仮面を被り、腰には本物とおぼしき刀を帯刀していた。

そうそう見かけない奇抜な格好をした少年は、そのまま何処に向かつて流れ星のように一目散に道路を駆け抜ける。

路地に差し掛かった辺りで、仮面の裏から着信音。

随分とハイテクな仮面は少年が「通話」と言い放つだけで、相手と繋がった。

『飛鷹、現場には既に刀使が2名到着している。お前が出る必要はない』

「かもしれない。でも、成績表によれば、その子たち実技が弱いらしい。正直不安だ」

『お前、勝手に個人情報を見るなど前にも——』

「俺が行くべきか否かの判断するには必要だった。仕方ないだろう？」

『そういう問題では——はあ、お前が行ってどうにかなるのか？』

「どうにかしてみせる」

「……その言葉信じるでしょう。ただし、絶対に面は外さないこと。これ以上、私の仕事を増やしてくれるな」

少年が嬉しそうな表情を浮かべた。

「ありがとう」

仮面に仕込まれたインカムを切り、少年は目の前のフェンスを飛び越えた。

京都府

雅な花街ではなく、ビル立ち並ぶ街の一角。

大きく育ちすぎた街路樹に彩られたほの暗い道路に、カアと日の光が差し込んだ。

日が沈む直前の暴力的な灼光^{しゃくこう}は、浴びたモノ全てをペンキを頭からかぶったかのような鮮やかな朱^{あけ}に染め上げた。

影すら赤黒く、風に吹かれ揺れる木はあまりにも赤く染まりすぎて影と本物の見分けがつかないほど。

そんな紅く燃える道路の中央。

とすとす

と、自動車よりも巨大な体軀に見合わない静かな足音で、一匹……否、一つの赤い何

かが歩を進める。

ソレの進む先に見えるのは荒れ果てた道路の姿。

ひしやげたガードレール

ひび割れ陥没したアスファルト

えぐれきざまれへし折れた樹木

外壁をくり抜かれてオープンテラスと化したビル

そして、力なく倒れた2人の少女。

それら自分の所業をどこか満足げに眺めるのは、岩の様な肌をした異形の虎。

人でも車でも、それどころか現世のモノですらないソレは、

グオオオオオオオオオ

暴風の如き咆哮を放った。



この日本には、『荒魂』と呼ばれる化け物が存在する。

赤褐色の岩のような骨格を持つその化け物を倒せるのは『刀使』と呼ばれる少女たちだけ。

彼女たちは『御刀』と呼ばれる神器に選ばれた神薙ぎの巫女であり、御刀の神力で普通の物理法則の範疇に収まらない超常の力を扱うことができる。

基本能力である『写シ』は自分の身体を質量のある霊体に変換し、その能力が発動している間の負傷——たとえば銃で撃たれたり、刀で真つ二つにされたとしても——能力を解除すれば身体は無傷の状態に戻る。

つまりは、死を無かったことにできる。

『迅移』と呼ばれる加速能力は、銃弾よりも早く走れる足を

『八幡力』と呼ばれる筋力強化は、銀行で使われるような鋼鉄の壁を叩き斬れるほどの怪力を

『金剛身』と呼ばれる硬化能力は、対戦車ミサイルにすら耐える頑健さを

少女に与える。

それは正に、人が個人で持ちうる中で最強の力。

少女たちはそんな大いなる力を持って、人の世に災いをもたらす化け物を討伐し、日夜 平和を守っているのだ。

……

なんて、誇張表現がすぎるか。



日が沈みきり、あたりが一気に暗くなった。

電灯がジンジンと点灯し、夜道の明暗が一層濃くなる。

しかし、虎の姿をした4mの中型荒魂は、その赤褐色の硬い肌に縞状に入った亀裂から覗く、マグマのような橙色の光によって、薄暗がりでもその姿を克明に浮かび上がらせていた。

虎型荒魂の動きは驚くほど滑らか。虎のようにしずしずと、壁際のぐつたりと動かなくなった獲物に歩み寄る。

荒魂は人を積極的に襲う。

彼らは人を殺す事を目的として活動していて、その対象は、彼女たちが神薙ぎの巫女であろうと、人である以上変わらない。

10mも無い距離はあっという間に埋まり、虎型荒魂はすぐに少女たちの前に立つた。

荒魂が長く鋭い爪の並んだ右足を振り上げる。

木を一撃でなぎ倒すほどの威力を持つその手が振り下ろされれば、特別な力を失い、気を失った少女たちは、踏みつけられた卵よりも脆く、呆気なく、その命を落としてしまう。

しかし

それを許さない者がいた。

ビルの隙間から飛び出してきた少年が、荒魂の蛮行を阻止するため、腰に据えた鞘から すらり と刀を抜き放つ。

露わになった鈍色の刃が夜のとぼりを切って払う。

「八幡力!!」

少年の着る防弾チョッキのポケットの一つがポワンと光った。

20mを一足跳びで0にして、少年が両手で振り抜いた刀は、荒魂の身体の正面をしっかと捉えた。

ガイン

にぶい音と共に上体を起こしていた荒魂は吹き飛んだ。

虎型荒魂は二転三転した後、衝撃によつて転がる身体を止めるため、地面に爪を突き立てた。

ガリガリとアスファルトに深く爪痕が刻みつけられる。

八幡力

刀使の使う筋力増強能力。

5つの段階があり、彼が今使ったのは3段階目。

自動車と同等の馬力を持つ。

ゴルゴルゴルゴル

まるで本物の生き物のように苛立った様子で、虎型荒魂は少年を睨みつける。

品定めか、威嚇か、少年がどの程度の強さか測ろうとしているのか。

「殺人本能しかない化け物のくせに悠長な事するんじゃないやねえ」

動かない荒魂を前に、少年が先に踏み込んだ。

横薙ぎの一閃

虎型荒魂は飛び退き躲す。

飛び退いた先で荒魂は着地と同時に前足を交錯させた。

間を詰める少年。

荒魂はぐつと上半身が沈みこませ、交錯させた前足を起点にぐんと一回転。

荒魂の下半身が野球盤のバットのようになんと振られる。

少年は後退し、それを避けようとするが、

荒魂の岩石そのものの硬さを持つ尻尾が、ムチのようになりながら少年に迫る。

射程から逃れられなかった少年。だが彼は焦らず、剣道のように御刀を正面に構えて、晴眼の構えを作り、僅かに御刀を上跳到ねた。

刀の先が尻尾の先を捉えて、それだけで迫る尻尾は高く打ち上がり少年の凶上を切り、少年の髪を揺らすだけに留まった。

そのまま踏み込み、上段からの、真つ直ぐ芯の通った袈裟斬り。

回転し終えた荒魂と少年が顔を合わせる。

するりと太刀は荒魂の顔を切り取った。

荒魂の顔の3分の1が切り落とされて、ゴトンと音を鳴らす。

しかし、荒魂は止まらない。

降りてきた両足で大地を踏みしめる。

悪寒

「金剛身ッ」

身体を硬化させる刀使の能力。

少年がそれを使用した直後、荒魂の後ろ足が爆ぜた。

荒魂の突進をもろに喰らい、少年は吹き飛び、転がり、ビルの壁に叩きつけられた。金剛身は段階による強度の差に大きな開きがある。

最高の5段階ならばミサイルからも完璧に身を守るけれど、少年が使った金剛身は2段階。

トラック並の力で轢き飛ばされたにしては軽傷で済んだものの、それでも身体の芯にダメージは残る。

虎型荒魂は、顔の表面、片耳と顔面の半分と上顎を削ぎ落とされたにもかかわらず、そんな事、意に介さずグルグルと唸る。

が、少年も痛みで動きが鈍るほどやわではない。

即座に立って、御刀を構え直す。

荒魂は生物ではない。

負の神性を持つ『ノロ』と呼ばれるゲル状の物質が寄り集まって、生物の姿を模したモノなのだ。

それ故に、神力を纏った御刀以外の全ての攻撃は荒魂に対して致命傷になり得ない。

そして、今、少年の持つ御刀は神気を纏っていないかった。

刀使になれるのは、二十歳を超えないうら若き乙女だけ。

彼は中学生。歳こそ御刀の許容範囲ではあるが、そもそも性別が違った。

……

それでも少年は荒魂の前に立ち塞がる。

彼の防弾チョッキに仕込んである護符は、ほんの一瞬だけ、御刀から力を借りる事を可能にする。

彼は少年剣士の中ではとびきり優秀で、その一瞬で勝てる自信があった。

だが、何よりも彼の心に重くのしかかっていたのは、自分の背に、守らなければならぬ少女たちがいることだ。

彼女たちの存在が彼の中から逃げるといふ選択肢を完全に消し去っていた。

虎型荒魂は早くしなやかに、さながらコンパスのように軸移動を多用し、少年の足が止まる瞬間を狙って襲い掛かる。

実に理知的でいやらしい攻め方。

だが少年の構えを崩すには至らない。

一撫でて人を殺す化け物を前にしても、少年は全く怯まない。

彼は、相手の攻撃を掻い潜るためなら、攻撃をより弱く受け止めるためなら、自分から荒魂の懐に潜り込むことすら辞さない。

それは、彼の後ろに倒れる刀使では出来なかつた事。

それが今、彼女達が地に伏し、彼が未だ倒れていない理由。

彼の剣の腕前、いざと言う時の勝負強さは、並の刀使の能力を含めた全力よりもなお強い。

もつとも剣の腕前に限れば、並の刀使よりも強い剣士なんてものは幾らでも存在する。

それこそ現役の警察機動隊員なら、誰だつて刀使と呼ばれる女学生の大半よりも強いはずだ。

だが、

実際に防具も保険写シもなく、化け物荒魂と臆せず戦える人間はそうはいないだろう。

それこそ、この少年のように、頭のネジを3つ4つどこかにやってしまったような人間でなければ、刀使でない身で、わざわざ荒魂とやりあおうなんて事考えない。

その点に置いてだけは、彼は確かに特別だった。

十数回目のすれ違い。

虎型荒魂の攻撃は擦りもせず、かといって少年の攻撃が荒魂に何かダメージを与えられようには見えない。

しかし

荒魂は大きく迂回し、少年と距離を取った。

小回りでは少年に部があつた。

少年の方は、無闇に追うことはせず待ちの姿勢。

刀を寝かせた状態で真正面に切つ先を低く構える。

天然理心流 平晴眼の構え。

ガアアアアア

虎型荒魂が吠え、駆ける。

少年の、一足一刀の間合いに荒魂が入る。一步、大きく踏みしめ、踏み出した分、刀が下がり、その下がった分が刀を振るうタメになる。

斜めに振り上げ、逆袈裟斬り

しかし、その軌道に荒魂はいない。少年の頭上に橙色の光が瞬く。

——跳んだ!?

荒魂の腹のボウつと光る橙色の縞模様に次いで、後脚が迫る。

4 mの鉄塊を支える足だ。ひっかけられただけでも重症は免れない。

——中に人でも

咄嗟に足の力を抜いて膝をつき頭を下げる。

——入ってんじゃねえのか!?

荒魂の後脚を辛くも躲した少年は、膝を支点にすぐさま振り向いたが、その時既に荒魂は身を翻し二度目の突進を始めていた。

立つ——いや遅い！

マジかよ!? こんな所で!!

刃で手が切れるのもお構い無しに最速で御刀を鞘に収める。

両膝をつけて正座。

——こんな技を使うハメになるなんて！

少年の鼓動は今にも爆発しそうなほどに激しい。

荒魂は万全の体勢で己に襲いかかる寸前。

対する少年はまともに構えられていない。

刀使、否、この状態から勝ちを拾える剣士など、そうそう居ない。

それでも荒魂を倒すため、自身が生きる。勝つために少年は正座の構えをとった。

狙うのはただ一つ、正座からの居合抜刀斬り。

その一太刀をもって荒魂を討滅する事。

それしか少年に道は無い。

虎型荒魂が迫る。

迫る

迫る

目前

前足が浮いた

——今！

御式内おしきうち

少年が膝立ちになる。

その瞬間、少年の胸元から炎が吹き出し御刀に絡みついた。少年の御刀にほんの一瞬だけ神力が宿る。

「神居!!」

刹那の閃き

目のくらむような閃光。

周囲が一瞬昼のように明るくなり、そして一層濃い夜が一気に押し寄せる。

いつのまにか中腰で刀を振り切っていた少年の肩を荒魂の左後脚が蹴り飛ばした。

少年がもんどりうって倒れ込む。

刀を振り抜いた姿勢、身体が硬直した状態で、強く肩を打たれたせいか、無理な体勢のままのけぞらされてしまい、腰と肩が痛くてたまらない。

それでも少年は痛みによって沸いた涙を拭く間も惜しんで振り返った。

……

そこには胴を両断され、その断面と頭部の損傷からトロトロと琥珀色の液体を流す虎型荒魂の姿があつた。

みるみるウチに琥珀色の液体が湖を作り、虎型荒魂の身体が萎んでいく。

その姿を確認し、少年は緊張が途切れたのか腰を抜かした。

付けていた仮面が、今になって苦しく思えて思わず乱暴に投げ捨てる。

ざつくばらんに伸びた髪がバサバサと暴れた。

根本だけ白く他は黒い逆プリン頭の少年は、そのまま胡座をかくと膝をついて深く息を吐いた。

「まさか……荒魂相手に居合なんて使う日が来るとは」

御式内

それは古流室内体術を居合術に派生させたものだった。

師匠に気まぐれで教えられた技がまさか役に立つなんてな……。こんな博打二度とやらねえ。

少年がぐでえつと地面に腕枕で寝ようと――

「飛鷹！ おい！ 飛鷹恭侍！ バイタルサインが途切れたぞ!! そちらはいつたいどうなっている!!」

投げ捨てた仮面から女性の怒号が轟いた。

ついさっきのはずなのに、遙か昔に話したつきりのように思える先生の声。

どうやらあの仮面は通信機能だけでなく少年の状態をチェックする機能まで付いていた模様。

少年はなんでこんなに遠くに投げてしまったのだろうと後悔しながら、這って仮面の元に向かい、先生にボソボソと報告を始めた。

「こちら飛鷹。荒魂の討伐に成功。先に到着していた刀使2名は気絶。怪我の有無は不明。自分は左肩を打撲。ノロ回収班と救急車お願いします。オーバー」

インカムの向こうで女性が息を呑む。

一歩間違えば、自分の教え子が2人死んでいたかもしれない事ショックを受けたのかもしれない。

「……そうか。すぐに救急車の手配をしよう。そこなら着くのに5分とかからないだろ

う。よく2人を守ってくれたご苦労だった」

「いえ、俺はやりたい事をやっただけです——それじゃ待ってます」
インカムが途切れ、少年は仰向けに寝っ転がった。

——弱いなあ、俺

少年 飛鷹恭侍は自分の強さにそれなりに自信を持っていた。

それこそ刀使の5割……いや、7割よりも強いと自負していた。

それが、荒魂一匹にこの体たらくとは情けない。

刀使の実力は本当にピンキリだ。下を見れば何故刀使をやっているのか不思議なくらい弱い子や臆病な子がいる。

だが

逆の上、刀使の頂点は凄まじい。

最強クラスの刀使は、恭侍が倒した荒魂を超える一軒家のように大きな荒魂をバツタバツタとなぎ倒し、荒魂の群れとの連戦を2時間や3時間平気でこなすと言う。

その頂いたと比べれば今の恭侍など足元にすら及ばない。

「遠い、遠いなあ」

荒魂出現の影響でわずかに街灯がつくばかりの真つ暗な道路。

見上げる星、見上げる月は星座の線すら見えそうなほど鮮明だった。

恭侍は月に手を伸ばし、その手をグツと握りしめた。

「強く……なりたい」

手を広げれば、そこには変わらず月が浮かんでいた。

回る若鷹、行く先いずこ

時は2月、在りし日の縁側。

どつさり降った雪は師匠ジジイの家の庭を、苅を乗せる前のシヨートケーキみたいに真っ白に、真っ平らに埋め尽くしていた。

雪像と化した松は実に寒そう。雪に埋もれた池の鯉も少し心配だ。

そんな庭を眺めていると、みたらし団子に乗せた皿を持ってジジイが俺の横にどかっ
と腰を下ろしてきた。

「ボウズ。お前、綾小路に行くらしいな」

「おう」

「……いくらオメエが強くてもよ、男じゃ刀使にはなれねえぞ」

「別に刀使じゃなくていい。刀使より強い剣士になればいい」

ジャキーンと腰の木刀を構えると、ジジイがポカンとオレを見つめた。

それから数瞬して、かっかっかと大笑い。

「なんだよ」

ぬっと伸びた骨張った腕が、俺の頭をワシワシと撫でた。

「あだだだだ！」

「お前つて奴は。本当馬鹿だなあ」

「馬鹿に決まつてんだろ！ でなきやこのご時世に総合武術なんてやるかよ」

総合武術 天然理心流源流 現行門下生一名。

剣術専門の分派である女流に、剣術指南の需要を全て持っていていかれてしまい、今や閑古鳥が年中鳴いているここの道場の未来はどう考えても暗い。

「ははは！ ちげえねえ！」

それなのにジジイはげらげらと笑って、上機嫌でみたらし団子をつまんでいた。

……

「てかオレにも団子よこせ！」

「嫌だ。オメエ、この前みたらしより3色の方が好きつつつたる」

「はあ!? それとコレとは話が別だろ！」



ダダダ ダーン

ダダダ ダーン

ベートーヴェン

交響曲 第5番 ハ短調 作品67

『運命』

「このように運命は扉を叩く」と言う言葉と共に冒頭の4音が有名なこの曲は、目覚ましにするにはインパクトがありすぎるかもしれない。

けど、こと寝起きでもしつかりとした受け答えが要求される社会人にとって、頭をシャキッとさせるにはちよつど良い。

まあ、俺まだ中学生なんだけどさ。

ちなみにコレ、スマホの着信音。

一番ヤバい人専用の着信音だ。

……

いやいや「だ」じゃない!

ふやけた頭が氷風呂に突き落とされたかのように一気に冴える。

慌ててスマホを手を取って電話に出る。

「はい! 飛鷹です!」

『ああ。朝早くにすまないな』

「いえ、大丈夫です！」

『そうか。実は明後日予定されていた長船おさふねでの新型装備の運用テストの予定が繰り上がった。今日の朝10時出発となる。準備をすませておけ』

「……今日ですか」

流石に明後日の予定を今日って繰り上げすぎだろ！

しかも連絡が今日って……。

いいや、考えるの止めよ。そういう職場なのは分かっている。

「いささか急ではあるが、問題はあるまい」

まあ、今日は俺、（1ヶ月ぶりの）全休ですからねー。

予定は無いですよー。

「先日の実験の報告書は郵送で良い。いいな」

郵送以外にどうしろと。

というか、いいな っつて、拒否権なんて無いだろうに。

……はあ。

「了解しました」

プー
プー

……切れる。

……

「はあ……」

ため息をついて空を仰ぎ見る。

見えるのは知ってる天井だけ。

警視庁特別刀剣類管理局局長 折神紫様。

それが今、俺に電話をかけてきた人。俺の上司の名前だ。

まあ、ざっくり言ってももの凄く偉い人。

天皇皇后陛下とまでは行かないが、代々国防に深く関わってきた一族の当主で、大抵の人に様を付けられるぐらい偉いお方である。

というか知名度で言ったら、天皇の本名とか、現職の警視総監の名前より確実に上。

20年前、1600人を超える死者、2万人を超える負傷者を出した「相模湾岸大震災」と呼ばれる大事件を治めた真正正銘の英雄でもあり、

今も毎日10件以上の会合を抱え、時間刻みのスケジュールをこなす「労働基準法？

この20年聞いたことのない単語だな」とか素で言っちゃうぐらい多忙なお方だ。

率先して働くリーダーの鏡ですね。
はっはっは

……はあ。

トツプが勤勉すぎるのも困り物だよ。

サボるよりはマシだけどさ。

ジャツとカーテンを開ける。

外はまだ薄暗い。

時計を見れば5時40分。

まったく、朝っぱらからご苦労様なこつてす。

買い置きのお食パンにビアハム、チーズ、マヨネーズを乗つけて魚焼き機に放り込む。
焼けるまでの間に顔を洗って、ソファの上に投げていたカバンの中から、人に見られ
てはいけない類の代物を金庫の中に放り込んでガチャン。

見られてはいけないけど手元に置いておかないとヤバい代物を、嚴重に封印して竹刀袋に放り込む。

後は押し入れから、昨日準備しておいた小さめのスーツケースを出して準備完了。

慣れた手つきはこれまでの経験の賜物。

この程度の理不尽、もはや理不尽のうちにすら入らないわ！

はっはっは！

……はあ、クソジジイが恋し、いや、恋しくはねえな。うん。

台所からピピッと電子音が鳴る。

芳ばしい匂いと共にパンが焼き上がったと魚焼き機から報告が入った。

『今日のお天気情報です。関東地方はおおむね曇りところにより雨が』

サクサクサクサク

今日もパンの焼き加減は絶妙。

ほんのり付いた焦げ目の香りが実にいい。

……何故ウチの妹は食パンを焼く時、必ずと言って良いほど焦がすのか。寮生活を始めてしばらく経った今でも理由が分からん。

……

ま、いいか

サクツとトーストを噛むと、ピアハムのサラミに近い強い塩気と香味がピリツと顔を見せる。次にチーズとマヨネーズがそれを優しく包み込み、ほどよい塩気に変え、口の中に調和の取れた味世界が広がる。

焼けたピアハムの薄いながらもしっかりとした歯ごたえが、サクサクふわふわのパンと相まって非常に美味！

これにピザソースを加えて簡易ピザパンにすると更に美味いんだが、残念ながら今は切らしてゐる。

ま、無い物ねだりをしてもしようがない。

『それでは続いてのニュースです。昨日夜18時ごろ、鎌倉市内に出現した荒魂ですが、周辺の刀使（とじ）により早期に駆除された結果、怪我人は出なかつた。とのことです』

「おつ、昨日の奴だ」

ニュースに流れたのは、出現場所が研究所の近くだったんで、急遽俺が実地試験として交戦した荒魂の話。（機密情報）

到着までに一般人の負傷者はいなかったようで良かった。

刀使は2人死にかけたけどな。

幸い、俺が間に合ったお陰で軽傷で済んだらしいけど。

刀使とじの女の子たちは、超法規的國家公務員であると同時に、ごく普通……とはいかないが、普通に学校に通っている。

彼女たちは日本各地に5校ある、中高一貫の刀使養成学校通称「伍箇伝ごかでん」に通う傍ら、刀使として、荒魂の討伐に勤しんでいるのだ。

で、俺はその伍箇伝を統括し、警視庁の対化物部門である「刀剣類管理局」を指揮する刀使の頂点「折神家」直属の査察官。

と言う名の伍箇伝共有の実験サンプルだったりする。

……途中までカッコ良かったのに最後の一言で台無しだな。

自覚はある。でも悲しいかな、それが真実。

現役の中学2年生。

中高生が人員のほとんどを占める刀使と同年代かつ、男でありながら（学生の範囲なら）3指に入るぐらいに剣術の心得がある俺は、日本各地で行われている刀使に関連する研究において、刀使ではない人間のサンプルとして極上だ。

そのため新しい技術が開発されたり、改良される度にデータ取りのため日本中をたらい回しにされるという訳。

まあ、その事自体は自分で望んだ事だから文句は無えんだけどさ。

研究所の予定を優先されるせいで、俺の曜日感覚は月月火水木金金ってなもんで、休みがなかなか貰えない。

学校も実質通信教育だ。ペンフレンド募集中。

紫様も、時折俺を呼び出しては、稽古という名の気晴らしという名の憂さ晴らしに付き合わせるしよ。

20年前の英雄でありながら、今でも現役の紫様は、剣の腕も最強クラス。いっつもボコボコにされちまう。

まったくさあ。

折神家本邸には山ほど警備の刀使がいるんだから、その子たちに付き合っ貰えばいいじゃんかよ。

閑話休題

俺は朝食を食べ終わると、小さめのスーツケースをガロンガロンと引きずって、竹刀

袋を肩にかけた。

早めに駅に行くためだ。

今は6時半ちようどになつたばかりでまだ時間にもずいぶんと余裕があるんだけど、生憎デスクワークが残つてる（昨日の実験の報告書）。

部屋にいるよりは、外で待つてゐる間にやった方が仕事も捗るだろうし、万が一これ以上早くなつた時、困る（前例有り）。

なら早いに越したことはないだろ？

まあ、一番の理由はあまり部屋に留まると可愛い妹分が遊びに来てしまう（そして駄々をこねる）からなんだけどさ。

ごめんな結芽。お兄さんは社畜なんだ。

そんな訳で、俺はそそくさと自分の部屋を後にした。

見て見ぬ振りを

やってきました岡山県瀬戸内市長船地区。

ここには伍箇伝の一つ。長船女学園がある。

管轄内に最先端技術研究機関があり、ソレに協力している関係で伍箇伝の中でも特に最先端技術に造作が深い子が多いのと、生徒の自主性を重んじる校風が特徴。

胸元の大きく開いたオレンジのベストと白いシャツを組み合わせたような制服は生徒に快活な雰囲気を与えている。

……妙に胸を強調しているように見えるのはきつと気のせい。心なしか胸が大きい子の割合が多いのもたぶん気のせい。

……

あー、ま！ そんな話は置いておこう！ うん！

今回の俺の目的地は長船女学園じゃなくて、その近くの研究機関の方なんだからな。

長船女学園なんてものが立ってるもんだから、長船市があると思っただけ、調べてみるとすでに吸収合併されていた。

有名だからと言って優先されるとは限らないらしい。瀬戸内の方が有名かもしれない

いけど。

ちなみに瀬戸内市は瀬戸内海に面しているけど、特別、瀬戸内海と接点がある訳では無いらしい。

東京デイズニールランド（千葉）みたいだな。

長船と言う場所は古くから刀鍛冶で有名とのことだが、実際のところ、現在の観光資源の6〜7割は舞妓さんならぬ刀使さんだったりする。

刀使の方が分かりやすく目立つからだな。

やっぱり学校が有るからか、他の町より刀使を見かけられるということ、舞妓さんほど露骨に脚光は浴びないものの、街を賑やかにさせるのに一役買っているそう。

特に長船女学園の制服は、

ミニスカの美濃関学院、胸の長船女学園

と（Web上で密かに）呼ばれるほど、伍箇伝の中では派手なデザインをしており人氣が高い。

（なおこの話題が上がると戦争になる）

そんな訳で瀬戸内市は、長船地区だけが長船女学園を中心に異様に栄えており、めばしいモノは本当に長船女学園しか無いのに、何故か物価も高いとのこと。（これは伍箇伝の学校全てに言えることだけ）

ははっ、なんでだろうねえ」

そんなウエブサイトでは豊かな自然と謳ってるくせにいぎ駅に着くとこれっぽっちもそれらしき自然が見当たらない長船地区の、長船女子園に一番近い駅。

そのまんま長船女子園前駅に、俺は到着したのだった。

改札を抜けると、そこには顔見知りの2人の刀使。

金髪碧眼。背も胸もおつきい方が古波蔵エレン。

桃色の髪をツインテールに結って、いつも犬耳みたいな癖毛のついてる小っちゃい方が益子薫。

薫とは昔からの友達。

エレンは薫の親友で、お父さんたちがみんな研究所に勤めている関係でよく案内役に選ばれている。

一応は任務扱いらしく、学校を休めるからジャンジャン来いと薫の言葉。

……勉強しろよ。

「よお、久しぶり」

「ハアイ！ お久しぶりデース！ 今朝、紗南先生から突然『今日、飛鷹が来るから迎えに行つてやれ』って言われた時は、ワタシすっごい驚きマシタ！」

「ははは、そっちもか。俺の方も今日の朝に突然『繰り上がった。行ってこい』って言われて、もうまたかーって感じだったわ」

「またかーって、キョージは割とこういう事あるんデスか?」

「あるねえ。日付が変わる以外にも、試験内容が変わったりとか結構よく」

「おお、それはブラックデース」

「流石に対応できないレベルの変更は滅多に無いけどな」

ま、とある学校の学長は俺を蛇蝎のように嫌っていて、よく実験と称して殺し（ガチ）に来るけどな！

そのせいで俺は、刀剣類管理局におけるほぼ全ての実験の中止権限を持っていたりする。マジで危険だから。

「絶対と云い切れない所に、深い闇を感じマース」

「何事にも絶対は無いからなー」

「そうデスねえ」

科学者の娘であり卵である彼女には何か感じる所があったんだろう。

2人でしみじみしていると、薫が俺の腕をつねった。

「お前らよー、研究所に行かないのか? 行かないならオレは帰るぞー」

「薫う、さつき起きたばかりなんデスから眠くなるとは思わなはずデスよ」

「いや眠い、めっちゃ眠い。春眠暁を覚えずつて言うだろ。オレの二度寝は朝焼けを覚ええないんだ」

「それ意味合ってるんデスか？」

「知らん」

「まったくコイツは

「薫」

指スパーン（デコピン）

「あづっ」

「お前の怠け癖も相変わらずだな。簡単な任務なんだからさっさと終わらせて、それから寝ればいいだろ？ OK？」

手にOKマークを作つてにっこり笑う。

当然、その指の正体は次弾だ。

「お、おーけーだ」

薫が額に手を当て、もう片方の手で待ったをかける。

「よろしい」

「おー、流石はキョージ。薫の幼なじみなだけはありませんねえ」

「俺はそんな薫とは親しくねえよ。せいぜい友達止まりだ」

薫と知り合ったのは、薫がジジイの友達のお爺さまの孫だったからで、会った回数なんて年に一回、合計しても両手で数えられる程度とかそんなもんだった。

そんなんじや幼なじみと言うには接点が少なすぎるだろう。

「……は？」

「えっ」

……？

「うん？ 俺、何かおかしい事言ったか？」

妙な沈黙。怒気を感じる薫に対して、心なしか嬉しげなエレン。

その瞬間、親友のはずの2人の視線が敵を見るように交わる。

ズウンと重力がざつと百倍になったような圧。

それが何故か俺にぶつけられていた。何故に。

重苦しい空気、軽口回路が無理やり落とされた俺の頭は真っ白け。

そんな重い空気を切り裂いて薫の背後から俺に飛びかかる影が一つ。

「ね、ー!!」

「うお!!」

俺の顔面に張り付き暴れる獣。

キツネリスとピカチュウを足して2で割ってプリキュア風にデフォルメしたような

生き物。

益子家の守護獣と呼ばれている薫のペット

「ねね」だ。

「ねね——!」

「うぶ、離れろつて、ア痛つ! 爪立てるなってアタタタタ」

俺の顔面で暴れるねね。

でもありがとうねね。お前のおかげで助かった。

あ、でも地味に痛い。助けて。

「……せいじゃオレは荷物車に運んでるから」

「あ、薫う、待つてくだサイよー」

おいおい待て待て、オレの荷物なんて小さいキャリアケースと背中の中の竹刀袋だけだぞ
!?

なんで2人ともそつちに行く!?

「いぢぢ、ちよつと!?! ねね退かしてくれねえか!?! 全然離れないんだけど!?!」

「知らん。じゃれてるだけだろ」

なんで機嫌悪くなってんだお前!?!

「うーん。キョージはちよつとデリカシーに欠けるのでねねのお叱りの言葉はしつかり

と受けとくべきデス」

え？ 何かセクハラ発言したっけオレ。

「嬉しがってたくせに」

「はて？ なんの事デシヨ〜？」

ねねに覆われた視界の片隅で2人が遠ざかる。

「ぬ、うわっ、お叱りの言葉って、俺はねねの言葉分かんね、イテ、イテテ、止めい」

「ね——!!」

俺がいったい何をしたって言うんだダダダダダダ。



「あ、ー疲れたー」

実験をすませた俺はあてがわれた部屋のベットに体を預ける。

まだまだ試作段階の新型装備は宇宙服みたいに重く、実験の結果もあまり芳しくなかった。

ま、まだまだ試作段階の技術なんだ。失敗する前提で実験に臨むべきなんだろうけどさ。

現在、長船女学園の近くの研究所で開発されている「ストームアーマー」（通称S装備）は、日本とアメリカが共同で研究している対荒魂用強化装甲だ。

御刀の材料である珠鋼を鎧に組み込み、刀使だけが使える特殊能力を普通の人でも使えるようにして荒魂と戦えるようにする装備だそうだ。

……もちつとカツコイイ名前の方が良い気がするんだが。

ガチャン

俺の部屋のドアノブがグツと下がって戻らず止まる。

「おーい、恭侍ー、いるかー」

「薫か。いるぞー、今開けるな」

ノブが下がったままのドアを引いて開けると、反対側のノブにぶら下がったねねの姿が。

「ご苦労だなお前も」

「ねー」

薫はノックの代わりにねねをドアノブに引っ掛けさせたらしい。

ねねを抱っこして、悪い飼い主を見る。

「なんだよ」

なるほど

「いや、なんでもない」

薫は自分の肩幅に近い大きなグレーのゲーム機を両手で持っていた。

そりやそんなもん持つてたら扉開けらんねえわな。仕方ないわ。

にしても、でっけえPSPだな。

アレ？ そもそもそんなもの発売してたっけか？

……

ま、いいか

「ほいよ、上がんな。空き部屋借りてるだけだから何も無いけどさ」

「知ってる」

俺が本日借りているのは長船女学園女子寮の空き部屋。

先に釘を刺しておくが誠に遺憾であるが。だ。

いつもは研究所のどっか空いてる部屋に泊めてもらってたんだけど、どうやらソレは、研究機関の重鎮にしてエレンのお爺ちゃんのリチャード・フリードマンさんが無理を言つて貸してくれていたようで。

運悪くお爺さんが居ない時に来てしまった俺は実験の後、「フリードマン氏の口添え

無しに、部外者を研究所に泊めるのはちよつと……」とやんわり追い出されてしまったのだ。

困った俺はエレンに相談し、長船女子学園の学長。真庭紗南先生の計らいで今日一日だけ寮の部屋に泊めてもらえることになったのだった。

（なお、事情を知らない学生に見られたら覚悟しとけよ？ とのお達し。怖ア！）

ちなみにその時、何故か薫にスネを蹴つ飛ばされた。解せぬ。

閑話休題

「で、何しに来たんだ？」

薫が両手で持ったゲーム機を掲げる。

「お前、オレが持つてるモノが見えてないのか？ ゲームだよゲーム。遊びに来たに決まってるだろうが」

「おう、そうか。じゃ、俺は報告書書いてるから好きにやってくれ」

きびすを返した俺の腕を慌てて薫が掴む。

ゲーム機落ちてでも知らねえぞ。

「待て待て待て待て！ どうしてそうなるんだ!? 一人でゲームするためになんでわざわざ他人の部屋に来る必要があるんだよ。それじゃまるで俺が意地が悪いみたいじゃ

ないか」

「違うのか？」

バン！

無言の張り手

左肩に炸裂

「肩イッタ!？」

「つたく、いいから、やるぞ。エレンはあんま付き合ってくれねえんだ」

「つつても、コレ一人用だろ？ 結局俺遊べないだろ」

そのPSPを2人でどう遊べと？

交代交代か、それでも二人三脚か？

どちらにしてもそこまでしてゲームする気にはならないなあ。

とか思っていると、薫が、ねねまでもが変なモノを観るような目で俺を見てきた。

その目やめろい。そんな目で俺を見るでねい。

「お前Switch知らねえのか？」

「スイッチ？」

うーん

「知らんな」

……

謎の沈黙。

ねねのアゴがカクーンと開いちゃいけない位置まで落ちている。

「……お前中学生じゃねえよ」

「そこまで言うか!？」

「ウチの爺ちゃんですら知ってるのに、中学生で知らない人間がいるとは思わなかった」

「お前自分の爺様何だと思ってるんだよ」

「田舎の爺ちゃん」

「そりやそうだな!」

ニンテンドーSwitch

テレビに繋がられて持ち運び可能。かつ一台にデフォルトでコントローラーが2つ付属していてすぐに対戦可能という次世代の携帯ゲーム機。

ただし、二つのコントローラーと共に持ち運びできるという利便性に重きを置きすぎ

てコントローラー自体の使い勝手はイマイチだったり。

「と言う割に随分動けてるじゃねーか」

「まあ、マルスはそれなりに使い慣れてたから……な！」

ガリリリリリ ドオン！

GAME SET

マルス WIN

「はあ!? 今オレ避けただろ！」

「俺もジャンプしたぞ」

「お前、マルスの切り札はずしたら自爆するの知っててやったのか!？」

「当たる気しかなかったからな」

お、今のは煽りポイント高けえ

「な! に……ぬぬぬぬ」

「ねの?」

「うるせえ! ……いいぜ、お前がその気なら、オレも本気出してやる。オレのイカでお前のマルスを真っ青にしてやるよ」

「マルスは元から青いぞ」

「そう言うことじゃねえ」

薫がスイッチの本体を俺たちの側に寄せる。

そしてそのまま薫が俺の横に座る。

……何故に

ギョツとしてみじろぎすると離れないように腕を掴まれた。

当然薫の仕業だ。

薫と俺の視線がぶつかる。

薫が俺を見つめていた。

「……なんだよ」

「お前の方こそ何だ。急に寄ってきて」

「画面が小さえんだ。もつと詰めろ」

「薫の方に画面寄せるだけで俺はいいんだが」

「それじゃフェアじゃないだろ」

……

「そうか」

ちよつと薫が何を考えているのか分からなかった。元からそんな察しの良い方では

なかつたけどさ。

カチャカチャ

「恭侍」

「なんだ」

カチャカチャカチャカチャ

「お前、研究所でエレンと何話してたんだ？」

ガチツ

……

「真庭学長に取り次いでくれた事へのお礼だ」

「オレが言ってるのは、休憩時間の直前にエレンと2人つきりになった時の事なんだが」

ガチツ

……

「そんな事あったか？」

「あった。休憩室に来る前に休憩時間の半分使っただろ」

「装備を外すのが遅れて「お前が装備を脱いでからが休憩時間の始まりだ」」

……

ドオン

「おいおい復帰ミスとはらしくねえな」

「エレンと何話したか思い出そうとしててさ」

「そうか。で、何話したんだ」

なんで知りたがるんだお前!?

もしかして精神攻撃の一環か!?

それなら効果はバツグンだコノヤロー!

いやまあ、別に話すのはいいんだ。やましい話でもないし。

でも、やましい話ではないんだけど

あんまり薫には聞かせたくない話なんだよなー

実は今回、俺の長船での実験が繰り上がった理由の一つに、フリードマンさんの不在が挙げられる。

リチャード・フリードマン博士は前述の通りエレンのお爺ちゃん、S装備の開発主任だ。

であるにも関わらず、彼は最近、研究所に居ることが少なくなっていて、たびたび行先不明で外出する事が増えているらしい。

S 装備は現在日本で開発されている——人間き悪く言えば『世界最新鋭の戦闘用パワードスーツ』だ。

当然ながら、そんなモノ外国が狙わない訳がないし、日本も奪われる訳にはいかない。すでに開発協力をしているアメリカとは、表面上手を取りながら裏では骨肉を洗う出し抜きあいが行われているそう。

なお、折神紫様が全戦全勝らしい。パネエ

そんな絶対に取りられてはいけない S 装備の設計に、最も深く関わったりチャード・フリードマン博士が、今回の運用実験に立ち合わないと言う事で、紫様は本格的に彼を訝しみ始めた。

開発主任が自分の傑作の情報を部外者に横流しするとは思えないが、万が一と言うことがある。

その確認（と言うか実質、脅し）を俺にさせるため、実験を数日繰り上げさせて、フリードマン博士を捕まえようとしていたらしい。

新幹線に乗った後で送られてきた情報ファイルにそう書いてあった。

まあ、結局フリードマンさんはいなかったんだけどな！

ちなみにも最近、瀬戸内市周辺で色々な臭い動きがあるらしく、自分で立ち上げた企業が成功して、かなりのお金持ちになっていくフリードマンさんなら、そう言った近隣の動きについても何か知っている可能性が高い（意味深）とのこと。

そんな訳で出来ればフリードマンさんと話をしたかったという裏があった。

そして、俺はその話をそっくりそのままエレンに流した訳だ。

二重スパイ？ いやいや俺はただ世間話をね。

まあ、エレンは頭が良いからきつと上手く情報を使ってくれるはずだ。フリードマンさんの孫と言うのもポイントが高かった。

対して薫は地頭は良いんだが、どうにも怠惰だからちよつと選外。

……それに、俺個人の感情として、薫にはそういったことには関わってほしくなかったりする。

それは本当だ。

「フリードマンさんの話だ。フリードマンさんに聞きたいことが有ったからその伝言をエレンに頼んでたんだ」

ふふふ、一流の詐欺師は嘘をつかない。

ただ真実の全てを離さないだけ。

「ふーん、そうか」

薫が興味を失ったように画面に顔を向ける。

ふう、乗り切った。

ドオン

「あ」

GAME SET

インクリング WIN

「よし」

「しまったー」

まあ、いいか

これでやっとならぬ話も

「そっかやお前髪染めたんだな」

なん……だと……っ!?

元黒髪が、髪を黒く染め直したのが何故バレル!?

「ああ、別に話さなくてもいいぞ。お前が一時期、剣術に飽きてはっちゃけて、それを反省して黒く染め直したってことも有るだろうしな」

なにおう!?

剣術には真面目な俺にその言い草とは。

その言葉、今すぐ否定したい。

否定したいが、不用意にたてつくとかウンターが怖い。この髪理由は割と重大な機密事項だからだ。

というかコレ完全に釣り餌だし。

「いやあ、最近仕事がハードでさ。久しぶりに妹に会ったら白髪増えてるって笑われちまっつてなー」

「お前そんなん気にしねえだろ」

薫の言葉が正鵠を撫でる。

ほんのちよっぴり掠めて囁く。

「お前、隠し事有るだろ?」

と優しく、寝物語を聞かせるように、自白を促してくる。

気分はさながら不貞のばれた旦那様。

いやまあ、薫の旦那様とかおこがましいにもほどがあるけどさ。

薫。お前は何故そんなに俺の事を知りたがるのかッ!?

なんでだ!?

分かん!?

女心なぞ特撮は教えてくれなかったぞ!!

「……ま、まあ、人前に出ることも増えたからかねえ。身嗜みに「ふーん」

薫の俺を見つめる目がいつになく痛い。

勘弁してくれえ……。

その後、俺は薫の二重の猛攻を、穴あきチーズぐらいボロボロになりながらも耐えきり、次の日の早朝、長船女学園を後にした。

なんか怖くなって逃げ帰ったとも言おう。

◇◇◇

人に見られないため& a m p ;始発で帰るために外が明るくなる前に女子寮を出たというのに、何故か俺の手には二つのお弁当が握られていた。

薫う、お前そんな早起きできたのかよ……。というか何故2つ……。

「どつちのが美味しかったか、後で感想くださいネ？」

バチーンとウインク一つ。並の中学生ならイチコロだ。俺は並の中学生じゃないから致命傷で済んだがな。

はっはっ……

ゾッ

背筋が凍った。

「どうしたんだ？　早く電車乗らねえと車掌が困ってるぞ」

「あ、ああ」

薫に促されるまま電車に乗った瞬間、待つてましたと閉まるドア。

後ろに流れる2人の姿。

手を振るとエレンがにこやかに振り返してくれる。薫の方は気怠げに片手を挙げただけ。ははあ、こういうところにも性格が出るなあ。

とか思っている間に電車が曲がり2人が見えなくなる。

さて、次の任務はなんだろうな。

できるなら、その前に振替休日をも所望するけど。

見て見ぬ振りを〈益子薫〉

うつらうつらと夢現^{ゆめうつら}。

遊びに行った山からの帰り道。

紅茶色の空。気の早い月がポカンと浮かび、カフェオレみたいに昼と夜がトロリと混ざる黄昏刻。

「腕、痛くないか？」

「足が痛いぞ。おんぶしろ」

「してんだろ」

ぶつきらばうな物言い。

それでも、一人で山奥に消えたオレを、探しにきてくれたコイツはなんだかんだ優しい。

それ以上に、怖いもの知らずとも思うけどな。

でも、崖の下でぐずっていたオレを迎えにきてくれた時は、本当に嬉しかった。

太陽が山の影に入った瞬間、カアッと森が真っ赤に染まる。

真っ赤な空に真っ赤な森、目がチカチカしてきて目を瞑ると、目蓋が二度と持ち上が

らなさそうなぐらい重くて、そのままスーッと意識が遠のく。落ちないように手を回して恭侍を抱きしめる。

「お前、暖かいなあ」

「そりや、薫の無茶に付き合わされてたらな」

「そういうことじゃねえ」

擦りむいた膝の痛みを忘れて、コクリコクリと舟を漕ぐ。眠い。けど、腕の力だけは絶対に抜かない。

ギユツと抱きしめたコイツの熱。

暖かい……コイツは……オレだけのモノだ。



「よお、久しぶり」

「久しぶり」

「ハアイ！ お久しぶりデース！」

オレと恭侍の間にエレンがヒョコつと身体をねじ込む。

ギツ

エレン、恭侍はオレの方を向いて言つてただろ。割り込むんじゃねえよ。

「薫？ どうした？」

「なんでもない」

一年ぶりに会つた恭侍はすげえ甘つたるい匂いがした。品の無い砂糖菓子みたいな匂いだ。

それと荒魂の匂い。

どちらにせよ酷い匂いに変わりはない。

その匂い、誰に付けられたんだよ。恭侍はオレの「幼なじみ」だぞ。

お前もお前だ。気付け馬鹿。

オレの知らない所で知らない女にべたべたされるのは分かる。恭侍はモテるからな。いつも一緒にいれない分は多少は見逃してやるよ。

けど、だからつてオレに会うのにそのまま来るのは失礼つてもんだろ？

まったく、身嗜みには本当頓着しねえのな。それとも頓着する時間が無いのか？

なんなら昼寝でもオレは構わないぞ。その間にオレが服を洗つてやる。

ウチはそれなりに名のある家だ。花嫁修行だつて実はそれなりにやつてんだぜ？

お前以外に見せてやるつもりはないけどな。

そうだ。それか実験をサボつて遊びに行くか？ オレはそれでも構わねえ

「あづつ」

「お前の怠け癖も相変わらずだな。簡単な任務なんだからさっさと終わらせて、それから寝ればいいだろ？　OK？」

「まったく、冗談だろ？　それぐらい分かれよ。」

「おー、流石はキョージ。薫の幼なじみなだけはありませんねえ」

「いやエレン。コイツは幼なじみ力がまったく足りてねえ。」

「この朴念仁の唐変木は、人の気持ちちつてのが全く」

「俺とそんな薫とは親しくねえよ。せいぜい友達止まりだ」

……

ナンダヨソレ

心が軋む。
骨が軋む。

無意識にアイツの首に手が伸びた。

憤怒、困惑、恐怖、悲嘆

混沌とした想いが手に宿る。

刀使の特殊能力「八幡力」

その力は鋼鉄を素手でねじ切る。

この馬鹿の首を胡瓜みたいにへし折ってしまおうと手が伸びる。

スカッ

まるで分かってたみたい簡単に躲された。

……

……分かってたみたい

ああ、そういうことか！

お前はオレと親密な関係にあることを知られたくないのか！ それに、実はオレと幼なじみ以上の関係になりたいと思ってるんだな？ 仕方ない男だなあ、そういうのはキチンと人気の無い場所で言うべきだろ。

まったく、予め言っておけよ。危うく殺しちまう所だったじゃねーか。

なあ？

◇◇◇

恭侍は嘘が下手だ。

「お前の先生は綾小路の学長なのか」

「ああ」

違うらしい

「危ない実験はやらされてないか」

「ヤバいのは断ってる」

けど危ない実験はやってる

エレンとの内緒話。

髪の色のこと。

その服、入学時に貰った奴じゃないだろ？ その腕の傷はどうしたんだ？ お前荒魂について何か知らないか？ そーいや足捌き変わったな？ 昨日夜遅くまで起きてたんだろ？ 眠くないか？ 腹の怪我痛いだろ？

え？ なんでそんな事まで分かるんだって？

分かるに決まってるだろ？ お前はオレの幼^大な^切な^人なんだからさ。

ああ、後一つ良いか？

前までご執心だった女はどうした？

なるほどなるほど、治ったのか。良かったな。

……嘘だな

嘘。嘘。嘘。嘘。嘘。嘘。嘘。嘘。嘘。

オマエノ答エ、ゼンブ嘘ダ

……はっはっは

お前、努力を人に知られるのが嫌いだもんな！

どんな辛いことでも自分から助けを求めたりしねえもんな！

分かるんだよ

当然だろ？

オレとお前の仲なんだからよ。

嘘じゃないからバレないだろう。だろ？ お前、本当に隠す気あんのかよってぐらい

分かりやすいぞ。

そんなんで騙せると思ってたんのかよ。

思ってたんだろうな。分かってる。

お前が隠しているのが何に関係しているのか

お前がどんな状況下にあるのか。

何もかも分かる。

全部「折神家」が悪いことだって分かってたんだ。

だから、お前の言葉が嘘だらけなのも許してやるよ。

その事をオレに相談しないことも

エレンにだけ内緒話をしたことも

全部

全部

許してやるよ。見栄を張らせてやるのも女の甲斐性だもんな。

お前は嘘も隠し事もするけど、騙しはしない。

その違いは重要な違いだ。

込められている思いの違い。お前の嘘に込められているのは優しさだ。

オレに心配させまいって言う思いがこもってる。

嬉しいぞ。本当に。

だからオレもそれに答えたい。

折神家をぶつ潰して、お前がもう嘘をつかなくてもいいようにしてやる。

そしたら一緒だ。ずっと一緒だ。

お前はオレの一番大切な人で、オレはお前の一番大切な人だから。

孤高の片鱗

広い広い剣道場。

日が傾き、道場に差し込む光が赤みがかつてきた頃。

何十人もの門下生の注目は、中央で向かい合う2人の少女に注がれていた。バン！ と袋竹刀（竹の棒に布を被せた竹刀の一種）がぶつかり合う。

ほんの少しだけ鏝迫るが、あっけなく体格の差で小さい方の女の子が弾かれた。後退した少女を追い、背の高い長髪の女の子が、間合いを詰めて攻めたてる。

ショートヘアの小さい方の女の子は防戦一方。

のはずが、次の瞬間、技の間隙を突いた切り上げで相手を退かせ、形勢を押し戻した。

「可奈美ちゃん凄い！」

「絶対あたしより強いよ！」

道場の入り口側。低学年の方から小さく歓声が上がる。

片や高校生。現役の刀使。

片や小学生。つい最近御刀に認められたばかりだという少女。

本来、試合にすらならないように思える組み合わせ。

稽古の終わり際に師範に指名されて実現したこの異色の立ち合いは、すぐに小学生の子が負けて終わるだろうという大多数の門下生の予想を覆して、通常では考えられないほど長引いていた。

立ち合っている最中の2人の表情はまるで正反対。

攻めている側の長髪の高校生の顔は、これが実戦であるかのように険しいのに対して、

後手にまわっているはずの、ショートヘアの小学生「衛藤可奈美」ちゃんの方は、まるで誕生日ケーキを前にした子供のように目を輝かせている。

表情だけ見れば、どっちが優勢なのか分からない。

……いや、実際、真実に優勢なのはどっちなんだろうな。

頬を掠めた袋竹刀に怯えず、むしろ嬉々として反撃に転じる少女を前にして、俺はそう思わずにはいられなかった。

折神紫様の命令で、全国の流派の視察なんて雑用（と言ったら失礼だが）をやらされていた俺は、ある時、中部地方で大きな勢力を持つ柳生新陰流の道場にお邪魔させても

らつていた。

師範曰く「観てもらいたい娘がいる」と。

師範の悪戯心か、観てもらいたい子を知らされないまま、稽古を観ていたが、いったい誰がその子なのかは、異様なほど簡単に分かった。

ああいうのを別格と言うんだろう。

本来格上の高校生を相手に、全ての攻撃をギリギリで凌ぎ続ける可奈美ちゃんの動き。

一見ギリギリの綱渡りを奇跡的に連続で成功させているように見える彼女の一举手一投足。

俺はその姿に違和感を感じた。

その違和感の正体を掴むため、彼女の動きに集中していると、不意に肩を叩かれた。

振り向くとそこには2人の師匠、柳生新陰流師範のお婆ちゃん。

「どうですか。あの子は」

間違いなく可奈美ちゃんの事だ。

もしここで

「ああ、あつちの高校生の子のことですね」

なんて言おうものなら、俺は即座に道場から叩き出されてしまうだろう。

今日の寝床を掛けてもいい。(掛かっている)

言つては悪いが、可奈美ちゃんの相手の子は平凡だ。

技のキレイや判断の速さは、流石に実践を経た高校生だとは思うが、それは年の功であつて、本人の才能は中の上と言つた所。

それ故に、そのどれも持ち合わせていない可奈美ちゃんの唯一持つ才能がかえつて際立つて見えるのだ。

一通り可奈美ちゃんの動きを見たであろう俺に向かつて値踏みをするようにそう聞いてきたのは、俺の見る目がどれほどのものか試そうとしているに他ならない。

折神紫が自分の代わりに遣わした弟子。

一応はそういうことになっているが、女所帯である刀剣類管理局に紛れ込んだ男など、たとえ後ろ盾があつても信用に値しない。

なんとも世知辛いが、そういうことなんだろう。

まったく、肩身が狭いね。

慣れてるけどさ。

と、無駄話は置いておいて

普通に考えれば、あらゆる能力で圧倒的に上回っている高校生相手に、いくら才能が

あると言っても、小学生がこうして食らいついていること事態が、奇跡に近い。

それだけでも可奈美ちゃんの実力が相当なもので、伸び代に恵まれていることが分かる。

だけど、それどころじゃないようだ。

衛藤可奈美ちゃんの力は。

可奈美ちゃん自身は試合を楽しんでいても油断は無い。

一進一退の攻防に本気で全力を注いでいる顔だ。

けど、その実、可奈美ちゃんは相手のどんな攻撃を受け、身体を動かされても、決して体幹がぶれることも、動きが乱れることも無かった。

……その事はもしかしたら、本人ですら気付いていないのかもしれない。その事に気付いている人間は、道場内に殆ど居なようだった。

俺が見る限り、気付いているのは、俺と彼女たちの師匠である師範だけだ。

他の子は呑気に上辺を観戦してるだけ。

それでも対戦相手の子は何か様子がおかしいと感じているのか、可奈美ちゃんと剣を合わせるたび、戸惑い僅かに首を傾げている。

可奈美ちゃんの荒削りながら相手を完全にいなしきっている動きを見ていると思わずグツと拳を握ってしまう。期待か興奮か、それは俺にも分からない。

「……強い。今の段階ですら、俺が今まで見た剣士の中じゃ五指に入るぐらい強い」
可奈美ちゃんの真の実力。

高校生を前にしても底を見せない才気の泉。それは一体どれほどのものだろう。

「……そうですか」

だいぶ主語を省いてしまっていたが、どうやら俺は合格したらしい。

俺の言葉を聞いた師範は、そのまま憂いに満ちた瞳で小さな少女を見つめていた。

本来、刀使同士の試合は、長引かない。

基本的に一回勝負。

生身で木刀、または竹刀を使うため、一度負けた側の身体へのダメージが大きく、そう何度もやれるものではないからだ。

そしてそれ故に緊張感も絶大。

一瞬の隙が致命傷になるため、極限の集中が続けられる僅かな間で決着がつくことがほとんどだ。

だが、もしも

それが長期戦になると言うのなら、

それは

双方の実力が高度に拮抗しているか

圧倒的な実力差を持つ相手がわざと手を抜いているかの二択だ。

長く続いた試合に決着を着けようと長髪の少女が袋竹刀を大きく振りかぶる。
ダン！ と音が道場内に響き渡るほどの力強い踏み込み。

そこから繰り出される全霊を込めたであろう乾坤一擲の袈裟斬り。
可奈美ちゃんは、その一撃を僅かに肩を入れるようにして僅かに半身になる事で躲してみせた。

呆気ないほどに容易く躲してしまった。

そして、肩を入れた勢いのまま

一回転して横なぎの一閃。

ガツと、二本の袋竹刀がぶつかる。

長髪の少女はなんとかその一撃を受け止めるが大きく体勢を崩す。

道場内が一瞬沸き立つ。

……

しかし、そこで失速。

可奈美ちゃんは相手が体勢を崩した時点で剣を止めてしまっていたのだ。

可奈美ちゃんが二撃目を繰り出す前に少女が体勢を立て直してしまう。

『ああー』

道場内に可奈美ちゃんが勝機をこぼしたことに對するため息がこまりました。

「ああ——」

この試合はあまりにもあんまりだ。

素人目に見れば拮抗しているようにも見えるかもしれないが、分かる人間からすれば、こんな惨い試合は無い。

教導試合の方がまだ見れる。

今の行動で、俺の予想は確信へと変わった。

可奈美ちゃんは手加減している。

特に今の攻防なんて、幼稚園ぐらいの子供にお父さんが腕相撲で悲鳴を上げるほどに

白々しい。

それを小学生が高校生に向かってやっていると言うのだから、

この試合の物悲しさに拍車をかけていた。

先程の攻防は、袈裟斬りをギリギリで避けた時点で、胴を薙げば決着がついていた。

それを可奈美ちゃんはやわぎわぎ当たらないように一歩下がりがりながら身体を回転させ、大振りな一撃を放ったのだ。

相手の防御が間に合うように。

さらには、防御したものの衝撃で体勢を崩した相手に対して、追い打ちを仕掛けなかった。

きつと、いや、絶対に、手加減していたとしても倒しきってしまうからだろう。

周りの子供たちは口々に「惜しかった」だの、「今チャンスだったじゃん」とか言ってるけど、そんな事、可奈美ちゃんが一番分かっているんだ。

……分かっているはずなんだ。

ことココに至るまで何十回と可奈美ちゃんの実力なら勝つチャンスは有った。それなのに、一つとして可奈美ちゃんはソレをモノにしてこなかった。

その事から導き出される真実は一つ。

可奈美ちゃんは試合の終わりを望んでいない。

再び2人が向かい合う。

初めの頃から更に格差のついた覇気の違い。

可奈美ちゃんの実力を理解し、今にも泣き出しそうな顔をした高校生と、あいも変わらず眩しいぐらいの笑顔を見せる可奈美ちゃん。

もし俺の手元にタオルが有ったなら、きつとすぐさま投げ込んでいたことだろう。

可奈美ちゃんのそのウズウズとした表情からは彼女がまだ戦い足りないと思ってるのがヒシヒシと伝わる。

彼女の勝ち負けよりも、相手の引き出しを全て観たいという欲望が見てとれる。

その想いに悪意はこれっぽっちも。

1ミクロンたりとも無いんだろう。

でも

身の丈を遥かに超えた期待を押しつけられるのは、相手側からすればたまったもんじやない。

彼女がしていることは、言うなれば、刃牙道で宮本武蔵が語った望み。

斬り殺した相手に「もう一度立ってくれ」と言っているようなものだからだ。

……その願いは、こんな道場試合に持ち込むには余りにも重く、余りにも

「惨い……」

「はい。あの子の剣は貪欲すぎるのです」

その後、しばらくじやれあいのような攻防が続き、

終わりの時が来た。

ガツン バチバチバチ

地面に投げられた袋竹刀が静かな道場に大きな音を響かせた。

「もう嫌!!」

長髪の少女が突然袋竹刀を投げ捨てて観客席に逃げてしまったのだ。

少女はそのまま仲が良いのであろう友達のお腹に顔をうずめて泣きだしてしまった。

駆け寄られ抱きつかれた友達の方は、何がなんだか分からず困惑した様子。

いや、道場全体が優勢だったはずの高校生の女の子が、突然試合を放棄したことに困惑していた。

当然その中には可奈美ちゃんも含まれている。

真実がどうであれ、彼女は意識の上では全力で立ち合っていたのだから。

相手が突然試合を捨てれば驚きもする。

可奈美ちゃんは袋竹刀を構えたまま呆然と立ち尽くしていた。

この突然の事態に一番ショックを受けたはあの子かもしれない。

……もしかしたら、原因が自分だと理解していないのかもしれない。

……

「勝者、衛藤」

どうすれば良いのか分からず、オロオロしていた審判役の子に代わり、師範が声を上げて場を閉める。

瞬間、わっ！ と低学年側が沸き立ち、何人もの同期生が可奈美ちゃんの元に駆け寄る。

「凄いよ！ 那由多先輩に勝っちゃうなんて！」

「なんで勝てたかわかんないけどとにかく凄かった！」

「……あはは、ありがとう」

「もー、何よその顔はー」

ワイワイと騒がしい団子が出来上がるが、その中心に立つ可奈美ちゃん的笑顔はどこか煤けている。

その様子を見て、俺の隣に座る師範の顔がくしゃくしゃになった。

「……私たちでは、あの子を満たしてあげられないのです」

何かを堪えるように、絞り出すように師範は言った。

今日一日、稽古を見ていたが、可奈美ちゃんの相手だった高校生の女の子は、可奈美ちゃんを除けば、今日道場に来ている子の中では一、二を争う程度には強かった。

それがこの有り様なのだから、可奈美ちゃんの剣は、他の門下生とは別次元に有るとしか言えない。

師範のお婆ちゃんもその事を理解しているのだろう。

自分たちでは可奈美ちゃんと勝負にならないのだと。

冷えた頭でそう結論を出していたのだろう。

けど、本来部外者であるはずの俺に対して、いったいどんな想いでその事を言ったのか。

どれほど理屈として、現実として自分たちが至らないことを認識していたとしても、それに心が納得するかどうかは別の話だ。

師範の握った拳がやけに赤く見えるのは、日差しのせいだけじゃない。

悔しいのだろう。

悲しいのだろう。

師範の声からは、娘が望むモノを、娘に必要なモノを、与えられない歯痒さを感じた。

そしてそれ以上に、

並び立つ者を持たない我が子の行先を案じる親としての情を、俺は感じていた。

お婆ちゃんが俺の手を握り、乞い願うように言う。

「あの子と……立ち合っていただけですか？」

その言葉の意味を、俺はきつちり受け取った。

……受け取れたはずだ。

お婆ちゃんは、あの子に勝ってくれと、

あの子を一人にしないでやってくれと。

そう言ったのだ。

「俺なんかで良ければ」

俺はお婆ちゃんの手を握り返し、すぐさまそう答えた。

孤高の片鱗 〈衛藤可奈美〉

剣術が好き。

誰よりも何よりも私は剣術が大好きだ。

相手の一太刀一太刀に込められた想い。勝つために一太刀一太刀に秘めた思い。それを見て聞いて感じて感じて自分の一刀に答えを乗せて返す。

その繰り返し。

立ち合いは対話だ。

剣術でならどんな人とだつて分かり合える。

一度立ち合えばその人がどんな人か分かる。

相手が剣術をどう思っているのか、その向こうにあるその人の本心さえも、剣は教えてくれる。

強く攻めてくる人は、私の実力に期待してくるような向上心が強い人だったり、はたまた剣術そのものはそんなに好きじゃないけど、相手と激しくぶつかり合うのが好きな人だったりする。

反対に絶対に先手を取らない人は、とにかく慎重派な人のこともあれば、後の先には

絶対の自信があるって感じの自分の得意不得意をハッキリと理解してる人だったり。

そういう、人それぞれの剣を知るのが、私は最高に楽しいって思う！

……

それなのに

それなのにどうして最近、剣術がつまらないんだろう。

◇◇◇

師範に言われて、高校生の先輩と対戦した。いつもは同年代の子だけとしか立ち合えなかったから、師範のその提案は本当に嬉しかった。

先輩の剣は早くて、重くて、キチンと先の先まで考えて打ってきてて、先輩の思い通りにならないようにいなすのはとっても難しくて大変だったけど、とっても楽しかった。

袋竹刀が鏢迫り、頬を掠める。

もつと、もつと

先輩の本気はそんなものじゃないはず！

まだ、隠し球があるんですよね！

まだまだ！ 試合は始まったばかりですよ！

新しい技を、もっと鋭い突きを、もっと早い太刀を！

もっと

もっと！

「もう嫌！」

……え？

「勝者 衛藤」

え？

「おめでとう！ 可奈美！」

私は……まだ……

満足してないよ……

◇◇◇

「勝者 衛藤」

「やっぱり可奈美は強いね！」

「うん、ありがとう」

「勝者 衛藤」

「くーっ、ダメだったかー」

「あそこは無理に攻めちやダメだよー」

◇◇◇

高校生の先輩と立ち合いをした次の日、私は師範に呼び出された。

他の子に聞かせにくい話なのか、道場の奥の畳部屋。

部屋に入った私を正座をした師範がジロリと睨め付ける。

怒ってるわけじゃないし、ただ来た私に視線を向けただけなんだろうけど、やっぱり

ちよつと怖い。

「衛藤さん。貴女には切磋琢磨する友が必要です」

「友？ 友達なら、この道場に」

師範が苦々しげな顔をした。

え？ 私何か悪いこと言ったかな。

「馴れ合う友ではなく、高め合う好敵手が、今の貴女には必要なのです。……貴女も、そ

の事に気付いているはずですよ」

私は師範の言葉に驚いた。

いつも門下生のみんなに優しい師範が、こんな明確に人を貶す……、じゃない。貶め

る……。酷い事を言ったのは初めてだったから。

そりやあ。うん。たしかに、みんなは単純な剣術の腕はまだまだかもしれないけど、でも私は、友達として、みんなの事を悪く言わないでって、たとえ相手が師範でも言うべきで

「――」

口が金魚のようにパクパクと動く――言葉は何も出なかった。

……それなのに私は黙ってしまった。

――うなずきかけてしまった。

俯く私に先生が哀しそうな顔をする。

分かっているって顔。……そんな顔しないでよ。

最近のみんなは同じ剣をするようになっていた。

私に何かを見せるんじゃないやなくて、私の剣を知ろうとする剣。

それ自体はいいんだけどね。その事自体は。

問題は、その後が無いということ。

私に勝つために私を知ろうとしてるんじゃないやなくて、強くなるためにまず私を知ろうとしてる。

ぶつけるものも無く、ただ私に剣を教わりに来てる事が問題なんだ。

私がやりたい立ち合いは、互いの想いを練り上げた剣技をぶつけあって相手の剣を学んで、もつともつと強くなる事なのに、最近はそういう、言っちゃ悪いけど、心が踊るような立ち合いができていない。

勝つのは必定。現実の相手が空想や夢の相手よりも弱くなっているのが真実だった。

でも、でもさ。

だからって、友達を弱いからいらなんて言えないよ。

だって、みんな本当にいい子たちなんだよ。私の練習に付き合ってくれるし、練習の帰りには一緒に遊ぶし、流行りのスイーツとか教えてくれるし。

「貴女に会わせたい人がいます。折神家から来た天然理心流の飛鷹恭侍さん。在籍している綾小路武芸学舎では刀使を含めて一二を争う実力を持つそうですよ。立ち合いも了承してくださいました」

瞬間、私の頭から友達の事がスコーンと落っこちた。

「本当ですか!?!」

天然理心流!

千変万化臨機応変を極意とする幕末、新撰組の隊長筋の多くが使用したとされる剣術！
柳生新陰流において突きは死に太刀。次の剣を考えない最後の太刀であるのに対

して、天然理心流の突きは如何に避け辛い突きを出しつつ次に繋げられるかを考えて作られていて、有名な平突きは、突きの後に横なぎに派生できるといふ利点がある。他に有名な技と言えば、やっぱり沖田総司の三段突きとも呼ばれる無明剣！ あ！ もしかしてその人も使えたりするのかな!?

師範がコホンと咳をした。

ぽーんと飛んでた思考が現実引き戻される。

師範はさつきとは逆に、なんだか面白いモノを見るような目で私を見つめていた。

「……衛藤さん。素振りには道場でやってくださいね」

師範の冷ややかな声。いつのまにか手に握られていた袋竹刀。

い、いつのまに!?

「あー！ しっ、失礼しました！」

素早く、それでいて極力音を立てないように畳の上を足を滑らせるように歩いて、私は部屋を後にした。

やりたい事とやるだけの元気がもりもり湧いてきて居ても立っても居られなかった。今日は久しぶりにいい鍛錬ができる予感がした。

雛鳥の翼 〈衛藤可奈美〉

刹那、三合。

私と飛鷹さんの竹刀が激突し、火花を散らす。

突きを躲し、返しの逆袈裟斬りを受け流されて、互いに振るった竹刀がぶつかり電気が弾けたような音を立てる。

いつもとは一味違う濃密な剣技の差し合いは、私の心を充足感で満たしてくれていた。

師範の紹介してくれた飛鷹恭侍さんは、私の想像を遥かに超えて強かった。

その剣は重く鋭く、精密で、判断を見誤れば一瞬で負ける。

その強さは私を持ってして瞬殺続き。

立ち合って2日目の、3度目の立ち合いでようやく飛鷹さんの太刀筋に身体がついていけるようになったほど。

飛鷹さんの剣を一步下がって様子を見つつ、切り返すタイミングを見定める。

素早く流れるような途切れる様子を微塵も見せない連携の数々。

不用意に打ち合えば、即座に竹刀越しに重い一撃を叩きこまれて動きを封じられてしまう。

それを起点として展開される剣劇は終始劣勢。反撃の機を伺う間もなく嵐に巻き込まれるように押しつぶされて負けてしまう。

実体験だから間違いない。

だから、この攻撃に対して私は人の居ないがらんだりの道場の広さを惜しみなく使つてどんどん後ろに下がる。飛鷹さんの連撃と打ち合うのを拒否して機を待つ。

元来、柳生新陰流は後手が強い流派。だから私もジツと耐え忍ぶ。私は本気で勝ちに行く。

二つ躲して一つを受け流し、一つを受けて、また避けて。

飛鷹さんのペースに乗らないように細心の注意を払う。

こんな挑戦者の気分は久しぶりだった。

数十回の太刀を一息で放った末に飛鷹さんがようやくやくほうと息をついた。

その一瞬を私はずっと待っていた！

「ハッハー」

飛び込むように距離を詰めて鋭く切り上げる。息をつくため下段に沈めた竹刀でこ

れを止めるのは至難のはず！

けど、私の切り上げは飛鷹さんの竹刀の根元にぶつかり、飛鷹さんの竹刀にそって擦り上がる。

竹刀を手元に戻すのが早い！ いや、元から私が攻勢に出るのを予期していた!?

いや、反省は後！

今はそのまま上段に繋げる！

振り上げた竹刀。

袈裟斬り！ だけど当然のように受けながされて切り返しが迫る。

逆袈裟……は威力が足りない！ ほんの少し遅れるけど斬り払いで！

私の横なぎの一閃が飛鷹さんの太刀と真っ向から衝突して、ジーンと手に痺れが広がる。

飛鷹さんと目が合った。

ちよつと驚いた表情。

でも、その顔は一瞬。すぐにぼおつと遠く見るような顔に戻った。私心を置いた剣士の瞳だ。

飛鷹さん、我が強いのに切り替えが物凄く早い！ 先生たち以外でこんな人始めてだよ！

間合いを取った飛鷹さんの型が変わる。

今までの飛鷹さんは、天然理心流特有の中段の構えに刀を横に寝かせた平晴眼の構えを多く使っていたけど、今は剣術の基本となる五行の構えのどれとも違う、上段と中段の中間の高さで、八相の構えにしても崩れたような中途半端な構えをしている。

——なんでそんな

変な構え

なんて思った刹那、私の腕がねじれた。

音もなく私を間合いに収めた飛鷹さんの一太刀が私の竹刀を強く弾き、竹刀が吹っ飛ばされたからだった。腕は曲がる時の車のハンドルのようにねじれ、私はバランスを失った竹馬から降りるように大きくたたらを踏んだ。

飛鷹さんの目に合わせて、私の竹刀を弾いた飛鷹さんの竹刀のもの打ち（刃部分）がギリギリと私の方を向く。

このままだと袈裟斬りで真っ二つだ。

けど私の体勢は完全に崩れている。この勝負、私の負けだ。

……

でも——

まだ負けたくない!!

その想いが私を動かした。

構えを完全に解いて、しゃがんで飛鷹さんの横を走り抜けて危機を脱する。

みつともなく逃げた私。

それを見て、飛鷹さんが笑った。

「良い判断だ！　そう、斬られなきや負けじゃない！」

え？　褒められた？　怒られると思つてたのに。

こともないように飛鷹さんが下段に構える。

「そんな不思議そうな顔すんなつて。ここは格好つける試合の場じゃないんだぜ？　俺

だつて師匠とやる時は、マズくなつたらそうやって仕切り直してたからな」

「そうなんですか？」

「おうとも、三十六計逃げるに如かずつてな。それに、逃げるほど負けず嫌いの相手に逃

げられるつてのは気分が良いもんだ」

飛鷹が晴眼に構え直す。

その視線はまた、あの遠くを見る目に変わる。

「けど、次は無い」

人が変わったように底冷えするドスの効いた声が道場に響き渡る。

それなのに私の胸はギューって熱くなった。

飛鷹さん本気だ。今の一太刀を避けられてちよつと怒ってる。

きつと、いや、必ず次はもつと凄い剣が来る！

もしかしたら、次の剣で私はボッコボコにされちゃうかもしれない。

でも、それが。

こんなに強い人の本気を見れるのが、私は嬉しくてたまらない！

「窮鼠猫を噛む。もしかしたら私が勝つかもしれませんよ！」

「やってみろ」

ゴオツと飛鷹さんの鬨気が膨れ上がる。

アハツ！ 火に油注いじやつた！

凄い！

怖いぐらいの気迫！

それなのに、私は次の一太刀が楽しみで楽しみで仕方がなくて、ニヤニヤが止まらない!! どうしよう!?

ああ、飛鷹さん怒ってるかな？ こんな顔してごめんなさい。でも、本当に楽しみなんです!!

一歩一歩踏み込む度に飛鷹さんの構えが変わる。

型を無闇に変えるのは咄嗟の判断に迷いが出るから止めておけて昔師範に言われ

たことがある。けど、飛鷹さんはきつと迷わない。だから一步ごとに私に斬りかかる上で最速の型を常に構え直しているんだ。

その場その場の一度限りの型を瞬時に使いこなせると断じれるだけの実力と、それに裏打ちされた自信から来る圧力は、普通の人なら判断力を鈍らせて、ただでさえ大きい実力差を更に広げてしまうだろう。

だけど、私には逆効果。飛鷹さんが型を変えるたび、一步踏み込むたびに頭が透き通るように冴えていく。

こんなにわくわくするの初めてだよ！

一 足一刀の間合いまで

三

二

い

バァン!!

痛あ——

肩が軋んだ。

間合いに入る瞬間、飛鷹さんの重厚な一步が突然消えるように加速した。

咄嗟に構えた竹刀が飛鷹さんの一太刀を受けて私の肩に食い込む。

でも飛鷹さんの太刀を受けたわけじゃないから負けじゃない!!

飛鷹さんの間髪入れない二撃目。

私は全身のバネを使って刀を大上段から振るい、なんとかその一撃を五分に持ち込み受け止めた。

罅迫り合う私と飛鷹さん。でもすぐに飛鷹さんが体当たりをするように距離を詰めてきて、そのまま突き飛ばすように押し切られてしまう。

吹っ飛ばされて、のけぞる身体。

でも同じ手は食わない!

私はそこからステップを踏むように大きく下がって、足が止まらないように気をつけて体勢を整え――

キュッと道場の床が鳴って、飛鷹と私の距離がキュッと詰まる。

走馬灯のように時間がゆっくり流れて飛鷹さんの姿がよく見える。

大きく踏み込んだ足。右腰に据えられた竹刀。紐で繋がっているかのようにピツタリと私に向けられ続ける竹刀の切っ先。

深く沈んだ足腰に小さく折り曲げられた肘。

既に射抜かれたと見紛うような鋭くも穏やかな眼光。

完成された突きのかえ。

飛鷹さんがバネのように折り畳んだ全身にエネルギーを溜めているのが分かった。そして、そこから目にも留まらぬ突きが繰り出されるのが今から分かる。

踏み込んだ足が更に床を踏みしめ、再びキュつと音を立てた。

来るッ！

飛鷹さんの竹刀が動き出す刹那、

私は両手で持っていた竹刀から左手を離して左足を大きく一歩下げ、半身になって目一杯胸をそらした。

ゾン

と風圧で袴が乱れる。

さつきまで心臓があつた場所に飛鷹さんの竹刀が走る。

避けた！

そう思うと同時に右手に握った竹刀が動き出す。

半身になってギリギリで突きを交わしたことで、私の右手、そして竹刀は飛鷹さんの背中側を取っていた。

このまま腕を振り上げれば飛鷹さんの背中に竹刀が当たる。

後は飛鷹さんの横なぎの斬り払いが速いか、私の片手打ちが速いか。

正直、実戦じゃこんな体勢の崩れた苦し紛れの一振りなんてマトモに喰らったつてせいぜい打撲程度。飛鷹さんの突きから繋げた斬り払いとは技としての完成度は比べるまでもない。

私の剣は飛鷹さんの身体に届かず、私は飛鷹さんの剣に真つ二つにされるだろう。それでも立ち合いなら！ 一太刀になる！

勝てる！

動き出した私の竹刀。対する飛鷹さんの竹刀はまだ動き出していない！

取った!?

ぬか喜び。

私の竹刀は動いた直後に、グツとつかえ棒をされたみたいにならなくなってしまった。

ガツチリと掴まれた感触に驚いて竹刀を見ると、私の竹刀の根本、柄に私以外の手がかかっていた。言うまでもなく飛鷹さんの手だ。

飛鷹さんの左手が私の竹刀の動きを押さえ込んでいた。

これって無刀取り!?

柳生新陰流にもある超近接距離で相手の刀の機先を素手で制する技だ。

驚いている間にヒタリと私の首元に冷たい感触が。

飛鷹さんと目が合った。

剣士の目から人の目に戻った飛鷹さんがニカッと笑った。

「俺の勝ちだな」

「……ッ！ はい！」

飛鷹さんが私から離れる。

凄い。ほとんど背中だったのに私の手が見えていたんだ。

負けたのは悔しかったけど、それ以上に感動した。

違う流派、違う術理の剣のはずなのに、恐ろしいほど噛み合う互いの剣に私は恍惚を覚えた。

もっとやりたい！ もっと知りたい！

私の胸に欲望が募る。

「飛鷹さん！ もう一度お願いします！」

間髪入れず、再び立ち合いを申し込む。

「ああ、いいぞ」

快く私のお願いを受け入れてくれた飛鷹さんがスツと袋竹刀を構える。

「始め！」

「え!?! ちょっと早——」

4回目の立ち合いは10秒で終わった。最短記録更新。

決着が着いてから5度目の立ち合いまで8秒。
これも最短記録だった。



飛鷹恭侍さんは、折神家直属の特別な学生さん。

学校は半ば通信教育のように自主学习が主で、専ら様々な任務で日本各地を飛び回っているそう。その事を旅行みたいで楽しそうって言ったら、そのうちベッドで寝る夢を見るようになるぞって脅かされちゃった。旅鴉も楽しじゃないみたい。

現在は各地方の流派の近況の調査。

簡単に言えば、有望な刀使候補のリストを作るためにあっちこっちの道場を見て回っているって話なんだけど——

今は上手くいっていない様子。

なんでも飛鷹さん単体だと、本当に折神家縁の人間なのか信憑性に欠けるらしくて、道場破りか何かだと勘違いされちゃうみたい。

今回、中部地方の道場巡りに際して、結構大きいウチの道場に最初に来たのは、師範に紹介状を一筆してもらおうってことだったらしい。

それで私は師範が紹介状をしたためている間、飛鷹さんに剣の鍛錬に付き合ってもらえることになったのだ。

四度目の立ち合いを終えて休憩時間。

道場に来るといつも師範が用意してくれるお菓子の「すあま」を恭侍さんと食べた。

今日は道場の練習日じゃないから、奥で筆を滑らせる師範を除くと、道場内は私と飛鷹さんの2人つきりだ。いつもはすあまを貰って帰るんだけど、今日は飛鷹さんと言う特別な練習相手が居てくれるので、長居することにした。

明日には道場を出ちやうみたいで、もう少し立ち合ってみたかったっていうのもある。

すあまはスポーツドリンクを飲んだ後に食べると甘くなくなる。とかそんな些細な話だけど、休憩時間の話もよく弾んだ。

似た味のモノを食べ続けると味がしなくなるのを舌覚疲労って言うんだって。

「そういうえば、俺の呼び方は恭侍でいい。君より小さい子にも名前前で呼ばれてるからな。苗字はどうもくすぐったい」

「そう? なら恭侍さんって呼ぶね! 恭侍さんも、私のこと可奈美でいいよ!」

恭侍さんがキョトンとする。そんな珍しい事言ったかな？

フツと咳をするように手を口に添えて恭侍さんが笑った。

「私、何かおかしい事言ったかな？」

「あ、いや、ごめんな。そう言うのじゃないんだ。うん、よろしくな。可奈美」

——アレ？

胸がまたギューって熱くなった？

「しっかし、男友達より女友達の方が多いいのはなんだか健全ではないような気がして

……。うん？ どうした可奈美？ そんな胸押さえて……。まさか痛むのか!？」

なんだか熱い胸に手を添えていると恭侍さんが血相を変えてズイッと近寄ってくる。

顔が近くて、私は慌てて待ったをかけた。

「だ、大丈夫！ 大丈夫だから！」

「……本当か？」

凄いい心配そうな顔をする飛鷹さん。

「本当本当！ ゼーんぜん衛藤可奈美は元気です！」

バンザイして元気なのをアピール。

恭侍さんが顎に手を当ててくいと傾げる。そんなまじまじと見ないで欲しい。このポーズ結構恥ずかしいんだよ？

「ならいいけどよ」

うー、なんだか顔が熱いよ。

「そ、それよりそろそろ次の立ち合いしようよ！」

なんだか無性に動きたくなくて、脇に置いた袋竹刀を掴んで立ち上がる。

恭侍さんはしばらく私をジツと見つめた後、ぼんぼんと私の頭を撫でて袋竹刀を担いだ。

「——ああ、いいぜ。でも、キツくなったらすぐに言うんだぞ。我慢しすぎて手遅れになつたら大変だからな」

その一言は小さな子供に言い聞かせるように真剣な面持ち。

心配性だなあ

「うん！ 分かつてる！ さつ、恭侍さんも構えて！」

すらりと刀を抜くようにして私が袋竹刀を構える。

「ああ！」

恭侍さんは背中から引き抜くように上段をブンと振つて構える。

審判なんて居ないから、私が「始め！」と叫んで走る。

次は私が攻める番だと、目標を決めて恭侍さんに突撃する。

当然、拙い攻めを見せる未熟な剣士は、たちどころに討ち取られてしまうのだけれど、

それでも私は構わなかった。

未熟なら、熟すまでやればいいのだから。



宴もたけなわ……、え？ 違うの？

日暮れが迫り、そろそろ帰らないとなーと私が思い始めた頃。

師範が奥の部屋から封筒を持って現れた。

「大変お待たせしました」

「いえ、大丈夫です。可奈美が付き合ってくれたお陰でいい鍛錬ができました」

「まあ、そうですか」

「え、いや、その、私の方こそ恭侍さんのお陰で楽しい立ち合いができて、凄く楽しかったです！」

「それは良かった。彼に頼んだ甲斐がありました」

「ええ、2日だけですが、可奈美にもいい経験になったと思います」

にっこにっ笑う師範の笑みが一層深くなる。

……

アレ？

「いえいえ、これからもよろしくお願いします。飛鷹さん」

「え、ええ、まあ、また来た時は「それでは衛藤さん、これを」

私にたぶん紹介状が入っているであろう封筒がポンと渡される。

……？

「それでは飛鷹さん、衛藤さんをよろしくお願いします」

……

「え「え!? 師範！ それってどう言う事ですか!?!」

「実はこちらの飛鷹さんが、しばらくの間、貴女を道場巡りに同行させてくださるので
す」

さりと師範が爆弾発言。

いや、もし連れてってくれたらいいなとか思ったりはしたけど、本当にそうなるな
んて!!

「それ！ そうなんですか!?!」

……なんだか恭侍さんの顔色がすごい事になってる。

「お、お、お……」

朗らかに笑っていた師範の目が薄く開かれギーンと恭侍さんを睨め付ける。

「衛藤さんの才能を評価して、特別に同行を許してくださいましたのです。ですよ、飛鷹さん?」

キヨロキヨロと師範と恭侍さんを交互に見る。振り返るたびにどんどん深く頭を抱える恭侍さんの姿。

「お、おおのれバ」

ギーン

……

「あの、(´Д`)迷惑になるのなら私は別に——いいんですよ?」

私の言葉を聞いて恭侍さんの動きがガチーンと止まる。

悪い事を言ってしまった気がして恭侍さんの顔を覗こうとすると恭侍さんがすくと立ち上がった。

そして私の頭を撫でる。

「大丈夫、一緒に行こう。この経験は可奈美の更なる成長の糧になるはずだ」

恭侍さんはキメ顔でそう言った。

なんだか師範に言わされてる気しかなかったけど、それでも恭侍さんといろんな道場に行けるのはちよつと嬉しい……かな。

「よろしくお願ひします! 恭侍さん!!」

「——おう！ この俺にドーンと任せておけ！」

師範はひたすらにこにここと笑っていた。

「それでは衛藤さんのお家への連絡もよろしくお願いします」

「ええ!? 師範、それは流石に……」

「……OK。まあたぶん大丈夫だろう、ご両親も可奈美の事は理解しているはずだし」
「いや、そういう意味じゃないんだけど……」

衛藤家。

父、兄、可奈美の3人家族。

この家で大乱闘スマッシュブラザーズが開幕される事になるとは、この時、飛鷹恭侍を除く全員が予感していた。

比翼恋慕

ガタンゴトン、ガタンゴトン

線路の繋ぎ目、足音鳴らし、ゆられゆられ電車旅。

車窓を開ければそこには雄大な海原が——

なんて映えるような事はなく、

あるのは海原のごとき鬱蒼とした山と森。

トンネル入って

トンネル抜けて

現れるのは

山、森、野原、それと畑と民家がぼつぼつと。

田舎電車から見える風景なんてそんなもの。

見飽きた風景だと恭侍は思ったが、はしやぐ可奈美の横、その言葉は口の中に転がすだけに留めた。

言ったが最後、可奈美に幻滅されてしまうと思ったからだ。

兄は妹より、強く、賢く、芸術にも見識豊富であるべきというのが、恭侍の自論であ

る。

簡単に言えば、恭侍は見栄っ張りなのだ。

ジャ——つと電車の走る音が変わり揺れが収まる。

ザアつと青葉の余韻を残して、電車が林を通り抜けた。

電車が高架橋に乗り、町が見える。

少し視線を上に向ければマンションの上に山が見えるのはご愛嬌。

どこに行つてもビルしか見えない都会の方が異常なのだ、と恭侍は思う。

「恭侍さんアレー！ あのデパート、看板に書いてあるのと本当の名前違うんだよ!!」

向かいの席、2週間ぶりの地元に興奮を隠せない可奈美が車窓にべたーつと張り付い

ている。

指差す先には少し大きめな建物。ピンクの看板にJUSCOの5文字。

たぶん、中身はAEONだろう。

「へー、懐かしいな」

恭侍がジャスコとイオンが同じ会社だと言うのを知ったのは割と最近。

電車が走る。

田舎と言ったが、県庁の近くの駅には、デパートもあり、それなりにお店の密集して

いて、なかなか栄えている様子。

もつとも、可奈美の家はもう数駅先の住宅地なので、栄えた町はあつという間に後ろに消えた。近代的な町並みは離れていき、また果樹園と畑と一軒家ばかりの風景が現れる。

可奈美の町を恭侍が見るのはこれで3度目だが、そのどこにでもある町の姿からは、どこか懐かしさを感じられた。

見知らぬ町の見知った風に、不思議と恭侍の顔が綻んだ。

それを目敏く可奈美が見つけて、あつ、と声をあげると、バレたのが気恥ずかしくて、恭侍はいつもの2倍顔をしかめた。

可奈美があたふたと慌てて、恭侍は仏頂面でプイッとそつぽを向いた。

すぐに馬鹿らしくなって恭侍が笑う。

つられて可奈美もくすくす笑った。

「2週間あつという間だったね」

しみじみと可奈美が言う。

……

「ソウダナ」

帰ってきたのは大人の返答。

どこか寒々しいその言葉に、可奈美が悲しそうな顔をして、恭侍が慌てるのはそのす

ぐ後のこと。

恭侍にとって、この二週間はととてもとても長かった。

だいたい可奈美の悪癖「剣術馬鹿」のせい。

(オブライトは捨てた)

可奈美は、ただでさえ、最強無敵の超天才なのに、鍛錬も大好きだった。

移動、食事、睡眠以外は、だいたい竹刀を持ち出そうともぞもぞして、その度、恭侍に首根っこを猫のように掴まれること多数。

それでも空き時間を見つけては、剣術の鍛錬に恭侍を付き合わせた。可奈美としては無理強いするつもりはなかったのだが、恭侍は全ての鍛錬に付き合ってみせた。

なぜなら彼は負けず嫌いだったからだ。見栄っ張りとも言う。

そんな恭侍の方はと言えば、毎日毎日、各流派の報告書制作と可奈美の勉強に付き合いつつ、夜は可奈美と立ち合い、更には睡眠時間と自由時間を切り詰め、兄役の威厳を保つための自主練まで行なっていた。

まさにセルフ苦行。

「キツイなー、休みたいなー」と本能が訴える時もあったが、そんな時は必ず「そういう苦難を受け止めながら笑えてこそ、自分を誇れるのだ」となんだか意識高い系の理性が

でしゃばり、結果、恭侍はキリキリと働いた。

全ては自分のお兄さんとしての尊厳のため。

尊厳は時として、命よりも重いのだ。

ひとえに彼がこの苦行を成し得たのは、彼の背中を熱き羨望の眼差しで焚きつけた可奈美の存在が大きい。

恭侍は、女の子の前なら、空だって飛べちゃう人種であったのだ。

……

見栄っ張りというより

飛鷹恭侍はとにかくカッコつけたがりな人間であった。

閑話休題

——可奈美にも、剣術で本気になれる友達、何人かできたようだし。

中部地方の有力な刀使候補生の選抜も、可奈美の相手が務まるかどうかでその道場の期待値が出せたお陰で、簡単だった（可奈美が基準とか強すぎる気もするけどな）。

可奈美の師範の無茶振りは、結果としていい方向に働いた（でも娘を家族の承諾なし

に人に預けるのは許せん。でもまあ、俺は寛大な心で許してやろうではないか。師範だつて悪気は無かつたんだらうし（イタズラ心はあつただらうけどな！）

そう大人ぶつて、恭侍がむふふと笑つた。

「恭侍さんどうしよう!?! みんなへのお土産が多すぎて持ち切れない!!」

「半分持つてやるから貸しな」

可奈美は、腕いっぱいにお土産を抱えて、胸いっぱい沢山の实りを抱えて故郷に帰る。

そして俺は、小さい頃結婚の約束をしたお兄さんのように、あつという間に忘れ去られるのだ。

それで良い。

そう、恭侍は思っていた。

……

二週間の共同生活を経ても、飛鷹恭侍は、

天才 衛藤可奈美 を見誤っていた。

卑屈な自負も過ぎれば傲りに変わる。その事に彼が気付くのは、もう少し後の話。

比翼恋慕 〈衛藤可奈美〉

恭侍さんの道場巡りが終わり、私は町に戻ってきた。

なんだかぜんぜん、二週間もこつちに居なかつた気がしなかつた。

昨日出たばかりみたいなのがするんだけど、記憶はしつかり二週間分ある。それが不思議だった。

楽しい時間って、本当に早く過ぎるんだなあって実感。

けど、その瞬くような、一夜の夢のような旅で、私は剣術の話が本気できる友達を手に入れることができた。

実家がなんだか凄そうな柳瀬舞衣ちゃん。実家が神社の安桜美炎ちゃん。2人の家族の話はなんだか凄くて、ウチは普通の家庭だからちよつと見劣りしちゃうなー、なんて思っちゃったり。

あ、いや別にお父さんを悪く言うつもりはないんだよ!? 凄いのと、幸せなのはイコールじゃないって、そのの所は、私キチンと分かつてるからね!?

一人で思い出しあたふたしているうちに、恭侍さんは私の荷物を山ほど抱えてどんどん私の前を歩いていく。

振り向く気配は微塵もない。

ぶー、ちよつとぐらい私なんて足を止めたのか興味を持つてくれてもいいんじゃないかな。

柳生新陰流道場。

現れた師範に対して、正座をした恭侍さんが深々と頭を下げた。私も釣られて頭を下げると、師範にくすくすと笑われた。

「ご協力、ありがとうございます」

かしこまった様子の恭侍さんに、先生も合わせてお辞儀する。

「こちらこそ、衛藤さんの事、ありがとうございます」

「いえ。可奈美さんのおかげで、今回の視察の目的をスムーズに果たすことができました。その事にはとても感謝しております。可奈美さんも、ありがとうございます」

恭侍さんが私に向かって、頭を下げる。

……

可奈美さん。だって

「ふっ——くふっ」

「おっ」

「ふふつ、だ、だつて、可奈美さんつて。視察の時はずっと、可奈美ー可奈美ーつて呼び捨てしてたのに、師範の前だけ可奈美さんつて、そんなの笑うしかないよつ」

「まあ！ そうなのですか」

「え、ええまあ。あまり堅苦しいのはどうかと思ひまして……。お前つて奴は……。場を弁えろ。締まらないじゃないか」

「私は構いませんが」

「俺が構うんだ。——です」

師範と私のくすくす笑いが綺麗にハモる。

恭侍さんが頭をガリガリとかいて、パンと場を仕切り直すために手を叩いた。

そんな事したつて、火のついた笑いは止まらない。私たちのくすくす笑いが治まるまで、恭侍さんは沈黙し、苦そうな顔をしていた。

「とにかく。短い間でしたが、お世話になりました！ これからもご健勝のほど、お祈りしております」

恭侍さん、強引に場を閉めて、再び深々と頭を下げる。

「はい。飛鷹さんも、お仕事ご苦労様でした。私の方からも、貴方が健康であることを祈っておりますよ」

「ありがとうございます」

挨拶が終わり恭侍さんがすつくと立ち上がる。

「それじゃ、可奈美、またな」

恭侍さんが下ろしていた竹刀袋を肩に掛け直し、くるつと後ろを向いて、ずんずん歩く。

「えっ!?!」

そのまま、なんの未練も無しに、足早に帰ろうとする恭侍さんを私はとつさに捕まえた。

理由が分からない様子の恭侍さんのキョトンとした顔が憎たらしい。

「そんなすぐに帰ることないでしょ! 少しくらいゆつくりしていけば!?!」

「ううん、でも、一人で知らない町を歩いたところだなあ」

「なんで1人前提!?! 目の前に私がいるのが見えないの!?!」

「え? ついてくるのか」

「当たり前だよ! むしろ、なんでそんな驚くのか私には分からないよ!」
はあはあ。

頭に血が上って息の荒くなった私を見つめて恭侍さんたじたじ。

「つて、恭侍さんのせいだよ!?!」

「じゃ、じゃあ、頼む」

「うんー」

私には、恭侍さんへの恩返しとか個人的にやり残した事とか残っているって言うのに、恭侍さんってば、見切りつけるが早すぎるって！

恭侍さんと道場視察を始めて、一週間ぐらいした頃の話。

私は恭侍さんに悩み事があることに気付いた。

気付いたきつかけは、立ち合いでの恭侍さんの剣の揺らぎ。

最初は新しい技を試しているんだって思っていたけど、でもすぐに違うって分かった。

恭侍さんの剣は、私心を捨てた何事にも即断即決で対処する、一本筋の通った合理的な剣が魅力だったのに、その時の剣は、中途半端に心が乗っかっていて、太刀筋を無闇に鈍くさせていた。

何かに迷っていて、全力を出せていないのが明白だった。

天然理心流の技だけに拘ったかと思えば、次の立ち合いでは、色々な流派の技を使ってみたり、その次は、極力基本的な技だけで戦ってみたりと、まさに試行錯誤してますます感じ。

私はその悩みの理由が知りたかった。

2人で考えれば、きつと何か良い案が浮かぶはずだから。

それに、いくら歳下だからって、もう何日も付きつきりで練習した仲。

私は家族のような間柄だと思っていて、恭侍さんからも、悩みの一つぐらい打ち明けても良いんじゃないかな？ って思ってたんだけど、恭侍さんはそうじゃないみたい。

その事がちよつと悲しかった。

でも、恭侍さんが自分から打ち明けてくれない以上、私から聞くしかない。

けど、恭侍さんは、何気ない感じで私が聞いても、悩みを教えてはくれなかった。恭侍さんは隠し事が好きなタイプだ。

自分でなんとか出来ない事なら早々に一人で抱えるのを諦めるけど、どうにかなりそうな事は絶対人の手を借りようとしな人種。

そういう人を私は知ってる。

私がそうだったから。

そういう場合、その人の悩みを知るには、力づくで聞き出すか、外からあたりをつけるかの2択しか方法はないのだ。

そして結局のところ、私は今日まで恭侍さんの悩みを知ることができなかった。

それが私を焦らせる。

しかも、それ以外に焦る理由がある。

私が恭侍さんの悩みを知る機会が、この時を逃すともう無いということだ。

恭侍さんをここで帰してしまえば、当分私と恭侍さんが直に会える事は無い。

帰った後に、電話越しの会話で、私にだけこっそり悩みを打ち明けてくれるなんて、そんな都合の良いことある訳がない。

今、この時を逃せば、恭侍さんは悩みを抱えたまま私の手元から去ってしまう。

もしかしたら、帰った先で悩みを解決できるかもしれない。でも、できないかもしれない。

向こうに帰った後の事は、私には分からない。

それが嫌。

この人の悩みを、知らない所で、知らない人が解決するのが嫌だった。

私に恭侍さんがしてくれたいように、私が恭侍さんの悩みを解決してあげたかった。

だから

私はやらないといけない。

恭侍さんの悩みをどうにかできるのは、私だけなんだ。

道場の周りをぶらぶらして、最近改装したカフェでお昼を済ませて、私は恭侍さんにお礼がしたいって、立ち合いを申し込んだ。

そしたら何故か盛大に笑われた。

私だって、お礼に立ち合う！　っていうのは、ちよつとおかしいかなー、って思ったけど、でも、私はちゃんと考えて、今の恭侍さんへのお礼ならきつとこれが一番だつて思つて言つたのに。

恭侍さんの顔は、妹の我儘に仕方ないなあと言つて応じるお兄ちゃんの顔だつた。

お礼というのは建前で、自分と最後に立ち合いだけなんだ。

つて思つてる顔。

かつちーん。

侮られてる気がした。

いや確実に侮られてる。

私つて、そんな頭より先に身体が動くタイプじゃないんだけどな。

けど、恭侍さんが私をそう思っているのは明らか。

その評価をなんとかしてひっくり返したい。私をもつと見直してもらいたい。そう思うと、一層身体に気合が入る。

私は立ち合いに一つ条件を設けた。

「恭侍さん。私が勝つたら、一つ質問に答えてください」

恭侍さんへの恩返しのための第一歩。

「いいぞ、一つと言わずいくらでも」

恭侍さんがからからと楽しそうに笑った。

でも、その顔は嘘

笑顔に心が籠ってない。

心から笑えていないのが分かった。

その表情は、痩せ我慢だ。

その理由が知りたいから、私は恭侍さんに立ち合いを申し込んだんだ。

この立ち合いは前座。

本番は、恭侍さんの抱えた悩みを打ち明けてもらってから。

2人で恭侍さんの悩みを一緒に考えることにある。

だから、まずはこの立ち合い。

絶対に負けられない。

私が竹刀を構える。いつもの受けを意識した中段ではなく、攻めるために深く踏み込んだ上段の構え。

対する恭侍さんはいつも通りの平晴眼の構え。

今日の恭侍さんは天然理心流の気分らしい。

ラッキー。今の恭侍さんは、天然理心流を使い始めると、その型に拘ってしまって、得

意の無形の剣を使えなくなってしまう、むしろ弱くなってしまう。

いつもなら残念に思うけど、今だけはそれで良い。

……

きつと、恭侍さんは、必死に自分の殻を破ろうとしているんだと思う。

でも、それなら、私に手伝わせて欲しかった。

小さな箱庭で孤独と言う名の愉悦に浸っていた私に、広い世界を見せてくれた恭侍さんには、悩み相談一つじゃ返しきれないぐらいの恩がある。

私にその恩を少しでも返させて欲しい。

「行きます」

私が呟き、間合いを詰める。

今までのどの時も、冷めた^{覚めた}思考。

今回の立ち合いに限って、私は恭侍さんにこれっぽっちも負ける気がしなかった。

剣術バカ2人〈衛藤可奈美〉

負けた。

可奈美に

言い訳のしようが無いほど完璧に。

敗因は分かっている。

突き技に拘りすぎた事。

そして、調子が悪いにも関わらず、手加減などした事だ。

最後の攻防、俺は可奈美の剣を受け流し、可奈美の上体が泳いだ僅かな隙に左足剣（三段突き）をねじ込んだ。

タイミングは完璧だった。

だが負けた。

そもそも、この技は、三段突き刹那の間に喉、胸、丹田を正確に狙った三種の突きを相手に連

続して叩き込む正に必殺技。

当然、竹刀でも直撃すれば命に関わる。

こんな技、立ち合いで使うような代物ではないのだ。

しかし、俺はそれを分かった上で使ってしまった。

理由は簡単で、恥ずかしい話だが、俺はその時、勝ちを確信していて、俗に言う魅せプに走ってしまったのだ。

でなければ、なんで次の一撃で終わるのに、わざわざ3段突きを使ったの、とか、普通に袈裟斬りで良かったじゃないかとか、色々と問題点が湯水のごとく。ああ、頭痛い。当然の配慮だが、俺は可奈美が大怪我をしないよう、狙いを可奈美の右肩にずらして左足剣を繰り出した。

この狙いをズラした事。そしてそもそも使う必要も無い突き技で勝負を決めに行つた事。その判断……というか油断が、可奈美に付け入る隙を与えた。

身体の中心を狙っていたならいざ知らず、身体の端を狙ったことによつて身を翻すだけで俺の左足剣は、いつかの焼き増しのように簡単に躲された。

そして、俺は自信を持つて左足剣を繰り出していたが故に、避けられた場合を考えず、技を変化させる余地を残さず全力をもって突きを放っていた。結果、躲された際に盛大に隙を晒した。

身体が伸びきつた瞬間を的確に可奈美に狙われ、硬直した身体ではどうすることも出来ず、胴を薙がれた。

「恭待さんがいつも通り本気を出していれば、私に負けること無かったのに」

ああ、分かつてる。

今回の立ち合いの可奈美は絶好調。ここ二週間で最強だった。

それでも、俺の方が強かった。

剣の知識も技も膂力も、可奈美に負ける要素は無かった。

油断しなければ、最善手を選んでいれば――

それでも

「俺は本気だった」

それが尚更悔しい。なによりも油断に油断を重ね、勝てる試合を取りこぼした自分自身に腹が立つ。

その時、自身に縛りを課して、縛りの範疇だけの全力で戦う事を選んだのも、それを貫いたのも自分だったのだから。

たらればなど無い。あの瞬間の俺に選択肢など思い浮かばなかった。慢心し、己の判断を迷う事すら忘れていた。

天然理心流縛りが思ったより上手くいって浮かれていたんだ。

この敗北は、俺の傲りと迷いと油断のトリプル役満による自業自得に帰結する。

……

可奈美が胡座をかいてうな垂れる俺の肩に跳び箱に乗るように手を掛ける。「ね、恭侍さん。恭侍さんは何を悩んでたの？」

可奈美の純粹な瞳、言葉が眩しく俺の頭に突き刺さる。

正直言つて、俺の悩みは大した事ではないのだ。ましてや年下の女の子に聞かせるよ
うなものじゃない。

できれば黙っておきたい。……だけど約束を破るわけにもいかない——か。

「……剣を」

「剣？」

「自分の剣の道を選びかねていた。我流に成り果てても強さを目指すか、それとも師匠の跡を継ぐために天然理心流だけを鍛えるか。そのどちらを選ぶか悩んでいた」

この二週間、可奈美は目に見える形で沢山のモノを得たが、俺の方も、様々な流派の剣を見て、模倣して、理解して一つの答えを得た。

まあ、実の所、薄々気付いていたが、どこか認める気になれず、なあなあにして誤魔化していたのだが、この二週間であまりやくはつきりと知覚した。

俺のクセ。俺の剣士としての適性。

俺は、積極的に斬り結ぶよりも、後の先を取る戦法の方が得意だった。

今の今まで自分の得意分野が分からなかったなど、勉強なら言語道断なところなのだ

が、言い訳をさせて欲しい。

俺は今まで自分と実力が拮抗、又はそれ以上の相手と立ち合う事が殆どで、それ故に後手に回る事を嫌って攻め手に回ることが多かった。

立ち合いで不意に受けに回って上手く返せた事があっても、それは単純に俺の腕が良かっただけだと思っていたのだ。

けど、この道場巡りで、何十人も年下の剣士の攻めを外部コーチのような形で受けてみて、受け手として剣を捌いてみて、受け太刀が恐ろしいほど手によく馴染むことに気がついた。

身体までもが、初めから知っているかのように躲し受け流し、太刀を返すことができた。

ガツガツと剣をぶつけるのではなく、相手の動きを見切る方に楽しさを感じた。

そして、俺が攻めの時に好んで使う剣、自分より格上の相手に対抗するために見出した「無形の剣」は固定された型を持たないが故に、必要なのは経験だけ。天然理心流に拘る必要はない。

……

俺は、天然理心流では全力を發揮できないようになっていた。

俺は……ただ純粹に剣の腕を求めるのなら、天然理心流を捨てるべきなんだろう。

「……でも、俺は師匠の弟子で居たいんだ」

天然理心流は現在二つの派閥に分かれている。

刀使用に簡易化、剣術特化させた女流と、師匠がソジイ当主として座する源流だ。

源流は剣術に加え、柔術、棒術を教える総合武術としての面を色濃く残している。故に人氣が無い。

萎びた爺と日がな一日、何種類もの稽古をするなど、並の人間には耐えられないだろう。

その点、女流なら剣術だけだし、女の子はいっぱい居るしと、まあ、その——自ずと人氣に差が出るのはしょうがない。

師匠もその事は理解していて、息子が早逝してしまい正統な血筋が途絶えた源流の引き継ぎは、既に免許皆伝した元門下生の誰かに源流を移すと、源流はそれで十分だと師匠は言っていた。所詮、権威だけの源流など肩書きさえ残ってさえいれば良いとさえ言っていた。

……

それを嫌だと思った自分が居た。

どうせ血の繋がりのない人間に源流の名が移されるなら、俺が欲しいと思った。

どこぞの誰かが昔とった杵に、天然理心流源流という餅を与える気にはなれなかつ

た。師匠の剣を継ぐのは俺だと言いたかった。

……だけど

そう、ここでまた、『だけど』だ。

相入れない二心を抱いて、片方を離せない自分が嫌になる。

天然理心流の看板を継ぎたいという想いは二番めで、

それは俺の一番の望みと両立できない。

……

俺は強くなりたいのだ。

誰よりも強くてカッコいい剣士になりたいのだ。

今のままでも俺は十分強い。成長して身体が出来あがれば、それだけで、学生最強から日本最強になれるだろう。

だけど

もっと、もっと強くなりたかった。

先の言葉には全て、*刀使を除いて。の注釈が付く。

日本における個人として最強なのは刀使だ。刀使の最高峰ともなれば、銃を持った人間の集団にすら容易く勝てる。

羨ましかった。そんな風になりたかった。

いや、馬鹿な話だが、俺はそれよりも更に強くなりたかった。刀使すら守れるそんなヒーローに憧れているのだ。俺は。

「へえ、それは難しい問題だね」

「ああ。本当に難しい」

本能と理性の選択。俺にとっては究極の二択だ。

小さい頃から、業のように追い求めて来た夢と、生きてきた中で見つけた手に届く範囲にある望み。

どちらを取るべきか、自分の心なのに決められない。

可奈美が俺の肩を突いていた両手を曲げて俺の背中にのしかかる。

振り向くと、可奈美が笑っていた。

しかしその笑みはどこか可笑しそうに、面白そうにしている、真っ直ぐ俺を見つめている。

可奈美の腕がしゅるりと俺の首に絡む。おぶさるように可奈美が俺の背中に抱きつく。可奈美の腕に力が通り俺の身体を淡く抱きしめる。

慰めているつもりか？ 生憎だが、この悩みに可奈美ができる事はない。自分自身で決めなければならぬ事だしな。

そんな俺の想いを知ってか知らずか、耳元に可奈美の顔が寄せられる。近い、吐息が

聞こえる。

細い、軽い、柔らかい。なにより甘い香りが。

恥ずかしさがこみ上げる。ヤバイ平常心を

そつと耳に柔らかいものが触れた。

「でも……さっきの恭侍さん、今までで一番弱かったよ……？」

ア？

一瞬意識が飛んで、いつの間にか可奈美が目の前に立っていた。

そつと頬を撫でるように可奈美の両手が俺の両頬を這う。

可奈美が にへら と、とろけるような笑みを浮かべていた。

「今、どう思った？」

どろりと深い闇の底みたいな瞳が俺を？む。

「義理とか恩とか吹っ飛んで、最後まで何が残ったの？」

まつ毛が触れ合うぐらい。瞳がひつつきそうなくらい可奈美が俺を間近で見つめてくる。

「……ハッ」

この子はどうか俺が思っていたよりずっと悪い奴だったらしい。

あの一言で、あの一瞬で、俺の理性は焼き切れた。

剣術一筋の己に、確固たる寄る辺が欲しいという小賢しい考えは頭からかき消え、残ったのは原初の願望。

『強くなりたい』

「大丈夫だよ。恭侍さんなら、天然理心流も3年も有れば完璧に使えるようにやるよ」
可奈美が励ますように言った。

腹が立った。

3年だと？

ふざけるな。そんな時間があればいったいどれほど剣の道を深められると思ってるんだ。一流派如きにそんな拘ってられるか。

思わず可奈美を怒気を込めて睨みつけると、俺がハッと正氣に戻るより先に、可奈美がいやらしく広角を上げた。

啞然

今……俺は何を考えて

「足りないんだ」

にここに、愉しそうに

にやにやと、いやらしく、

にたにたと、意地悪く、

嗤った。

喜色満面。

3年も、待ってられないでしょ？

……当たり前だ

もつと、強くなりたいでしょ？

当たり前だ

もつともつと、誰よりも、何よりも強く！

「当たり前だ」

血潮がマグマのようにグラグラとたぎり、100キロぐらい余裕で完走できそうなくらい身体に力が漲る。

そこ意地悪い質問を続ける可奈美をギロリと睨むと、可奈美は口が裂けそうなくらい凄惨な笑みを浮かべた。目玉はギラギラと獲物を狙う獣の輝き。その瞳に映り込む俺も、可奈美と全く同じ目をしているのが一目で分かった。

強さだけを貪欲に求める魔物の瞳。相手を自分が強くなるための餌としか見ていない目。

上等だ。それぐらいじゃなきや、今の俺には相応しくない。

「可奈美……もう一度立ち合わないか？」

さつきまでの黒いオーラが霧散して、可奈美の背中からペカーッと後光が差し込んだ。

「もつちろん！ いいですよ!!」

にこーつと天真爛漫な笑みを浮かべ可奈美が元気に返事をする。

「OK、最強の俺を見せてやるよ」

掴んだ竹刀の柄がギシリと軋んだ。

◇◇◇

「俺は……この二択を選べないんだ」

恭侍さんは優しいなあ。

自分が強くなりたいのを我慢して、先生との絆を優先するなんて。

いや、うん、きつとそつちが普通なんだと思うよ。

剣術を好きだけ楽しみたいっていう私の方がたぶん変なんだと思う。

私はもう普通の楽しみと剣術を全く別のものとして扱ってるから、恭侍さんみたいに悩む。なんてことないんだけど、恭侍さんが真剣に悩んでいるのを見ると、なんだか

自分の事のように思えて、なんとかしてあげたくなる。

恭侍さんの考えてってアレだよね。ほら、室町幕府の、えーと、北条まさこ？ のご恩と奉公って奴。

師匠への恩が心に引つかかって、教えてもらった以外の剣を鍛えるのが、なんだか師匠を蔑ろにしているように思えて嫌なんだと思う。

別に悪いことじゃない。むしろ恭侍さんの美德だ。

…

だけど、恭侍さんの本心はきつと——

じゃあ、私が恭侍さんの背中を押してあげよう！

教えてあげよう！

恭侍さんの本当の気持ちって奴を。

思い立ったが即行動。恭侍さんに抱きついて

わ、恭侍さんの身体、硬い。けど筋肉だから弾力もある。ちよつと手に力を込めるとガチツと硬いけどほんのり柔らかい。感覚的にはゴムを巻いた棒に近いかな？ 噛んだら気持ちよさそう。

とと、そんな事考えてる場合じゃないね。

恭侍さんの身体に腕を回して引き寄せる。

後ろから内緒話をするみたいに耳元に顔を近付ける。

人を怒らせるのは好きじゃないけど、恭侍さんのためだし仕方ないよね。

今の恭侍さんの、ぐるぐるの頭をさっぱりさせる魔法の言葉はもう思いついてる。

後は出来るだけ、劇的に、ゾーンと胸に来るように。

出来るだけ悲しそうに、出来るだけ哀れそうに、聴こえるように囁く。

「でも……さっきの恭侍さん、今までで一番弱かったよ？」

えへへ、嘘。

私のコンディションが最高だったから、相対的に今までで一番長く粘れたけど、本当に恭侍さんが弱かったなんて分からない。

——んふふー、でも。

恭侍さんからゾワゾワゾワアってももの凄い悪寒が、手を伝い、背中を這って、全身に行き渡る。

ゾクゾクして腰が砕けちやいそうだった。

殺意にも似た強烈な意思が私の身体を震わせた。

恭侍さんがどんな表情をしているのか見てみたくて、名残惜しい背中を離れて、恭侍さんの前に立つ。

恭侍さんは全くの無表情。

それなのに眼はギラギラギラギラ。

闘志爆発！って感じで、とつてもとつても怖い顔。

あはっ

やっぱり!!

やっぱり同じだ!!

恭侍さんは私と同じだ!!

剣術以外にもいっぱい好きなものがある。スイーツも好きだし、アニメだつて見る。

四六時中剣術のことだけ考えてる訳じゃない。

——でも、一度剣を握つてしまえば、

もう。剣の事しか頭に残らない!!

先生とか、師匠とか、どうだつていい!!

楽しければ、それで良い!!

恭侍さんが、プンスカ怒つて私の頭をコツンと叩く。

あー、やっぱり恭侍さんは凄いなあ。

一瞬理性が飛んだのに、もう冷静になりかけてる。

やっぱり、一流を目指すなら、いつでも平常心でいれるようにならないとダメなのか

な

なんて思ってたけど、

恭侍さんが優しくほんのり笑みを浮かべたのを見て、

あ、そうじゃないんだ。

目がぜんぜん笑ってない。

心は熱く、頭は冷たく、つて事なんだ。

どこまでも剣士の鏡って感じ。私とは剣士としての完成度が違うね。

恭侍の目玉はギラギラと獲物を狙う獣の輝き。その瞳に映り込む私も、恭侍さんと全く同じ目をしているのが見える。

ともすれば命すら失いかねない本気の立ち合いに、快楽を覚える修羅の目。

私たちは、遊び相手が欲しくて走り回る虎の子だ。

「可奈美……もう一度立ち合わないか？」

そして、私たちは出会った。

それならもう！

好きただけ一緒に遊鍛練するぶしかない!!

「もっちゃん！ いいですよ!!」

幾らでも！ いつまでも！

私なら、付き合ってあげられる!!

折神の名の下に

白刃二閃

赤灯四合

ギラギラと銀に輝く刀と、緋色の尾を引く赤錆色の剣がぶつかり合う。

無数の剣戟音が、クワンクワンとこだまする。

折神家本邸地下。

ノ口を祀る地下殿の手前、古風にも松明に彩られた洞穴の中。

4本の刀が瞬き、長身の女性と少年が剣を交わしていた。

長身の女性の長く艶やかな、ぬばたまの髪がはらりと広がる。

直後、彼女の手握られた二本の御刀が襲い来る。

直撃すれば必殺であることは必至。

輝く二刀に立ち向かうのは鈍く光る二本の剣。

刀身に息衝くように輝く橙^{だいたい}色の血管が走る荒魂のように禍々しい意匠の赤錆色の剣

と、同じ御刀であるもののその鈍色の輝きから、女の握る刀よりも数段階で劣る事が分

かる御刀。

それらを構える少年の顔は、まるで100年の因縁がある敵を前にしたように険しく、女はそんな少年の表情を見て薄く笑った。

ガギン

と一合。

間合いが詰まり、わずかな隙間に刀をねじ込み合う。

女の振り下ろした剣を少年が払い、もう片腕で突きを狙う。

女の腕がわずかに振られ、繋がる刀の切っ先がピンと少年の刀を弾いた。

返しの逆袈裟斬り。それを少年は腰を落としながらのけ反り躲す。屈んで足に溜めた力を使ってトーンと飛んで間を開ける。

「今日はいつになく好戦的だな。飛鷹」

折神紫がどこか上機嫌に言う。

「二つ壁を越えられたもんで——ねッッ!!」

恭侍が跳んで間合いを詰める。

再び鋼が交錯し火花を散らす。

恭侍の迷い無く、どこまでも実直に真っ直ぐに力強さを求めた太刀筋。

ともすれば短調になりかねないその剣は、しかして不規則、それでいて機能的。

身体負荷を度外視して、最短距離をひた走る剣は、20年前の現役から今に渡って刀使最強を謳われる折神紫を前にして、正面からの打ち合いを五分に持ち込んだ。

対する折神紫の剣は流麗。

恭侍のような後先考えない、その場その場の最速を狙う太刀ではなく、あらゆる剣に対応できるように緩く広い構え。

飛び込むように躍りかかる恭侍の剣の尽くつじんをいなす。

ガツガツと普通の刀なら折れてしまうほどの激しい打ち込み。

機動力を重視する刀使の試合ではそう起きない一点からのラツシュ。

それを折神紫は顔色一つ変えずに捌く。

その事は彼女が高度な二刀流使いである事を如実に証明していた。

折神紫の刀が自身の肩を抱くように交錯する。

挟み込むように、喉元を喰い裂くように双方から御刀が放たれる。

恭侍が選んだのは前進。

刀に速度が乗るよりも早く、根本で押しとどめ、押し返そうと剣の根本で折神紫の刀を受け止める。

そう思っていた。

身体が軋んだ。

折神紫の髪がざわりと蠢く。髪の中で目玉がキロキロと蠢くのが見えた。

折神紫の外法けほうがほん少しだけ解放されたのだ。しかし、それだけで気迫が一層強まり、物理的にも力が一層増す。

——大人げねえ!!

恭侍の刀のつばがギチギチと悲鳴を上げる。

「どうする? 飛鷹」

「ぐぬあ!!」

恭侍は力を振り絞り、わずかに折神紫の御刀を押し返すと、状況を打開するため片足を上げた。

折神紫の胸を蹴り上げ、引かせる狙いがあった。

直後

ギョヂイツツ!!

と刀が激しく擦れる恐ろしい音を立てて、刀で出来た顎あごが閉じた。

片足では折神紫の剣を抑えきれなかったのだ。

体勢はそのままに、恭侍は大きく吹っ飛ばされて、その身体は宙に泳ぐ。

「迅移」

折神紫の姿が霞み、刹那、いまだ宙を揺蕩う少年の前に立った。
ぞふ

無造作に突き出された二本の刀が少年を貫いた。

「ガッツ!?! ああ、あ、あ!!」

とつさに恭侍が放った蹴りが、今度こそ折神紫の胸に刺さる。

串刺し状態から身体がずるりと抜けて地面に転がる。

「がぶっ……ぐうう」

薄暗い地面に黒い染みが広がる。

「良い判断だ。刀使の死因の多くは、物体が貫通したまま写シを解いてしまい、肉体に致命傷を負うこと。お前はそれを見事に回避した」

「……フウウウ——」

ざっけん!!

俺は刀使じゃねえんだよ! 致命傷は致命傷なんだよコノヤロー!!

恭侍は、片手の刀を置いて、口をモゴモゴと動かし、ベツと吐き出した血の塊を傷口に塗り付けた。

血は瞬時に凝固し、傷口を塞いだ。

折神紫がその様子を見てまた何か言い出すよりも早く、気持ちいを切り替え、恭侍が立つ。

構えをとる。身体は反身。右手は中段、刀を斜めに構え、左手は上段突きの構え。

あからさまな攻撃姿勢。

すいっと感情の失せた顔で、折神紫に迫る。

折神紫の間合いに踏み入るその刹那、最後の一步で恭侍の体が入れ替わり、上段に構えた御刀が、折神紫に向かつて投げつけられる。

カンと簡素な音で投げられた御刀が弾かれた。

残る左手が恭侍の胸を薙ぎに迫る。

ギン

と強く短い音が鳴り、折神紫の刀が弾かれた。

恭侍は刀を投げた地点から踏み込んでおらず、それ故に冷静に剣を弾くことが出来た。

——ほう、私に攻めろと言うのか。面白い。

折神紫の攻勢。

恭侍は丁寧にそれを捌く。必ず五分以上で打ち勝てる場合のみ刀を振るい、それ以外は避けて、そらす事に徹する。

——壁を越えたと言うだけの事はある。だが

ギーン

恭侍の身体が意図せずのけ反る。

折神紫の剣を捌ききれなかった故。疲労が恭侍の剣を鈍らせた。

袈裟斬り。

骨切り包丁よりもなお鋭い御刀が、不可避の軌道で恭侍を両断

するはずが、

恭侍はぐつと後退するだけだった。

赤錆色の剣を横にし盾として、片足立ちであえて吹き飛ばすことで威力を殺したのだ。

左手がダラリと垂れ下がる。

赤錆色の剣の腹に押し当てていた方の腕だ。

折神紫の一撃を剣越しとはいえ直撃したのだ、無事では済まない。

それでも恭侍は痛みを忘れたかのように、左腕すら気合で動かし、刀を構える。

両手は緩く、刀は腰だめ、中段突きの構え。

屈み

跳ぶ。

間合いに入る。

折神紫の剣、二歩目で横にすつ飛び躲す。

切り上げを避けられたことによつて、斜め上に揃えて構えられた二本の御刀。

突かれたと同時に振り下ろし、両断する。

相討ち狙い。

ズンと恭侍が最後の踏み込み。

刹那

刀が翻る。

突きの型が消えた。

横一閃

一門字切り

剣は振り抜かれ、折神紫の胴に白い刀傷が走る。

恭侍はそのまま二の足を忘れ、地面にゴロゴロと転がった。

ギ——イ——!!

一拍置いて、状況を理解した折神紫の背後の髪の毛の化け物が金切り声を上げた。

一瞬にして折神紫の身長の倍以上に身体を膨れ上がらせた化け物は、その無数の目に憤怒を滾らせ、恭侍に手を伸ばす。

鋭利な刃物のごとき爪を生え揃えた腕は、しかして恭侍の身体に触れる前に、全く同じ大きさの3本の腕に絡め取られ、地面に叩き伏せられた。

『殺すには惜しい』

折神紫の口から何人かの声が、同口異音に小さく漏れた。

化け物は影の中にぬるりと消えて、かすかに松明が爆ぜる音だけが響く。

立とうする恭侍。

だが、ぐっと力を入れた瞬間、真正正銘の限界を迎え、プツツリと糸の切れた人形のように力が抜けて、地面に突っ伏した。

それつきり、意識を失ったのかピクリとも動かない。

その後ろで、折神紫は自身の腹部に走る白線を愛おしそうに すい となぞり、ほん

の少しだけ頬を緩めた。

折神紫は自身の髪に憑いた目玉の一つをもぎ取ると、グチュンと握り潰した。手の隙間から煌々と光る橙色の液体が溢れる。

手の中でトロリと転がり光る緋色の蜜を、折神紫は恭侍の傷口に丁寧塗りに塗り込む。

すると恭侍の傷口は淡く光り、ビデオの早回しのようにくちくちと音を立てながら口を閉じた。

傷は全てたちまち治り、かすかに傷跡が肌を通して赤く光るだけになった。

折神紫はそれを満足げに見届けると、白魚のようにきめ細かな手で少年の頬を優しくなぞった。

「私を斬るにはまだ足りないぞ。恭侍」

折神紫が恭侍を抱き上げる。

松明の明かりがシユンと消えた。



目が覚めて、見知った天井。

折神家本邸

来客用宿泊室

(基本誰も使わないから 別名 物置)

枕元には、鶴に交差した刀をあしらった折神家の家紋入り置き手紙が。

俺と紫様の立ち合いは極秘らしいので、十中八九、俺を部屋まで送り届けてくれたのは、あの折神紫様だろう。

わー、紫様に運ばれた男って多分俺が初なんじゃなからうか。

……

だからどうした。

のっそり起きて、電気を付ける。

おまけみたいな部屋なので、窓は小さく陽の光も期待できない。

こんな所で暮らしてたら、ビタミンDが枯渇しちまうな。

と、微妙に逃避していた思考を嫌々ながら現世に戻し、恐る恐る手紙を開く。

そこには手紙の外側に大きく余白を残し、中心にさらさらと流れるような文字綴られた随分と達筆な文が。

(ジジイの圧縮ミミズ語に比べればまだ読みやすい)

思ったより文量が少ない。

もつと紙の隅から隅までお小言がびっしり書かれた呪いの手紙を想像していたんだがな。

気が軽くなり、何の気なしに手紙を読む。

パタン

うん、これは酷い。

〈手紙の内容〉

お前の報告書から、若芽が育っていることを知り安心した。

任務ご苦労。

で、話は変わるが、

今回、見てやったお前の剣術だが、いまだ赤点だ。

確かに腕を上げたと言語するだけのことはあったが、あくまで上手くなったであつて、強くなったとは言えない。

特にお前が攻めに使っていたあの太刀。剛剣としては確かに優秀だが、場当たりので、相手を詰ませる事ができないという致命的な欠陥が

うんぬんかんぬん――

つらつらつらつら

(中略)

つらつらつらつら

——と言う訳で、お前のために練習カリキュラムを用意してやる。感謝するんだなガハハ。

(以上、意識)

手紙の9割剣術のダメ出しってなんすかソレ。

しかもなんかスゲー雅な言葉回し。

それが無性に腹が立つ。

しかも手紙の末尾には、「私を倒したくば、まずは御刀に認められる事だ」ですって！

奥様あ、どう思います？　ここ数百年に渡って、誰も成し遂げてない男による御刀の神気解放をお前がやってみろ、ですって。

言外に「やれるもんならやってみろww」の文字が見えるぞ、俺には。

……

やってやろうじゃねえかコノヤロー！

お前が大荒魂ってのはバレてんだコノヤロー！

いずれぶつ飛ばすから覚悟しろやコノヤロー！
でも別に俺がぶつ飛ばす必要はねえんだぞ

コノヤロー!!

……

手紙にイキつてどうすんだよ。

さて、から元気で気分を盛り上げた所で、朝ご飯を食べよう。

それで練習しよう。あ、いや勉強もしないと——まだ大丈夫か？ いや、でもな—

肌寒さを振り払い、ガバつと起きて、

ツカツカツカ。

ヤカンに火を掛けたつ、戸棚を開ける。

この部屋には、誰かのストックなのか、戸棚に山ほどカップ焼きそばが収納されている。その中から、ちよつとお高めの丸っこい奴を選んで取り出す。

これだけ有るなら一つぐらい減ってもバレないだろう。

お湯が沸くまでの間に、寝ている間に身体から剥がれて布団に散らばった、ノロが凝固した石を拾い集める。

一言で言うならノロで出来たカサブタだ。

大した代物ではないが、万が一、荒魂になったら大事なので、丁寧に集める。

集め終わったら、缶のような回収箱に入れる。

ちなみにコレ、集めた後はどっかの研究機関に持ってかれて、研究に利用されるとの事。俺も恥ずかしいが、カサブタなんかを大真面目に研究させられる研究者も災難だな。

小さなカケラまで丹念に回収している間に、ピーつとヤカンが鳴った。

火を消して、バリツと焼きそばの包装を破って――

ピンポーン

「はい」

ピンポンピンポンピンポン

ピ——ンポ——ン

俺が部屋のドアを開くまで、ずっとピンポン連打。

俺はこんな事をする子を一人しか知らない——でもなんでここにいるんだ？

扉を開ける。

「結芽」

俺の胸ぐらいまでの小さな背に、不釣り合いな刀を携え、長い桃色の髪を流しつつちよこんと小ぶりのサイドテールを結った女の子。

燕結芽がそこにいた。

「久しぶりー」

むぎゆうつと結芽が俺の腹に抱きつく。

胸のあたりで明るい桃色の髪が犬の尻尾のように揺れる。

「会いたかったよう、お兄いさん」

寂しそうな声色。

なんの気なしに頭を撫でてやる。

「ごめんな、最近忙しくて」

中部地方の道場視察。

趣味と実益を同時に満たせる実に楽な（楽しい）任務だったが、毎日増量した鍛錬と、その日訪れた流派に関するレポートを纏めなければならない過重労働生活では、ゆつくりする時間は皆無に等しく、LINEの返信もままならなかったほど。

幸い、LINEに毎夜毎夜カラにしても次の日には100通以上送られてくるメールのほとんどが結芽と薫（昨日は可奈美のも増えていたが）のモノだったお陰で返信は割りと楽だった。

だいたいは何してた？ って言うメールだから同じ文面を流用できるのも良かった。

何故そんな事を聞きたがるかは知らん。

女心は海よりも深く、冬の夕日よりも変わりやすいのだ。

つまりよく分からん。

むーつとふくれつ面の結芽が俺を睨んでいる。

切れ長の瞳は、燕と言うより鷹のよう。

「本当は昨日のうちに会いたかったのに、お兄さん部屋にいないし」

「面目ない」

「紫サマには邪魔されるし」

「うん？」

「なんでもなーい」

俺の腹に顔をうりうりと押し付けていた結芽の動きが止まる。

バツと服を剥かれ、歳のわりにカッチカチのお腹が露わになる。

結芽が俺の腹をジーつと見つめる。

俺はでべそでも無いし、そんな見るようになモノは何もないぞ。

「お兄いさんさあ、なんか凄い紫サマの匂いするんだけど、何かしたの？」

「昨日の夜立ち合いはしたな」

「……へー。にしては匂いが濃い気がするんだけど」

結芽が腹に顔を埋めてスンスンと鼻を鳴らす。

止めろい、恥ずかしい。

「そうか？　——うーん分かん」

「まあ、お兄いさんからじゃないなら良いけどさー」

ズボツと服の中から頭を抜いた結芽が、俺の周りをろくろのようにしがみついたまま回る。

ギリギリとまるで何かの絞り機のように胴が締まる。

止まれ結芽、俺を絞っても何も出ないぞ。

俺の想いが届いたのか結芽は回るのをやめて俺の背中に飛び乗った。

「ね！　お兄いさん遊ぼう？　久しぶりだし、いっぱいやろうー！」

「ああ、分かってる。でもその前に朝ご飯な。お腹空いてんだ」

「えー、もー仕方ないなー」

「ちやちやつと食べたらずぐやるからさ」

「オツケー、じゃあ結芽は、このままお兄いさんの上で待ってるねー」

「いや降りろよ」

「やだー」

がぶー

「あづつ、おい噛むなよ」

「ひゃふあー」

ガジガジ

「ったく」

食事が終わる頃には恭侍の両肩は真っ赤になっていた。

◇◇◇

「飛鷹はいるか」

折神家敷地内に建てられた剣術道場で結芽と立ち合い稽古をしていた所に、藍色の髪の毛の妙齢の女性が現れた。

俺と結芽が在籍している学校「綾小路武芸学舎」の学長 相楽結月先生だ。

流派は天然理心流で、俺の師匠の弟子。つまりは俺の姉弟子と呼ぶべき方であり——ほんつつとうに、色々お世話になりまくって、頭が上がらない大恩人。

現在は、色々と事情のある結芽の保護者になってくれていて、初等部に結芽を通わせる傍ら、天然理心流の剣を仕込んでくれている。

と言うのに

「何の用？」

結芽、そんな邪魔者を見るような目で先生を見るんじゃない。

先生が可哀想だろう。

「います。相楽学長、何か御用ですか？」

俺と結芽を交互に見て、学長が渋い顔をする。

このまま行ったら（呼んだら）結芽がご機嫌斜めになるんだろうなあ。

って顔。俺も同じ顔をしている自覚がある。

「少し話したいことがある。来てくれるか」

「はい、結芽少し待っててくれ」

すっごい不服そうな顔。

「……少して済めばいいねー」

結芽が拗ねた様子で言う。

相楽学長が、ギクリと肩を強張らせた。

なるほど、任務か

「——それは、どれくらい掛かりますか？」

「大した日数は掛からない。ちよつとしたお使用のようなモノだ」

「えー。ならさー、別にお兄いさんじゃなくてもよくない？　なんでわざわざお兄いさ

んにやらせるの？」

「飛鷹が最適なんだ。断言するが、こんな事滅多に起こらない」

そう相楽学長が説き伏せようとするが、結芽の瞳は冷たいまま

「へー、その滅多にないが、最近二回連続で起きてるんだけど。2度有ることは3度有るって言うよね」

「……3度目の正直と言う言葉もある」

「2回嘘をついた時点でどうだか」

「結芽！」

そう叱るように言うと、結芽がもつとふてくされた顔で俺を見る。

咄嗟に頭を撫でるが、嫌だったのかすぐに払い落とされてしまう。

「……相楽学長。その任務が終わったら、しばらく任務を遣さないで貰えますか？」

「私のできる限りの事はしよう」

「ありがとうございます」

いつの間にかしゃがみ込んで本格的にいじけ始めていた結芽の身体を覆うように抱きしめる。

「結芽、この任務が終わったらお花見に行こう」

我ながら背筋ガガガ、我慢我慢

「……信じられないよ、その約束は——前にパパとしたんだもん」

「……すぐに帰ってくる。美味しいな重屋さんがあるんだ。一緒に食べよう」

そう言つて立とうとする俺の腕を結芽の小さな手が掴んだ。
もう片方の手が小指を立てて突き出される。

「……指切りして」

「ああ」

小指と小指がしつかりと絡む

ゆーびきりーげんまん

嘘ついたら

はりせんぼんのーますつ

指きった

「……約束だからね？」

「ああ」

「嘘ついたら本当に丸呑みだからね」

「魚つ[!]? まあ、いいさ。嘘になつたらその時は、煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

「うん、ちゃんとハリセンボン用意しとくから」

「煮焼きの方がマシかなー」

下手をうてば、本気で食わされかねない。そうでなくとも、約束を破れば今度こそ結芽に嫌われてしまうだろう。

それだけは避けねば

◇◇◇

相楽学長の私室にて、俺は一枚の紙を渡された。

「それで、俺が適任の任務って言うのは何ですか？」

「これだ」

紙に記載された写真に写るのは、どこかの制服を着た髪も目も真っ直ぐな少女。

「女の子——制服は伍箇伝のモノではないですね。彼女が何か」

「正確には彼女の母に用がある。彼女の母 十条篝は、20年前刀使として活動していたんだ。私たちと共に。——そして、紫様のかげがえのない友人だった。今回、お前には紫様の縁者として、彼女の弔問ちようもんに行ってもらいたい」

去る者、来る者 〈十条姫和〉

人が死ぬ時

と言うものを、私はきちんと理解していなかった。

人は誰しもそれぞれに命があり、心があり、人生があり、その死もそれに相應しいモノであるはずだと私は信じていた。

——
信じていた。



母が息を引き取っているのに気付いたのは、居間で横になっている母に昼食の話をして、返事が無かったからだだった。

——何より先に驚いた。

今朝

一緒に朝食を食べたと言うのに

遺言のようなものなど一つとして聞いていないと言うのに

ついさつき、春休みの宿題をするために母の前を横切ったばかりだと言うのに

母は知らぬ間に——本当にいつのまにか、私を置いて死出の旅へと逝ってしまっていた。

——遅れて悲しみが押し寄せて、布団を投げて母を抱きしめた。

抱き上げた母の身体は、小説で書かれるように、鉛のように重くも、羽のよう軽くも無く、鳥肌が立つほど冷たくもなかった。

髪は多少荒れているものの、いい匂いがしたし、

なにより——まだ暖かった。

それでも、どこか遠くを見つめるように薄く開かれたままの瞳は二度と瞬く事はなく、意思の力が抜けてほんの少しだけ軽くなった母さんの身体は、私が思っていたよりもずっと痩せ細っていて、骨張っていて、その感触は——

——どうしようもなく、石のように固かった。

頬を伝った滴が落ちて、母の服に染みを作った。

父の位牌の横に、母の位牌を並べて手を合わせる。

母の法事は驚くほどつつがなく行われた。

母が前から、自分が死んだ時の事を手配してくれていたからだった。

最初の一週間。

初七日は知り合いのお婆さんたちの手を借り、やるべき事をやっているうちに過ぎていて、法事が終わり、位牌を受け取った次の日、九日目になってようやく人心地着いた気がした。

目を閉じて、母に想いを馳せると、まず一つのことろが心に浮かんだ。

——母は父さんに会えただろうか。

会えていればいいな。いや、きつと会えるだろう。

父さんは優しくて立派な人だったと母から聞いていた。母も優しくて立派な人だった。なら2人はきつと、いや必ず空の上で会えているだろう。

私はそう信じて、2人の冥福を祈った。

ピンポーン

インターホンが鳴った。

母の弔問に誰か来たのだろうか？

手を合わせるのを切り上げて、玄関へ向かう。

ガラガラと引き戸を開けると、目の前に、着物を着た知らないお爺さんが立っていた。

「始めまして——になるか。自己紹介をしよう。俺の名は終——。君の祖父だ」



なんだか何か面倒——と言つては悪いが、何かを依頼される予感がした。

「ん、どないしはつた？」

「いえ、なんでもありません」

この俺、飛鷹恭侍は、現在、着物女性に連れられて、平城学館の中を練り歩いている。

十条篝の弔問の任。

多忙な折神紫様に代わり、友であり、戦友であり、侍女であつた十条篝さんへお焼香を上げに行く道中、俺は奈良県にある伍箇伝の一つ。平城学館に挨拶しに立ち寄つたのだが……

「実はねえ、ちよお飛鷹くんに頼みたいことがあるんよ」

何故か平城学館の学長「五條いろは」学長に相談（追加任務）があると云われて応接室に連れて行かれていた。

「……俺にできることなら」

弔問はそれこそ半日で終わるし、簡単なお使い程度なら受けて良い。

簡単なお使い程度ならな！

日にちの掛かる仕事は（後で結芽に殺されちゃうから）堪忍してつかあさい。

「結月ちゃん（相楽学長のこと）が飛鷹くん頼んだ篝ちゃんの弔問に少おし絡んだ話なんやけどね。実は、篝ちゃんの娘の十条姫和さんに面倒ごとが寄ってきてるらしいんだよ」

「面倒ごと……ですか？」

「そう、面倒ごと。大人のくだらない見栄の話。篝ちゃんの事、結月ちゃんから何か聞いてはる？」

「一応は。十条篝さんは元々、柗と言う折神家に仕える家の出身らしいですが、それについてでしょうか？」

十条篝女史は、20年前、紫様のお側仕えだった。

柗家と言う折神家とも関係の深い由緒ある家の御息女だったんだが、彼女は相模湾岸大災厄で刀使としての力を失ったのち、彼女の今の苗字である十条——の家へ嫁入りし、柗の家を継がなかった。

それが元で、柗家とはそれっきりになっていたらしいが……
はあ。

まあ、十中八九、そういう話なんだろう。

五條学長がパチンと手を合わせた。

当たりのようだ。

当たって欲しくなかった。ろくでもない話の確率九分九厘。とうぜん9割プラス。

「そう、問題はそれなんよ」

細い目は表情の機微が見えにくいのが、頬に添えられた手と全身の雰囲気から五條学長から憂いた雰囲気醸される。

「柊家って言うんは、ずーっと昔から折神家に仕えていた由緒正しいお家なんやけどね。

ここ20年間。具体的には、篝ちゃんに紫様の近衛から、怪我で刀使を引退して以来、折神家と疎遠になっているんよ。篝ちゃんが以降、分家を含めた柊のどの家の子も刀使になれへんかった。近い家の子お、側仕えにしようとしてはったけど、紫様も篝ちゃんの後に新しい側仕えを付けることはあらへんどした。それでも柊家現当主の爺さまは、どーにかこーにか折神家と、また昔のように仲良うしたいと思つとるらしくて」

「直系の姫和さんを柊家に連れ戻して、折神家に貢ぎたい、と」

「まあ、それしか考えられへん」

「醜い話ですね」

「酷い話や」

「でも、十条さんは、中学一年生でしよう？　彼女は伍箇伝に入学していないはずですが」

「飛鷹くん、御刀に選ばれたからと言って、誰もが刀使になるとは限らへんよ。お母さんが床に伏せながらも生きていた十条さんなら尚のこと。刀使として何処かの学校に行くよりも、一分一秒でも籌ちゃん——お母さんの側に居たいと思うのは自然のことだと私は思うわ」

ああ、なるほど、たしかにそれは当たり前の考え方だ。

刀使の使命も大事な事だが、大切な人の側から離れるのは、なかなか耐え難い。その気持ちはよく分かる。

そしてその反対に、その終の人間に対する怒りで俺の腹わたは、ぐらぐらと煮えたぎりをはじめていた。

病床の母、貢物できる娘。

絶縁状態の祖父が今になって接触しようとするその意味。

——親が、自分の娘が死ぬのを待っていたと言うのかよ。

この推論はあながち間違いいではないのだろう。

——クソ

罵倒の言葉がまろびでそうになるのを鋼の意思で食い止める。

「——で、俺は何をすれば」

「どうやら顔までは隠せなかつたようで、五條学長はちよいちよいと両手を下げるように振り、どうしようと俺を宥める。」

「飛鷹くんには、私らが十条さんの環境を整えて……いや、もう大体察しは付いてるようやし、言わしてもらおうわ。飛鷹くんには、柊の人たちが親権を手に入れられんよう、うちらが工作している間、十条さんに近づく柊の人を追っ払ってもらおう思うとります。柊の人が十条さんの意思を尊重してくれるか分からへんからね」

——フウ

「……いいでしょう、承ります」

「おおきに。大丈夫、飛鷹くんは紫様直属やろう？ その学生手帳（作りはほぼ警察手帳）を見せれば、柊の人は、水戸黄門の印籠見たみたいにイチコロや」

俺、折神家と特異的な関係がある事は、十条姫和ちゃんには秘密にしてくれって相楽学長に頼まれてんだけどな。

まあ、どうにかするさ。

「そうですね」

五條学長が腰を上げ、それと同時に俺も立つ。

「そういえば、追い払うつて言っても具体的にはどうすれば？ その——私情で申し識ないのですが、俺、早めに京都に帰らないといけなくて」

「それは大丈夫。事情は結月ちゃんから聞いたります。とりあえず十条さんの所にご挨拶してきたつて。その後は、近くの交番に話通しとくから、そこに泊まつて、明日、十条さんに迎えの車出すから一緒に京都に帰ればよろし」

「ふむ、了解しました」

五條学長が深々と頭を下げる。

慌てて俺も頭を下げた。

「それじゃあ、どうか十条さんをよろしゅう頼みます」

「はい、任せました」

安請け合いな気もしたが、まあ、こればかりは性分なのだ。



私の祖父を名乗った男は矢継ぎ早に、話を切り出した。曰く、母は優秀な刀使だった。曰く、母には許嫁がいた。それなのに母は、現場で知り合った別の男と勝手に結婚したと、最初は思い出話だったのに、話が進むにつれて、それは昔話の様相をした恨み言に

すり替わっていた。

そして、その最後にその人は言った。

「今まで苦勞をかけた。柗の家に迎える用意はできているから戻って来なさい」と

法事が終わり、ようやくと心の整理がつき始めたばかりだったと言うのに、その男の言葉はいちいち癩に触った。

今まで苦勞をかけただと。

一番苦勞していたのは母さんだ。

父さんが死んだ後も、仲良くしてくれていた父方の祖父母も早くに死に、友達も遠く、頼る相手が居なかった母が一体どれほど苦勞したか。

それに、柗の家に迎えるだと。そもそも私は、柗と言う家の事などほとんど知らない。母の思い出でチラリと名を聞いた程度でしかないというのに、

なによりも、この男は――

「おい爺、無駄話はそこまでにしてくれねえか？ こつちはアンタのくつだららない自分語りなんぞよりも余程大事な用事があるんだ」

私の堪忍袋が切れる寸前に、男が横に突き飛ばされた。よろめく男の後ろから私と同じぐらいの少年が現れた。

なんとも珍しい毛先は黒いのに根本は白い逆プリン色の頭をして、白を基調として黒のラインの入った学生服を着た中肉中背の少年だった。

男が少年に突き飛ばされた腰をさすりながら、少年に詰め寄る。

「くだらない話だと。私は今、この子と大事な話を」

「大事な話なら、そっちの十条さんだつてそれなりの顔するはずだろ？俺が見た限り、十条さんの顔は、小学校で校長の話を聞く時の俺と全く同じ顔してたぞ。というか、そもそも大事な話なら、こんな所じゃなくて家の中でやれよ」

まあ、アンタを十条さんが家に入れてくれるとは思わないけどな

少年がそう言い切ると、男は顔を真っ赤にして少年に手を伸ばした。

ゴツ

と言う音と共に男が倒れた。

少年が男が伸ばした手を払い退けると同時に、もう片方の腕で胸を拳を打っていた。

綺麗な柄物の着物に土が付いて模様が霞んだ。

「おっと、ごめんよ、手が勝手に。まあ、アンタも同じようなもんだろ？ おあいこつて

事にしようぜ」

「……小僧、この私が、刀剣類管理局歴代局長、折神家に仕える柊家の家長と知って——」

「知らん知らん。貴方様がどなた様だろうが、どちら様に仕えるあちら様だろうが知らねえよ。家族を亡くしたばかりの女の子の前で、お焼香もせずに好き勝手がなり散らすような常識知らずの名前なんざ、知る価値もない」

「おのれ」

「おいおい、そんな怒るなよ、元はと言えばアンタが悪いんだろう？ 娘が嫁いで跡継ぎが居なくなつて、それなのに娘とそのまま実質絶縁した結果、落ち目になつた元名家の終さん？」

男が射殺さんばかりに睨みつけるのを、少年はなんとも思つていない様子で笑い返す。

ただ、その目が全く笑つていない事は誰の目にも明らかだ。

「貴様」

「知つてますよお、知り合ひの此花さんの話で一回だけ軽く話されていたのを覚えていますから」

怖い顔をしていた男が怯んだ。

「……此花……だと。いや、その制服——」

白地に黒のラインの入つた制服を採用しているのは日本国内に一校だけ。

伍箇伝に所属する綾小路武芸学舎のみ。

彼は綾小路武芸学舎の学生なのだろう。

「やつと気付いたかよ枯れ木爺。こんな制服の学校なんて、日本に一校しかないのに、全然気付かねえんだもん。そりゃー、そんな節穴じゃ、政財界で生き残れるわけねえわ」

少年が小馬鹿にするように笑う。

男が何か言う前に少年が畳み掛けた。

「俺さ。今、刀剣類管理局の長である折神紫様が直々に任命した伍箇伝の学長からの依頼で、ここに居るんだ。んでさ、今日中に済ませないといけない任務があるのよ、その十条さん絡みでな。でだ、なんか十条さんと世間話しに来たアンタには悪いんだけどさ、今日の所は帰ってくれねえか？」

アンタ邪魔なんだよ

齒に絹着せないを体現した物言い少年はそう言い切つて男の肩を叩いた。

男は顔を信号機のように目まぐるしく顔を赤青白に明滅させる。

けれど返す言葉が見つからなかつたのか逡巡の末に、一言「また来る」とだけ言い残して帰っていった。

少年は坂を下っていく男の背中に、「もう来るんじゃないやねえ」と言葉を投げつけた。

男の足が一瞬止まったが、男は振り返らず、そのまま肩を怒らせ坂を下っていった。少年はからからと笑いながら、私の方を向き、ざまあねえぜと男の背中を指差した。

……流石にそこまであの男を小馬鹿にする気は起きなかった。

少年は、私がそこまで望んでいない事をすぐに察し、カラ回った笑い声をピタリと止めると、私の方を向きながら恥ずかしげに頬をかいた。

そして次の瞬間には、腰をブイの字に曲げて、深々とお辞儀をしていた。

「ごめん!!」あの爺さんの物言いがあんまりにも癪に触つたもんでつい！ 十条さんの前でやる事じゃなかった。本当に申し訳ない!!」

さつきまでの威勢はどこへやら、平謝りする彼の姿に私は目をパチクリさせる。

「——いや、謝る必要はない。私もあの男にはあまり良い感情を抱いていなかった。むしろ追い返してくれて助かったぐらいだ」

「そうか！ それは良かった!」

いやあ、万一、あんなクソ爺でも懐かれてたら面倒だったからなあ

と少年は言うが、安心してくれ。

私もあんなロクデナシ、血が繋がっている程度じゃ絆されなどしない。

「それはそうと、伍箇伝の学長からの任務があると言っていたな。それは一体どういう任務なんだ?」

ああ、と少年は今思い出しかのように手をポンと叩くと、背負っていた竹刀袋に手を回し、竹刀袋に引つかかっていた何かをするすると取り出した。

それは白いビニール袋で中身は結構膨らんでいたが、何よりもまずそのビニール袋から飛び出した色とりどりの花に目がいった。

一目で分かる。花束だ。

「学長の代わりに、十条篝さんへのお焼香に来たんだ」

少年はそう言うのと、にかつと笑ってみせた。

◇◇◇

少年——いや、私より一つ年上だったな。

飛鷹恭侍さんは、持ってきたモノを全て仏壇に供えて手を合わせていた。

先程の私の祖父を名乗る男を追い返した時から想像できないほど、その所作は丁寧だった。

随分と長く手を合わせていた飛鷹さんが、つむっていた目を開け、私の方に振り向いた。

「ありがとう。これで学長からの頼みを果たす事ができた」

「いや、こちらこそ。母の葬儀は本当に近くの友人たちだけを呼んだ小さなものだったから、こうして来ていただいて母も喜んでいるはずだ」

「そう言ってくれると助かる。なんだか変なものをお供えしてしまった手前、ちよつと後ろめたさがあつたから」

そう言いながら飛鷹さんは苦笑い。

飛鷹さんが持ってきた来たものは、まず、豆の甘煮感と寒天。これは母の好きなスイーツの豆かんの材料だ。

これに關しては、ただキッチンと母のことを知っている人の代理なのだなどと素直に思えたのだが——問題は隣の隣、ドンと置かれたカップ焼きそばにあつた。

飛鷹さん曰く「これは必ずお供えしろ」と念を押されたそうだが……。

手軽なため、それなりの頻度で食べていたものの、母はカップ麺も焼きそばも特別好きだつたという覚えはない。

にこにこ自信満々に取り出したソレを見て私が首を傾げたのを見て、飛鷹さんは困った顔をしてしまったが、知らないものは知らないのだ。

それでも飛鷹さんは、念押しされたからと、カップ焼きそばを豆かんセットの横にお供えし、私たちは、2人とも頭にハテナマークを浮かべたまま仏壇に手を合わせたのだつた。

「なんでも、なかなかの堅物だったらしいぞ。君のお母さんは」

「そうなのか？ 私は母としての姿しか見た事がないが、母は柔軟な考え方をしていた」

「まあ、学生時代の話だからな。考え方も変わったんだろう」

私は飛鷹さんの持ってきた寒天と豆の甘煮で豆かんを作り、それを肴に、母さんの話をしていた。

飛鷹さんは自分の話は全て、知り合いの受け売りだと念押しして来たが、あまり刀使だった頃の話をしてくれなかった母さんの話は、又聞きだったとしてもとても興味深かった。

その他にも、飛鷹さんは、伍箇伝の学長の小間使いとして、色々と頼み事をされていくらしく、その話もまた面白かった。

流行にあまり詳しくない私に対して、流行もへったくれもない話ばかり振ってくる飛鷹さんは、逆に気兼ねなく話せた。

ただそれでも、話のレパートリーが互いにあまり無いもの同士、1時間としないウチに私たちの話の種は切れてしまった。

人の家に理由もなくいつまでも居るべきではないと思ったのか、飛鷹さんはスツと立ち上がる。

「それじゃあ、そろそろ俺はお暇するとしようか」

「そう——ですか」

少し名残惜しく感じるのは、こうして他愛無い話をしたのが随分と久しぶりだからだろうか。

「もう帰ってしまうのは残念だが、色々と母さんの話が聞けて良かった。……もし飛鷹さんが良ければ、またウチに来てくれ」

次の機会など、そうそう有るはずは無いが、せめてもの思いでそう言うのと飛鷹さんは、楽しそうに笑った。

「ああ、また会おう！」

何故かそう自信満々に飛鷹さんは言い残し、私の家を後にした。



そして次の日。

平城学館の学長 母の友人である五條いろは学長に請われ、家を開けることになった私は、隣の席に飛鷹さんが居ることに気付いた。

「また会ったな！」

飛鷹さんは悪戯が成功した子供のように
にかつと笑った。

人智のありか

ガリガリガリガリ

何かをかきむしる音が響く。

ガリガリガリガリ

何かを書き綴る音が響く。

ガリガリガリガリ

何かを乱暴に研ぐ音が響く。

ガリガリガリガリ

ほの暗い部屋の中、一人の男が無心で何かを刻む

ガリガリガリガリ

「成果を、力を、示さなければ」

ガリガリガリガリ

「足りない……」

ガリガリガリガリ

焦燥が男を駆り立てる。

その衝撃でうず高く積まれた書類の山が崩れる。

バサバサと紙が舞い散り男の神経を逆撫でる。

崩れた紙はインクの飛沫と共に男の白衣をまだらに染め上げ、数十回の書き直しの末にようやく仕上がった一枚の紙を台無しにした。

書類がハラハラと桜吹雪のように舞う中で、一枚の紙がひらりと男の前に舞い降りた。

『ノロを利用した擬似御刀の量産計画』

そう銘打たれた紙には踏み潰すように、大きな赤い二文字が刻まれていた。

『不可』

「ふざけるな!!」

その紙が目映ると同時に男は吠えた。

その書類は男が書いたものであった。

男は白衣が汚れるのも構わず机の上のあらゆるものを薙ぎ倒した。

ペン立て

無数のペン

中身が入ったままのカップ

電気スタンド

紙

紙

紙

それら全ては砕けんばかりに壁に叩きつけられ、散った何かの飛沫が男の頬を濡らした。

男は荒んだ心のまま荒れ果てた書齋を飛び出す。

通りがかる研究員は男の顔を見てギョツとした。

痩せぎすの男の顔は病人のように生気を失い、頬は痩せこけ目元は黒く落ち窪んでいた。

しかし、その瞳だけは異様なほど生気に満ち満ちていて、銀メツキのようにギラギラと輝いていた。

男は、男にしか意味のわからない何事かを叫びながら実験室へと駆け込んだ。

そして実験室から発せられる奇声はその日一日止まることはなく、同僚は誰もが不気味がつて一人としてその部屋に近づくことはなかった。



飛鷹恭侍の朝は早い。

仕事が無ければ日が昇ると同時に起きる。

(先日にな務があればこの限りではない)

うつすら薄明るくなった空。

太陽はまだ地平線の彼方で光だけを届け、姿を見せない。

カーテンが白んだ瞬間、軍隊の即起訓練ばりの速度で布団を飛び出す。

40秒を待たずに支度を済ませ、行く先は剣道場。

合鍵待ちの恭侍は自由に出入りできるのだ。

その習慣は剣術道場の門下生だった頃から変わらない。

何か事情がない限り、恭侍は朝のおきぬけには棒を振る。

棒と言ってもただの物干し竿や、子供が道端で拾うような棒きれではない。

全長110cm

目の詰まったイチイの木で出来た本物の刀なみに重い木刀だ。

それを使って、

素振り

形稽古

足運び

ついで技の研究

と朝の鍛錬をこなすのだ。

そして日がすっかり昇り影ができる頃、誰にも気付かれないように部屋に飛んで帰るのが、彼の日課だ。

そして、彼に何か用事がある場合。

「飛鷹、君に頼みたいことがあるのだが時間はあるか？——」
そのルーチンは彼を捕まえる絶好のチャンスとなる。

「や、山城由依って言います！ よろしくお願いします！」

「よろしく。俺は飛鷹恭侍だ」

差し出した右手を両手で握りかえされる。

「はい、よろしくお願いします！」

にこにこ眩しい笑顔。

青い髪をポニーテールに結びあげた女の子。

山城由依ちゃん

彼女をエスコートするのが今日の俺の任務。

今朝、学長の顔より見たことのない担任の先生に請われて彼女の事を頼まれたのだ。

「んう？ どうかしましたか？」

「いや、なんでもない。さ、行こうか」

ああ、これが、仕事のある自分の代わりに姪っ子を遊園地に連れて行ってあげてくれ。とかだったら最高だったのになあ。

だがしかし

この万年竹刀袋を背負った怪しい折神家直属査察官様に、そんな頼みが来るはずもなく

今日の行き先は郊外に佇む俺行きつけの研究所。

伍箇伝最長の歴史を誇る綾小路武芸学舎が持つ長船で研究されるほど新しくないけど、価値のある研究を長く続けている息の長い研究施設だ。

その外観はさながら……なんて言えばいいか。

息が長いがゆえの増改築で盛りに盛られ、モダン＋和風＋近代みたいなミックスキメラな外見をしている。

そんな某珍百景に登録されそうな見た目をしているその研究所の名は

『京都特異災害研究所』

俺にとつてその珍妙な館は、遊園地並みかそれ以上に心躍る場所なんだが、客観的に女の子を送り届ける先としてこれ以上ないほど「無い」

そんな場所に小学6年生の女の子を連れてく様は、さながらマッドサイエンティスト。というか単純に怪しい人。

おじよーちゃん、飴ちゃんあげるからついておいで
てなもんで

仕事を選べない世知辛さと、この女の子が自分でそこに行く選択をしたという驚きで、俺の心中、大嵐。

「うわあ、なんだか凄そうな研究所ですね！」

「そうだな。あの見た目はなかなか奇抜だ」

表面上は大人な対応をしつつも、心の中では女の子心かわからないと七転八倒していた俺は、その時、この少女とこの先濃い付き合いになるとは全く想像していなかった。

大切なもの 〈山城由依〉

未久

私の妹

ちっちゃくて、あつたかくて、でも将来の夢は学校の先生で。いつも文字しか書いていないような難しい本をいっぱい読んでいて。

前会った時は、もうすぐ小学6年生の勉強が終わるから、そしたら私より小さい子に勉強教えてあげるんだ！ って言ってた。

凄くない？

小学6年生だよ？

お姉ちゃんと学年同じなんだよ？

あはは、まいったな

私、お姉ちゃんなのに勉強で妹に負けちゃうよ

未久は本当に凄いんだ。

どこに出しても恥ずかしくない自慢の妹なんだよ。

……

それなのに、どうして未久の病気は治らないんだろう。

私の伸ばした髪を羨ましがるのが、看護婦さんにお風呂に入れてもらう時に邪魔になるからって、未久は髪を伸ばそうとしない。

未久はそんな、人のことを思ってあげられる優しい子なのに。

未久は何も悪くないのに、

お父さんもお母さんも、

もちろん私だって悪いことなんてしたことないのに、

どうして未久は重い病気にかかって、ずっと病院から出られないんだろう。

どうして誰も悪くないのに未久が生きるために、いっぱいお金が必要なんだろう。

理不尽だ。

不公平だ。

幸せと不幸は人生で同じ量なんだ って。

何か……たしかそう、お母さんの持っていた本に書いてあった。

……なら、未久の不幸の分の幸せはどこへ行ってしまったんだろう。

未久の幸せが病気が治った後にやってくるというのなら、それはいったいどれくらい

先送りされているのだろう……。

……

未久

私の家族

大切な妹

勉強なんて算数以外からつきしの、運動神経しか取り柄が無い私が未久のために出来ること。

それが刀使だった。

荒魂と戦うのは確かに危ないし怖い。

でもお給料がいっぱい貰えて、学費も掛からない。

私がお金を稼げば、未久ももつと良い治療を受けられるはずなんだ。

……ならやる

私は未久のためならなんだってできる

なんだってやってみせる

私の命ぐらい未久のためなら惜しくないんだ。

――髪を結う位置は若干高め。

髪を束ねて、ゴムバンドをくるくる捻りながら髪を通す。引つかからないように気をつけて、きちんと固くなるまで何回も。固くなったら最後にキュツと絞る。

仕上げにチエツクのリボンを結んで完成。

制服を着たりなんなりして、身嗜みを整えたら、最後に未久のくれたひよこ柄のハンカチを二の腕にギュツと結ぶ。

あんまり強すぎると取れなくなっちゃうけど、絶対に落としたりダメだから固めに。鏡でハンカチとポニーテールの出来を確認。

よし！ 完璧！

「それじゃ、今日も一日、頑張りましたよー！」

ちよつと夢見が悪かった分、元気に声を張り上げる。

笑う角には福来たる

それを信じて私は今日も笑うのです！

と、そんな感じで意気込んだは良いものの、入った寮の食堂はガラガラでした。

今日は早起した上に、なんとなく身体を動かしたい気分だったから、ちよつと早めに来ただけど、予想以上に誰もおりません。

そんなあゝ、朝の気怠げなお姉様方を見るのが私にとって一番の保養になるのに、なんて思いながら食堂のおばちゃんから日替わり定食を受け取ります。

今日の日替わりは鮭の塩焼き

大きなホネを取って油断していると痛い目に会う憎しいアイツ。

ガラガラとは言うものの、ぼつぼつと早起きな先輩が陣取る食堂内。

ただ、こうして早くに来る先輩は一人が好きなので不用意に近づくべきではありません。私は学習する人間なんです。

はてさてどこに座りましょうか。

そう思つてあたりを見回すと見知った背中を見つけました。

「飛鷹さん！」

「ん？ ああ、山城か。久しぶり」

「まだ数日しか経つてませんよー」

「お？ そうだっけか」

私の方を振り返つたのは、黒髪に頭のとっぺんだけ白い面白い髪色をした男の人。

飛鷹恭侍さん。

私が刀剣類管理局の研究所に行った時に、相楽学長と一緒にしてくれた人でした。

「山城をここで見るのは初めてだな」

「いつもはもつと後で来ますからねえ」

「ああ、女子のゴールデンタイムか。流石の俺でもあの中に混ざる勇氣は無いな」

「ええ、あんな幸せ空間そうそう無いですよ」

いい匂いにするんですよ！と力説する私に飛鷹さんは呆れ顔。

「……山城の感性はちよつと男に似てるな」

「そうですかね？」

「そうじゃないか？」

「うー、まあ、いいじゃないですか。男の人が女の子の輪に入りたいって思うのは邪念ですが、女の子が女の子の輪に入りたいって思うのは、普通のことですよ」

女の子の特権って奴です。

「そういうものなんだろうか」

「そういうものなのです」

「そうか。あ、山城。唐揚げいるか？」

「え？？？くれるんですか！！？」

「鮭と交換ならな」

カチカチと箸を鳴らして笑う飛鷹さん。

「ええ、飛鷹さんのケチ」

「等価交換と言え。その細い方の端っこでいいから」

「細い端っこは脂がのつてて美味しいからダメです。こっちの太い方の切れ端ならいいですよ」

「それでもいいけどさ、ほら唐揚げ」

「わーい！」

もぐもぐと朝ご飯を食べていると一足先に食べ終わった飛鷹さんが話しかけてきました。

「山城、お前今週末も泊まりがけで行くのか？」

行くというのは研究所のことでしょう。

「んむ、そうですね。行く予定でふ」

「食べながらしゃべるなって」

「ん、失礼しました。飛鷹さんも行くんですか？」

「当然だろう。俺は君のお目付役だ」

「ご苦労様です」

「ああ、相楽学長に感謝しろよー」

「それはもう十分に」

私のわがままをどうにか通してくれた相楽学長先生には頭が上がりません。

私が何度も研究所に行くのには理由がありました。

まだ刀使として未熟な私は、荒魂との戦闘には出れません。

当然、お給料も出ません。お父さんたちだって、今の私にそこまで求めたりはしてないです。

でも、私は未久のために少しでも早く、多く、お金を稼ぎたかった。

そこで私は、相楽学長先生に無理を承知で、三顧の礼も真つ青なぐらい頼みに頼み込んで、最後には折れた相楽学長先生の取り計らいで、綾小路武芸学舎の管轄内で行われている研究のお手伝いを出来るようになったのです。

飛鷹さんは、そんな私が無茶をしないようお目付役として私の側に居るのです。

と言つても、基本的に土日だけで、学校にいる間はそうそう会うことは無いんですけどね。

曲がり角、ドンとぶつかり謝ります。

「おつ、と、山城か。ぼーっしてたら危ないぞ」

お昼休み

いつもよりぎゆうぎゆう詰めの食堂、空いてる席に座ります。

「うん？　なんだ山城、昼にこっち側に来るなんて珍しいな。ははーん。さては俺の力ツを狙っているな。よかろうトレードと行こうじゃないか」

午後休み

喉が乾いて飲み物を買うに。

「おう、山城。自販機の前で何悩んでいるんだ？　山城さえよければ何か買ってあげよう」

キーンコーンカーンコーン

午後の授業も終わりました、みんなが各々部活だったり、遊びに行ったり動き出す頃。絶賛節約生活中の私は当然帰宅部です。

机に突っ伏していると、一つ疑問が湧き上がりました。

あれー？

なんだか飛鷹さんとエンカウント率が高い気がしますよ？

というかそういうえば、先週の実験から妙に飛鷹さんと遭遇するような？

うーん、気のせいですかね

「なーに、考えてるのかな？」

「ふお!？」

机にうつ伏せていたら耳元で急に囁かれました。

聞こえたのは甘い口ローリータボイス。

なのに背筋に寒風ひゆるり

振り返るとそこには眉を潜めたピンクの髪の女の子

「つ、燕さん!？」

「正解ー」

「えつと……何のよう?」

「別にー? 最近おにーさんがまーた女の子にちよつかい出してるって聞いたから見きただけー」

「おにーさんって飛鷹さんのことですか?」

「そーに決まつてるじゃん。おにーさん以外にお兄さんって呼ぶ人いないでしょ
いや知らないよ

そんなこと

「……そつかー」

「うーん、ねえねえお姉さん」

「何かなー?」

「恭侍おにーさんのこと。どう思ってる?」

「どう思ってるって——」

そんなこと急に言われてもなあ

私、基本的に、まあ、未久のことがあるし男の子の事とか考えてる暇無いし、一緒にいるならやっぱり女の子の方がいいし

まあ、飛鷹さんは良い人だと思うよ? うん

「あー、優しい人かな? いろいろお世話になってるし良い人だと思いますよ?」

ジトー

あう、そんな目で見ないでくださいよう

当たり障りのないことしか言えなくてごめんなさいー

「」。まあ、いつか。それじゃあねー」

「え？ あの——」

燕さんは教室から出て行ってしまいました。

な、なんだったんだらう今の

ピロピロリン

スマホから流れる変更してないメールの着信音

開いてみるとそこには件の博士からのメールが届いていました。

■■■■

宛先：山城由依様

先日は実験協力ありがとうございました。

つきましては次回の実験日についてなのですが——

報酬は前回同様、
全額前払いさせていただきます。

返事は決まってる。

京都特異災害研究所

時は過ぎ去り、あつという間に土曜日が来たる。

俺たちは既に京都特異災害研究所の中。

研究所に入って早々、見知った顔に俺たちは出迎えられた。

「久しぶりだな恭侍くん！」

「本間先生、そうは言っても先週来たばかりですよ」

小柄な男性が手を伸ばす。

ハグをしてくれようとしているのだが、いかんせん背が低いので俺の方が屈んでそれに答える。

短くハグをして

「はっはっは、そうだったね」

彼が笑うとその特徴的な大きな鼻がふるふる揺れた。

大きな鼻にてっぺんはつるり、左右にふさふさの白い髪が生えた頭に小柄でふくよかな体型。

名を本間 博^{ひろし}

名前の「博」と「博士」の文字が似ているため、知り合いはもっぱら教授か先生と呼ぶ。

朗らかで茶目つ気のあるお爺ちゃん。

この京都特異災害研究所の重役の1人だ。

本間先生が由依ちゃんの方を向いた。

「君も、久しぶりだね。山城ちゃん。今日もよろしく頼むよ」

「は、はい」

本間先生は若干カタクなってしまうている由依ちゃんに優しい眼差しを向け、俺たちを研究所内へ誘う。

「さあ、行こうか2人とも。高田くんが待っている」

本間先生と共に研究室に入ると、駆け寄ってくる男が1人。

右手の義手が目を引く、ひよろりとした男性。

本間先生の教え子の高田博士だ。

「教授！ どこへ行つてらしたんですか」

「いやなに、2人を迎えにな」

「お久しぶりです。高田博士」

「飛鷹くん！ それに山城ちゃんも！ よく来てくれたね。さつそく今日の実験の話をしようじゃないか」

ワクワクとした雰囲気を出しながら、俺の手を取った高田博士に、本間先生が待ったをかける。

「まあ、待ちなさい。恭侍くんたちは来たばかりだし、高田くんも朝から準備で忙しくしていただろう。実験の話は、お菓子でも食べながらしようじゃないか。みんなも、一旦休憩にしよう」

研究室内から歓声が上がった。

来客用のふかふかソファに腰を沈めつつ、4人が一つのテーブルを囲う。

「それで今回も、2人には『鉄札』の運用実験をしてみらおうと思ってるんだ。飛鷹くんには危険度Dの荒魂との戦闘を、山城ちゃんには鉄札の運用実験と励起状態の御刀との併用時に鉄札がどのような反応を示すのか観測する予定だ」

「了解しました。山城はどうだ？」

「大丈夫です！」

「僕としては、飛鷹くん同伴の元、山城さんにも荒魂との戦闘をしてもらいたいところですが」

「高田くん」さん

「——失礼しました。こんな小さな女の子に危険な事はさせられませんもんね」

「私は大丈夫ですよ？」

「いやダメだ。いくら安全策を付け足そうが、荒魂との戦闘は危険なものだ。山城にはまだ早い」

おそらくお給金の値上げチャンスと置いていたであろう山城が頬を膨らませる。

俺は山城にそつと耳打ちした。

「山城がお金を必要としているのは分かってる。でも、俺たちが容認できるのはここまでなんだ。もう少し待ってくれ」

お目付役として、そして俺個人としても山城を実戦に出すのはまだ早いと、いや、家族のためとはいえ、小さな女の子がお金のために自身の身を危険に晒すことを俺は忌避しているのだ。

「……はい」

「さて！ お菓子を食べようじゃないか！ 色々とり揃えているよ」

「ありがとうございます。山城もどうだ？」

「えと、じゃあこのバタークッキーを」

「ほう、それはここの研究員が焼いたものでね。お味はどうか？」

「ん、美味しいです！」

「それは良かった。山城ちゃんが良ければ後で持って帰るかい？」

「え!?! いいんですか！」

「良いとも」

「ははは、教授が頻繁にお菓子を買ってくるせいで、研究室にお菓子が余っていますからね。どうせなら大事に食べてくれそうな子にあげた方が作った人も喜ぶでしょう」

「それじゃあ頂きます！ 後で！」

「へー、あ、なら俺もこのチョコの袋貰っていいですかね？」

「400円になる」

山城には甘かった顔が真顔になり、コーヒーをすする本間先生はにべもない。

「なんで!?!」

「飛鷹くんはもう十分稼いでいるだろう。自分で買いなさい」

ど正論

言葉のパンチがクリーンヒット

「そんなあ」

うなだれ机に顔を埋める俺を見て、山城がくすくすと笑った。

——良かった。

道化を演じたかいがあつたな。

元々の原因は俺だけど

今、俺がいるのは無骨な金属の箱の中。

家の二階ぐらいの高さに貼つてあるガラスから、本間先生たちの顔が見える。

ここは研究所の第3実験場。

荒魂との戦闘実験や訓練に利用される場所だ。

俺は綾小路武芸学舎の制服の上に黒の防弾チョッキのようなものを着ていた。

そののいたるところに施されたポケットには鉄札が満載してある。

『それではこれより第14回目の鉄札の運用実験を行います』

「OK」

目の前の落とし戸が持ち上がり、兜型荒魂が一匹現れた。

二本角の鎧兜の兜に虫の足を付け足して、後ろに車輪をつけたような形状のよく見る雑魚荒魂だ。大きさは大型犬ぐらい。

もつとも、危険度Dと言えど、包丁のような形状の鋭いツノを持ち結構な速度で突っ込んでくるので、刃物を付けた暴走自転車ぐらいには危ない。

荒魂は俺を見るなり、尻尾の車輪を回転させ、ブーンと音を立てながらこっちの方に突っ込んできた。

位置は低くそれなりに速い。が、それでも俺なら容易に見切れる速度。

一合で決着はつけられるが、そんなすぐに倒してしまつては実験の意味が無い。

「八幡力」

鉄札の神気を使い筋力増強。

強化した足で荒魂を蹴り飛ばす。

俺に蹴られた荒魂はひっくり返つたが、すぐに車輪を回転させて起き上がった。さて、ひとまずジャケットの鉄札が品切れになるまで、遊んでやるか。

『^{てっさ}鉄札』

一般に護符と呼ばれるもので、御刀の原料となる珠鋼を板状に加工したもの。

珠鋼を御刀に加工する技術は失われてしまっているため、現在は珠鋼をそのまま何かに使えないかとあれこれ研究されていて、

鉄札もその研究成果の一つ。

刀使でない人間でも鉄札の中に貯められた神気を御刀を媒介とすることで使用できるようになり、刀使でないにも関わらず、荒魂を倒せるようになるという革新的な発明なのだ。

……

まあ、一回の効果はもって数秒。

しかも一度使えば普通の人なら数十分。刀使でも数分の神気を貯め直す時間が必要になるため、鉄札を装備した非刀使の実戦投入は不可能と判断されたんだけどな。

(俺は特例)

それでも、鉄札は刀使の強化アイテムとしての配備を検討されていたんだ。

……

ところが最近になって、

稼働時間無限

能力の使用回数無制限、

自動発動

とかいう、とんでも性能の強化装甲

『ストームアーマー』

が開発されてしまったため、鉄札は配備計画が丸ごとポシャってしまった。

両方の運用実験に関わったことのある俺としては、製造コストがかかり、嵩張るストームアーマーと、コンパクトさが売りの鉄札は競合しないと思っていたんだが、

ストームアーマーはバッテリーに珠鋼を使用するため、同じ珠鋼を元に製造される鉄札に使われる分の珠鋼をストームアーマーに回したいという思惑が上の方にあつたのだろう。

ストームアーマーは刀剣類管理局が海外技術者と提携して作った肝いり装備。

優先度とか……な？

……世知辛いねえ

そんなこんなで荒魂をこれでもかといたぶり終えて、充填状態の鉄札が減ってきたので、

最後に鉄札限定の能力を使う。

御刀に神気を纏わせる

『神居』だ

それを使って一刀両断
俺の実験は終了した。

◇◇◇

さて、交代して山城の番。

今、彼女は第3実験場内で鉄札を媒介した場合と御刀だけの場合の能力の差異を観測するため高田博士の指示の元、御刀を振るっている。

俺と本間先生はその様子を一步引いた場所から眺めていた。

「鉄札、研究費増額してもらえると良いですね」

「そうだな。増やしてもらわないと鉄札の研究速度が大幅に落ちてしまう。高田くんのためにもなんとかしたいものだよ」

本間先生の高田博士を見る目は親が子供を見守るように優しい。

———だけど、

実のところ、高田博士に本間先生はどんな事を思っているのだろうか。

鉄札は高田博士主導の研究で、本間先生の研究は別にある。

それなのに、最近の本間先生は高田博士の研究に協力してばかりだ。

「……………本間先生。先生は『自身の研究、『偽神刀』はいいのですか?』」

本間先生は俺の言葉にピクンと肩を震わせた。

本間先生の研究。

御刀の製造技術が失われて久しい現代。

新たな神器を製造する研究を本間先生は行っていた。

その研究の成果が

『偽神刀』

一部界限（というか俺）からは荒魂刀と呼ばれる擬似御刀のことだ。

本間先生は俺の方を見ず、どこか遠くを見るような目で高田博士の背中を見つめていた。

いや、見つめているのは高田博士の鉄の右手だろうか。

「……良いのだよ。偽神刀は一応の完成に至った。その結果、その危険性が露呈した。そして私は自分の意志で研究は凍結したんだ。私はその判断は正しかったと思っっている。研究の結果がどうであれ、今の私に悔いは無い」

「本間先生……」

「今は、鉄札を刀使の少女たちに広く配備することが俺の望みなのだ」

「——そうですか」



山城由依にはお金が必要だった。

男には実験の試行が必要だった。

利害の一致。

『それでは、抜刀お願いします』

「はい」

少女の腰から抜き放たれたのは、赤錆色の刀。その刃は橙色に怪しく輝く。

『荒魂、開放します』

グツと山城由依が偽神刀を構える。

現れるのは兜型荒魂。

愛と勇気が荒魂を誘惑する。

偽神刀

『偽神刀』

珠鋼の原料である神気を秘めた砂鉄とノロを配合して造られた『負の神性を持つ合金』で製造された御刀もどき。

常に神気を放出していて、使用者を問わず、荒魂を切断した際に御刀と同じように荒魂をノロに還元することができる。

しかしながら、誰でも荒魂を倒せるというメリットと引き換えに、「荒魂誘引効果」と「使用者を侵食する」という2つの重大なデメリットを持ち合わせている。

とまあ、そんな理由もあり、研究の第一人者である本間先生から直々に「コイツは実用化できない」と悪い意味で太鼓判を押された偽神刀の研究は、結構前に凍結が宣言さ

れていたんだけど――

とぼとぼと眉をひそめながら歩く俺の後ろから、威厳のある女性の声が響いた。

「どうした飛鷹」

「いえ、なんでも」

即座に背筋を正す。

後ろに立つのは刀剣類管理局局長折神紫様。

最近ぐんぐん背が伸びて、身長はほぼ同じになったというのに今でも自分よりずいぶん大きく見えるのは、目の錯覚か、俺が萎縮しているのか。

――まあ、後者だな。

この圧迫感をなんとか乗り切るために、偽神刀再研究の謎で気を紛らわせていたが、態度に出るようではこの手はもう使えない。

出来るだけ早く紫様を研究室に届けることに集中する。

――いや心臓バクバク（恐怖）で集中できないわ。

――どうして紫様が、京都特異災害研究所に偽神刀の視察に来ているんだよ!!

ああ、この胸の高鳴り

そう、これはきつと恐怖。

強い想いを胸に秘め、俺は京都特異災害研究所の白亜の廊下を紫様と共に歩く。



事の発端は数日前

最後に鉄札の運用実験をした日から数週間が経過した頃

俺のスマホに届いた一通のメール

差し出し人は高田博士

その内容は「偽神刀の侵食効果を克服したから見に来て欲しい」とのことだった。

まずその一文に驚いた。

なぜなら侵食能力を克服すれば、偽神刀は実用化の目処が立つからだ。

偽神刀の問題点のうち荒魂の誘引効果は実はそれほど問題ではない。

偽神刀は珠鋼と抱き合わせることで荒魂誘引効果を打ち消すことができるのだが、そのために必要な珠鋼「持ち主のいない御刀」は日本に数千本単位で存在するからだ。

元々、戦国時代に戦で使うために量産されていた御刀は、その普遍性から400年以上経った現在においてもその価値を損なわず、その数は刀使の総数よりもはるかに多いのだ。

◇ いや、一本一本が海外で伝説になるレベルの神劍（御刀ニデュランダル）が量産されてたとか、戦国時代の日本マジヤバイ。

マジ修羅の国だわ。

銃弾を御刀で弾く技術とか真面目に劍術書に書いてあったし。

歴史考察で、信長が天下取るか秀吉が長生きしてたら、今頃アメリカは半分が日本国土になってたとか大真面目に考察されるだけのことはあるわ。

……

こほん、話が逸れた。

閑話休題

◇

で、問題の、まさしく致命的な問題になっているのが、使用者に対する侵食効果だ。

人道的な面で偽神刀に完全に身体を乗っ取られるまで侵食を受けた人間が存在しないため、侵食の効果は想像の域を出ないのだが、荒魂が人間に寄生し人型荒魂に変化するという例は古来からいくつもの文献に記されていて——というか20年ほど前までは、その実例が何度も観測、記録されていた。

——俺はその状態に常時リーチかかってるんだけどな

そのため、偽神刀の侵食能力も最終的には人が荒魂になってしまおうと考えられている。

まあ、この話は、まるつきりお伽話に出てくる呪いの武器そのままだな。

当然、そんな危険なモノを実用化なんて出来るはずがなく、危険な荒魂刀……ではない。偽神刀は本間先生が研究を中止したはずなんだけど——

高田博士、本間先生に内緒で研究続けてたんだな——

越後屋そなたもワルよのう

もつとも、高田博士は元々、神器開発の研究をするために本間先生の弟子になったらいいし、既存のモノを整形しただけの鉄札は性に合わなかったんだろう。

ちよつと分かる、鉄札にはロマンが足りない。

了承の返事を出すと、すぐに追加でメールが届いた。

なんでも、俺が来る時に貴人と呼ぶのでその人のエスコートを俺に頼みたいとのことだった。

ははーん

つまりは、高田博士からの本間先生と一緒になだめて欲しいというお願いだな。仕方ないなあ、と思いつつ、そのお願いにも俺は了承したのだった。



まさか、その貴人つてのが紫様とは全く想像していなかったけどな!!
いや、そもそも本間先生が相手なら素直にそう書くはずだわな。

ぬかったのは俺だ。しまったなあ

たぶん紫様の視察は前々から予定されていたんだろう。

でなければ、政府要人の紫様がそんな数日で呼ばれた場所に來れる訳無い。

……

でもそんな事情、こっちは知る由も無いじゃんか!

紫様が來るなんて考えてなかったから邂逅一番、内心ビビリ散らしたぞ!?

表面は取り繕ってみせたけどさ!

ドラクエVで例えるなら、パパスを探しに村の洞窟に行ったら、ゲマが居たって感じだ!
だ!

ぷるぷるボク悪い魔物じゃないよ

じゃないわい!

不意打ちすぎて心臓止まるかと思つたわ!!

「飛鷹、ここではないのか」

ハッと飛んでた意識が現世に舞い戻る。

いつのまにか俺たちは目的の会議室に到着していた。

やったぜ、お役御免だ。

「それでは紫様、俺はこのへんで——」

さながら千の風になるように、気配を消してフェードアウトしようとした俺の右肩を紫様の手がガツと掴んだ。

ぎゃあああ！ ミシミシ言ってる！ 肩軋んでる!!

「何を言っている。お前も折神家直属の査察官として、研究発表に立ち会うのだ」

「うおはい」

マジかよレフェリー



「ようこそ紫様、本日はご足労ありがとうございます」

招いた紫様にそう物腰低く語りかける高田博士。

その様子、実にレア

「御託はいい。早速、その侵食能力を克服した偽神刀とやら見せてもらおう」
大??切??断

まあ、送られた書類には目を通してるだろうし、なんだかんだ紫様つて視察とか割と面倒くさいがるタイプだし、この物言いも仕方ないか。

高田博士は気の毒だけど

「え? いや、その……確かに危険性取り除けたと申しましたが、紫様に直接お渡しするのは——その」

表情は変わらないが紫様の圧が強まる。

止めてください、高田博士は間違ったことは言つてません。

「紫様、高田准教授の言う通り、紫様が直に触れるのは危険です。高田准教授の想い、どうかご理解ください」

高田博士に助け船を出し、頭を下げる。

紫様は数秒置いてすぐに答えた。

「それもそうだな。無理強いをすすまなかつた。——では飛鷹。お前が私の代わりに偽神刀の査定しろ。ただし、知り合いだからと世辞は無しだ」

「承知しました」

ま、こんな所だろう

たぶん紫様も話を短くするために俺を連れてきたんだろうなあ。

内心うんざりしながら紫様に深く頭を下げ、高田博士が台に乗せて運んできた鞘に入った御刀——偽神刀を手に取る。

柄の手触りを確認して、鞘からわずかに刃を抜く。

覗く刃は俺の持つ偽神刀一号より鉄の比率を増やしているのか、荒魂つぼさは薄れていて、均一な赤錆色に、鋭く砥がれた刃は橙色に鈍く発光していた。

「ふむ」

なるほど侵食効果を克服したと言うのはあながち間違いではないみたいだ。

今までの偽神刀は、侵食能力の片鱗なのか、触れると手にちりちりと猫の舌で舐められるような感触があったんだけど、この偽神刀にはそれが無い。

「どうだ」

「良好です。確かにこうしてただ触れた状態では、以前のような偽神刀が人体に対して特異な反応をしているように感じられません」

「そうか」

「い、いかがでしょう」

どもるな高田博士。小物臭さが半端ないぞ

もつとどっしり構えろ准教授！

「いかかも何もあるまい。飛鷹はただ刀を持っただけ、荒魂と戦わせなければ実戦も何もないだろう」

そりやそうだ

「実験室を用意しろ。荒魂との戦闘を見る」

◇◇◇

さて、数週間ぶりの実験場。

一応の備えで俺の御刀と鉄札ジャケットを身につけての実験だ。

今なら三刀流行けるぞ。

鬼斬りとかしてみるか、荒魂って顔 鬼みたいだし。

——
恭侍の頭上

実験場と隣接した制御室内

『今まで戦わせてきた荒魂の最高危険度はどれくらいだ?』

『Dランクです。なにぶん偽神刀の使用者が普通の研究員だったもので、高難易度の荒魂相手は……』

『そうか、では今回は絶好の機会と言えるな。今用意されている荒魂を飛鷹が狩り終わったら、次は危険度B+の荒魂を放ってみろ』

『え——』

『案ずるな。飛鷹の腕は私が保証する。飛鷹ならば危険度Aの荒魂でも危なげなく倒せるだろう』

『わ、分かりました』

「——さて、足は用意してやったぞ。お前は どうする」

最初に出てきたのは前にも戦った小型の兜型荒魂。

今回は時間をかけて倒す必要もないのでとっとと片付けることにする。

尻尾の車輪が回転する予備動作。

次いで突進。

避けつつ、逆袈裟斬りですくい上げるようにツ

ガイーン

重い手応え

真つ二つにするつもりで振り上げた剣だったが、兜型荒魂は割れた卵のようにノ口を吹き出しながら吹っ飛んでいった。

やっぱり御刀に比べて切れ味が悪いな。

御刀は鍛造だが、偽神刀は鑄造なのだ。

割れてノ口を吹き出していた荒魂は、しばらくすると砂の城が波を受けて崩れるように橙色に光るノ口に戻った。

ふむ、荒魂と接触して活性化するでもなく、俺を侵食する感覚も無い。

これはひよつとするかもしれないな。

『飛鷹、何を呆けている。次が本番だ』

紫様の声が実験場に響く。

「——了解」

そりやそうだ。危険度D程度の荒魂じゃ査定にやならん。

気を引き締めて、俺が下段の構えをとると同時にさつき兜型荒魂が出てきた落とし戸が再び開く。

さて、何が——

ボウと何かが燃える音が聞こえた。

火球が迫る

右足で地面を蹴るようにして左に避ける。

俺の後方で火球が壁に当たりボンと弾けた。

落とし戸から音もなく荒魂が現れた。

それも当然、その荒魂には足が無かった。

「幽霊型荒魂か」

その名の通り幽霊のように足のない荒魂がふよふよと俺の前に浮かんでいた。

荒魂の危険度は、主に「攻撃の当てやすさ」と「攻撃の避けやすさ」で決められる。

意外かもしれないが、攻撃力と耐久力はあまり考慮されない。

だって基本的に荒魂の攻撃を一度でも食らえば戦線離脱だし。

逆にほとんどの荒魂は御刀の一撃を喰らえばノ口に戻る。

ゲームみたいにやれ攻撃力だ、防御力だなんて話は一切無い

一発当てるか当てられるかの世界なのだ。

そんな訳で荒魂の危険度は機動力や特殊能力が重視されている。一太刀で倒せないような大型の荒魂の場合、話はまた変わってくるが、

基本的に空を飛べたり、ほぼ群れでしか存在しないとか、そういう奴らは危険度が高く設定されている。

その中で『幽霊型荒魂』は危険度Bに数えられるかなり危険な荒魂だ。

足がないために動きの先読みが辛い点。

低空とはいえ浮いていることによって未熟な剣では弾かれて剣が通らない点。

さらには遠距離攻撃も可能。

兜型の群れに一匹混ぜるだけで群れ全体の危険度が跳ね上がると言われている。

飛来する火球を切り捨てる。

火の玉と言っても神力の塊が炎のような見た目をしているだけで、実際の性質はドラゴンボールとかの気弾に近い。

触れると爆発し、ボクサーのパンチを受けたぐらいの衝撃を受ける。

キチンと構えておけば大したことではないけど、実力不足の刀使の場合完封されてしまう可能性もある。

まあ、

火球

切る

3歩歩く

火球

切る

3歩歩く

そもそも荒魂の危険度は、下位から中級の刀使が撤退の目安に使うものであつて。

火球

切る

2歩歩き、足捌きを変える。

最上位の刀使にとっては中型までの荒魂なんて、ただのカカシと同義だ。

間合いが詰まった。

荒魂の口から火球が吐き出される瞬間、火球を切つ先で切つて一気に飛び込む

大股二歩の間合い。

八幡力を使えばもつと楽に射程に収められたけど、これはあくまで偽神刀の運用実
験。

だから、別の装備を使うのは極力控える。

とんとん

ズバツと

カツン

お？

偽神刀の切っ先を打ちつけられた荒魂が、さきほどの兜型荒魂のように吹っ飛んだ。しかし、壁に打ち付けられたのちに、幽霊型荒魂はまたふわりとその姿を浮かせた。どうやら俺の方が偽神刀の刃渡りを勘違いしていたことと、幽霊型荒魂が俺が目測した時点から少し後退していたのが原因らしい。

御刀なら多少ズレてもスツと切れるだけで吹っ飛ぶなんてことは無いんだけど、これも偽神刀、鑄造劍の限界か。

何はともあれ紫様の前でコレは割と失態だ。

汚名返上とはならないけど、直ぐに終わらせよう。

大上段、とんぼの構えに近い形で偽神刀を構えて素早く走りこむ。

幽霊型荒魂が口に火球を溜めているが構わない。

火球が発射されるが

それは軽く斜めに蹴り飛んで

とんつとん

と平べったい二等辺三角形を描きながら避けて、

あつという間に荒魂は目前。

しつかりと射程に収めて大上段。

頭部から正中線を割るように真っ二つ

……

に

ならない。

ずぶ……

偽神刀が不自然に荒魂の胸に相当する部分で推力を失い止まった。

幽霊型荒魂は頭部を両断され胸に偽神刀を生やしているが、まだノ口に戻るほどのダメージは受けていないのか割れた頭で唸り声を上げる。

そして顎がはずれるほど大きく口を広げる。

バイオハザードのゾンビ犬のように顔面がべろりと四当分して広がる。

そしてその顔に今までのものとは比較にならないほどの神力が凝縮していた。

第六感が警鐘を鳴らした。

とっさに偽神刀を掴む手を離し、目の前で腕を交差させる。

「金剛身」

ドオン

金剛身を張った直後に荒魂の頭部が炸裂し、俺の身体が吹っ飛ばされた。

一瞬気を失っていた。

その遅れを取り戻すように即座に立つ。

同時に背中の竹刀袋から御刀を抜刀。

俺の目の前には、頭部を失い代わりに偽神刀が刺さった岩のような風貌となった幽霊型荒魂の姿。

思考が渦巻く。

——何故偽神刀で切れなかった？

——頭部が損傷するほどの攻撃は異常だ。

——いや、それよりも

——逡巡など許さず、刹那に結論を出す。

——とりあえずぶっ倒す。

「八幡力！」

強化は脚部を重点的に

一足飛びで、間合いを零に

「神居!!」

御刀が白銀の炎を纏う

ギヤリイイイイイ

俺の御刀と荒魂の身体で激しく火花が散った。

ブンと御刀は降りぬかれ、荒魂は再度実験場の壁に激突した。
手に残る芯の通った手応え。

今の感触は……

もはや幽霊型の形を失った荒魂が再度ふわりと浮き上がる。

——コイツ、動体に刺さった偽神刀で俺の太刀を受け止めたぞ。
振り向く俺の前で浮き上がった荒魂に

じるじるじるじるじるじるじるじるじるじるじるじるじるじるじるじるじる
るじるじるじるじるじるじるじるじるじるじるじるじるじる

と、さつき吹っ飛んだ頭部のノ口と、さつき倒した兜型荒魂のノ口が偽神刀の刺さった荒魂に吸い込まれている。

刺さっていた偽神刀が徐々に立ち上がり、荒魂に呑まれる。

そして、みるみるうちに動体しか残っていなかった荒魂にすつきりとした丸い頭と、すらりとした真つ直ぐの足が付いた。

俺が構えている前に

すとん と人型荒魂が地に足を付けた。

——なぜ人型

——ノ口を吸収

——偽神刀はいつたい

後で考えろ
まずは斬れ

八幡力

間を詰める。

神居

御刀に神気をのせる。

胴は偽神刀が入ってて切れない。

狙うならもも。

そこから円を描くようにノ口を削ぎ落とし、偽神刀を取り戻す。

プランニングは一瞬

即座に

低く一刀

すらりと線を引く

手応え無し

|

|

|

人型荒魂は実験場から消滅していた。

◇◇◇

荒魂の思考のほとんどは人に対する敵意で占められる。

神気を秘めた砂鉄として安定した状態にあった『神性』を人間が自分たちがいいように利用するために無理やり『正の神性を持つ珠鋼』と『負の神性を持つノロ』に分離さ

せたからだ。

そして、その深い恨みを持つ故に、荒魂は一度隠世から現世に現界すると人が周囲に居るかぎり隠世には戻らないはずなのだ。

「それなのに何故」

あの荒魂は俺を前にして隠世に撤退したのか。

「簡単なことだ」

俺の眩きを紫様が拾った。

「どういうことですか」

「さきほどの荒魂の主導権を握っていたのは荒魂ではなく、偽神刀だったと言うことだ」
「偽神刀……。確かに偽神刀にも意志はあるでしょう。でも何故そこから荒魂に取り憑いて何処かに行くと言う発想になるんですか」

紫様がフツと笑う。

「荒魂は意思を持つ。御刀は持ち主を選ぶ。ならば偽神刀も同じであろう。そう考えれば偽神刀がお前を侵食しなかったのにも理由が付く」

うん？ どういうことだ。

荒魂は感情的な思考で、御刀は使い手を選び好みする。

偽神刀がその両方の性質を持ち、荒魂を制御できるとするのなら――

「——まさか。侵食効果が無くなっていたのは、既に心に決めた人が居たからで、他の人に浮気しようとしていなかったただけだって言うんですか!?! それで、今、荒魂を乗っ取ったのは、荒魂の身体を使ってその持ち主候補に会いに行きたいからだって! そう言うんですか!?!」

「そうなるな」

「……なんてこった」

「そうなる問題になるのは、その偽神刀に選ばれた幸運な人間は誰かと言うことだ。飛鷹でも、高田准教授でも無いのなら、いったい誰を偽神刀は主人に選んだのか」

紫様の話を聞いて、高田博士が腰を抜かし、自分の顔を覆った。

「……山城さんか」

それは眩きだったが、手狭な制御室に響くには十分だった。

「何だって!?! 高田博士!! それはいったいどういうことですか!!」

「飛鷹、山城という名の人間に心当たりはあるか?」

「山城は綾小路武芸学舎の初等部に在籍する刀使候補生です!」

高田博士の胸倉を掴んで無理やり立たせる。

「アンタ何をやってんだよ!?!」

「——すまない。彼女とはキチンと話し合った上で——」

「それ以前の問題だろうが!!」

「待て飛鷹。今、脱走した荒魂は十中八九、その娘の元へ向かった。ここは私が治めておくから、お前は事が大きくなる前に荒魂を討伐してこい」

喉から吹き出しそうな古今東西のありとあらゆる罵声を、奥歯を噛み砕くような勢いで噛み殺し、俺は高田博士を乱暴に離した。

「……アンタはもつと研究に誠実な人だと思つてたよ」

「ごふ、——私ほど研究に誠実な人間はいない。山城さんとも誠実に対話した上で彼女の自由意志で実験に参加してもらった」

「屁理屈を」

バンツ!

と制御室の扉を閉めて、俺は山城に電話を掛けた。

荒魂のなく頃に 〈山城由依〉

飛鷹さんに怒られた。

そりやもう、ものすつごい怒られた。

「危険な実験に保護者抜きの独断で参加するなんて言語道断だ！」
って

今までの人生で一番強く怒られたと思う。

それでも私は——自分で買った苦労なんだから、私の勝手だ
って思つて、そしたら私の考えは飛鷹さんにはお見通しで、

思つた事をピタリと言いついて当てられちゃつて、

「それも我がままだ」って釘を刺されちゃつた。

青々とした緑生い茂る運動公園。

その中央の広場から少し離れた木陰のベンチで
もつちもつちと

飛鷹さんが生八ツ橋を頬張っている。

「山城も買った八ッ橋食べな」

「未久のために買ったから食べません」

飛鷹さんの座るベンチの横から横顔を見つめると、飛鷹さんはくると手首を一回転させた後、ビツと八ッ橋の箱を指差した。

「生八ッ橋の賞味期限は約10日。そして山城は明日から1ヶ月外出禁止。つまり、今山城が持っている八ッ橋は妹ちゃんの口に運ばれる前に賞味期限切れになる。勿体ないから食べときな」

そう言いながらまた一つ飛鷹さんが生八ッ橋を口に運ぶ。

「え、1ヶ月外出禁止ですか!？」

「当然だろう?」

さも当然、むしろこれで済むなら安かろう

と飛鷹さんは言葉で言うまでもなく表情で雄弁に語っていた。

「いや、でも、1ヶ月なんて、そんな——」

1ヶ月も未久に会えないなんて。

そう思うと、頭がぐらり、軽い絶望感が——

「山城」

低い——低い声

背筋が凍った。

飛鷹さんの目が私を射抜くように据わっていた。

飛鷹さんは怒っていた。

お説教の時とは違う。さらに一段上の怒気を飛鷹さんは纏っていた。

「ひゅー」

「刀剣類管理局つてのはそこらの学校とは違うんだ。ここは山城と大して歳の変わらない女の子に命を掛けさせている所だ。だが当然、命を掛けさせてるからって失って良い訳が無い。刀剣類管理局には、刀使になった女の子を五体満足で家に返す義務と責任があるんだ。危険な事させて、死なせて、それを『本人が勝手にやった事だから』で通る世界じゃないんだよ」

飛鷹さんの指が私を指し、飛鷹さんの首を指す。

「ましてや山城はまだ刀使として正式な資格を持っていない。そんな山城に無用な危害が及べば、山城が実験に参加する許可を出した相楽学長の首が飛ぶ。もちろん山城の保護者として側に居た俺の首もだ」

「え——でも、それは私が勝手にしたこと——」

「そんな言い訳は無意味だ。相楽学長も俺も、山城を信じて、山城は信じられるって太鼓判を押したんだ。それがどのような形であつても、山城が信頼を裏切つたなら、それは山城を推した相楽学長も俺も信頼を裏切つた事になる。その責任を受け入れるのが、先生であり保護者だ」

——裏切る

私はそんなつもりじゃなかったのに

私はただ未久のために——

でも、私が研究所に来られたのは、飛鷹さんのお陰で

それは元々、相楽学長が私の想いを出来るだけ叶えてくれるよう配慮してくれたお陰で

私は信じてもらっていた——のに……

「——ごめんなさい」

私は、私が思っていた以上に、自分が危なくて酷いことをしてしまったんだって理解した。

でも、私に出来ることは謝ることだけで――

俯く私の頭に飛鷹さんの手が乗った。

私が顔を上げると飛鷹さんが肩をすくめた。

「まあ、正直言つて、相楽学長も俺も山城の覚悟を舐めていた。まさか研究者と直談判して実験の検体に志願するなんて全く想像していなかったからな。山城が悪いというなら、山城を侮つた俺も悪い」

飛鷹さんが両手で紙をくしゃくしゃに丸めるジエスチャーをする。

「それに、今回のことは綾小路武芸学舎内の問題だ。相楽学長も内密に処理するだろう。山城への罰もそれほど重くしないはずだ」

エア紙屑をポイと投げ捨てた飛鷹さんがにやつと悪い顔で笑い、口元に指を当てる。

「ただし、今回のことは絶対に他言無用。もしバレたら山城も刀使で居られなくなるから気をつけろよ」

「はえ!?! あ、はい」

「よろしく」

おっかなびつくり返事をする、飛鷹さんにはっこり笑つて私に自分の生八ツ橋の箱を渡して立ち上がった。

「俺の八ツ橋食べてて良いから、ちよつと待つててくれ」

飛鷹さんはぐーっと腕を上げて背筋を伸ばすと、ベンチにかけてあった竹刀袋から鮮やかな緋色の鞘に納められた刀を取り出した。

「さて、それじゃあ、証拠隠滅だ」

飛鷹さんが すらり と鞘から刀を抜き放ち、鞘を投げ捨てる。

男子用制服には、女子の制服に付いている鞘を保持するためのアタッチメントが付いていないからだ。

飛鷹さんの持つ御刀は赤錆色の刀身に橙色に輝くヒビの入った異形の刀。

たぶんアレも偽神刀なんだと思う。

飛鷹さんが下段の構えをとる。

剣士としては未熟な私でも分かる無駄のない動き、構え。

その姿に見惚れていると私のスマホが突然騒音を立てた。

見てみるとスペクトラムファインダーが荒魂の反応を検知していた。

方向は前方、数は複数。

飛鷹さんの目の前で空気が揺れて、飛鷹さんの偽神刀と同じ赤錆色の物体が空から滲み出る。

現れたの三体の人の形をした荒魂。

頭部に頭のような膨らみが無い以外のつぺりとしたマネキンのような人型、片腕が刃のように先が尖っている。

それが、ゆらりゆらりとゾンビのようにこつちに迫る。

「周辺の荒魂を引き寄せて配下にしたのか？ 知恵がまわる」

飛鷹さんが偽神刀を地面に擦りながら走って距離を詰める。

そもそも10mも無い距離、間合いは一瞬で詰まった。

飛鷹さんが一歩大きく踏み出して、

その勢いを殺さず腰を捻って宙で一回転しながらの強烈な前蹴り。

三体のうち中央の荒魂がカンフー映画のスタントみたいに吹っ飛んだ。

飛鷹さんの回転は止まらず、前蹴りをした左足が地面に着くと、今度は右足が跳ね上がった。

弧を描く

後ろ回し蹴り

右側にいた荒魂が中央の荒魂と同じように吹っ飛んでいく。最後に残った左側の荒魂が一拍遅れて尖った右手を振り上げる。

サン

と何かが裂けるような、はんぺんを包丁で切ったような軽い音がした。

振り抜かれた飛鷹さんの左手。

握られた偽神刀の橙色の輝きが一層強くなっていた。

荒魂の右手は切り飛ばされていて、どこか遠くでガサガサと木の葉が揺れた。

荒魂がそのまま右腕を振り下ろすが当然リーチが足りずに飛鷹さんの顔をかすめもしない。

「二つ」

飛鷹さんが一步踏み込み、片腕でくの字を描いた。

それだけで荒魂はくし切り三等分され、バラバラと地面に転がる。

右手の荒魂が立ち上がる

「二つ」

それと同時に

パン

とビンの蓋を勢いよく開けた時のような小気味良い音が轟いた。

飛鷹さんの逆袈裟斬り

荒魂の上半身が高く舞ってベシヤリと地面に落ちた。

最後に中央の荒魂が起き上がって尖った腕を振り上げ迫る。

「三ッ」

飛鷹の偽神刀から炎が噴き出す。

赤錆色の刀身が綺麗な赤色に覆われる。

飛鷹さんも御刀を振り上げる。

炎が舞ってちりちりと踊る。

縦一文字斬り

最後の荒魂がトウモロコシの皮みたいに綺麗に二つに裂けた。

「——凄い」

三体の荒魂を討伐するのにかかった時間は10秒足らず。

とてつもない速さだ。

当たり前だけど単純な速さなら迅移を使った刀使の方が早い。

でも、そんなただの速さだけじゃなくて、動きの迷いのなさ、鋭さが飛鷹さんの強さ

の秘密なんだ。

私は飛鷹さんの体捌きに感動していたんだけど、飛鷹さんは倒した荒魂を前に怪訝な

顔をしていた。

真つ二つにした荒魂の残骸を足で転がして、何かを探しているようだけど、その何かが見つかからないみたい。

「何を探しているんですか？」

私は八ツ橋の箱を横に置いて、そう飛鷹さんの所に近づきながら聞く。

「偽神刀だ。山城を狙って現れたんだからコイツらのどれかの体内に有ると思ったんだが」

私の言葉に答えて飛鷹さんが振り向く。

その瞬間、飛鷹の目が大きく開かれた。

振りがぶる。

深く一步

上段

突きの構え

「え？」

「動くな!!」

飛鷹さんが吠える。

裂帛の気合いに当てられ、身体が強張る。

何かがヒタリと私の肩に手をかけた。

飛鷹さんが鬼の形相で更に一步踏み込んだ。

「神居!!」

飛鷹さんの偽神刀が再度炎を噴き出し纏う。

「ごうごうと音を立てる神力で作られた炎は熱さを感じさせず、私の頬を撫でた後、私の後ろに放たれた。」

「ごぼおん

と炎の塊が弾ける音が聞こえた。

「いつのまにか飛鷹さんの手が腰に回されていて、グツと抱き寄せられる。」

「わ」

飛鷹さんに抱かれてぐんぐん引き寄せられて後ろに下がる。

見上げると飛鷹さんの顔、私の後ろに居た何かを睨みつけている。

強い意志を感じる瞳。

「ちらりと目が合った。」

「山城、大丈夫か」

「あ、う、はい。お陰様で」

「そいつは良かった。手を離す。後ろに下がってくれ」
「りよ、了解です」

飛鷹さんの手が離れ、一步飛鷹さんが進み出る。

「知恵が回ると思つていたが、ここまで賢いとはな」

飛鷹さんが睨むその先に居たのは、人より二回りぐらい大きな人型の荒魂。ヒョロリと長い手足に犬のような頭部。手足の先は大きく鋭い。

「その頭はアレか。山城の犬になりたいって意思表示か？」

グルグルと荒魂が唸り声をあげる。

飛鷹さんを牽制するように威嚇して一步下がると、荒魂は胸に腕を突っ込み、二本の錆びた刀を自分の身体から引き抜いた。

「赤羽刀……。そんなものまで拾つていたのか」

大きな腕に不釣り合いな二本の刀を両手に持つて荒魂が無骨ながら構えのような形で動きを止める。

それに合わせ飛鷹さんが御刀を低く振りかぶる。

中段、脇構え

「生憎だが二刀流にはちよつと煩いぞ。俺は」

隣花の赤は鮮やかで

刈り取られた芝の発するむせるような緑の香り

喉を突く生焼けた草の白煙

青々とした芝生の上で朱色の剣闘は続く。

オオオオオオン

手足の長い犬面の人型荒魂が赤羽刀を豪快に振り下ろす

赤羽刀は錆びた刀ゆえ切れ味は無いに等しい。

だが珠鋼の『絶対に折れず曲がらない特性』は残されており荒魂の腕力と合わさって、その威力は力技で車を両断するほど。

ギシイ

その一撃を燃える刀が受け止めた。

刀を支える恭侍の黒く染めていた髪が白く塗り替えられ、瞳が赤く輝く。

恭侍の所持する偽神刀一号『日向』ひゅうが

その刀が放つ負の神気を恭侍は体内のノ口を通じて制御し、身体能力を向上させてい

た。

刀同士が擦り合い、火を噴く偽神刀が荒魂の赤羽刀を斜めに受け流す。

荒魂は二刀、すぐさま次の一刀が迫る。しかし恭侍はそれを紙一重で躲しカウンターを決めてみせた。

胴一閃

完璧に決まっていたが、荒魂の胴体には偽神刀が収まっているため両断には至らない。

恭侍はそのままテコの原理で横っ飛び、荒魂の横につくが、荒魂も二刀の手数の利を活かして逃げきる事を許さない。

極至近距離

互いに怯まず剣を交わす

荒魂の身のこなしは軽く、その剣は、獣の剣にしてはずいぶんと立派な理合が握られていた。

噛み付くように執拗に伸びる剣閃

「お前、ずいぶんと剣術が上手いな」

だが弾く

恭侍はそう感心するが、荒魂の剣を掠らせはしない。

どこか見覚え、馴染みのある剣。

なんとなく先が読めるからか尚更に、恭侍の顔は涼しげだ。

ゴウゴウ

と荒魂の持つ赤羽刀が風を切る。

ごうごう

と恭侍の持つ偽神刀が炎を吐く。

二刀、速く、重く

一刀、素早く、鋭く

剣が交錯し、荒魂が踏み込み、その分だけ恭侍が引く。

一合

剣が噛み合った瞬間、恭侍の剣がするりと抜けて跳ね上がり、荒魂の顔に傷がつく。

あまりに読みが噛み合いすぎるせいで恭侍は気付いた。

「俺の剣を覚えたのか」

偽神刀の運用実験は主に恭侍がやっていた。

その時使っていた剣の理合を荒魂は真似ていたのだ。

刀がすれ違う。

恭侍の剣が荒魂の前を過ぎ去り、荒魂の振り下ろされた剣が芝生を刻む。

炎の余韻が荒魂をちろりと舐め上げる

荒魂の胸元でパクリと傷口が開いた。

荒魂は吠え、刀を振り上げ恭侍を追い払い、場を仕切り直す。

犬面の人型荒魂の身体には既にいくつもの刀傷が刻まれていた。

偽神刀が剣術を多少見取っていたとしても、本物には、恭侍には及ばないと言う事実

がそこには有った。

散ったノロが朝露のように芝生を煌めかせていた。

通常の荒魂ならば、もうとつくの昔にノロに還ってしまうほどのダメージ。

しかし偽神刀という核を持つが故に頑丈さが向上した荒魂はすぐさま恭侍に襲いかかる。

再び背を見せるほどに振りかぶる腕

見えるのは一際深く刻まれ今もノロを滲ませる背中の刀傷。

それは一見消極的に見える恭侍を置いて、山城獲物を拐おうと隙を晒した結果であり、恭侍に襲いかかるのは荒魂がまず恭侍を倒さなければ山城主を手にすることはできないと学んだからだだった。

恭侍が引き空けた間合い、荒魂はなおも強く踏み込み振り抜く。

順を追つての左右二段の薙切り

恭侍はトンと飛んで射程から逃れ、振るわれた二刀の一撃は成木をバツリと両断し切り倒した。

「膂力だけなら花丸もんだが」

怖くは——ない

二閃

次いで一合

避けて

斬りつけて

次いで——

次いで——

大振りに、それでいて素早く連続して振り抜かれる二刀だが恭侍はそのことごとくを躲し捌く。

いつぞやの折神紫との試合死合とは真逆に。

荒魂の振るう刀は、なおも恐ろしい風切り音を発する、しかし風は切れても、恭侍の顔色を変えることすら叶わない。

——コイツ、荒魂のくせに剣が人臭いな
そんな思考を巡らせる余裕まである。

恭侍の優勢は異様なほどに揺るがない。

それでも恭侍が踏み込まないのは、人型とはいえ相手が荒魂であるがゆえ。

その気になれば、荒魂は関節など無視して、腕を、腰を、脚を、360度回転させて奇襲できるからだ。

人の形をしているからと高を括る気はなかった。

——けどこの荒魂は

恭侍が刀を大きく薙いで隙を見せる。

大きな予備動作

勿論、ただの隙ではない。

荒魂が人体構造を無視すれば隙になる

——かもしれない誘いの一手。

しかも阻止できなければ恭侍の痛烈な一撃が飛んでくる二段構え。

——どう出るか

恭侍は期待とも取れる目で、荒魂の崩れた体勢がどうなるか見定める。

右手、左手、両足、胴、頭部

しかし、荒魂の動きはどこも人体の限界を超えないまま

——なるほど

次の一手も恭侍が先んじた。

大振りの返し、更に強い一閃が荒魂の片腕を切り飛ばす。

荒魂が恭侍の誘いを見切ったのか

否

ただ避けきれなかっただけ

——お前は人の姿に拘っているんだな

苦し紛れではなく意思を持って、荒魂が残った赤羽刀を振るう。

縦斬り

身を半身にして躲す

メの字を描くようにキユンと刃先が跳ね上がり、流れるように横薙ぎに繋がる
恭侍は迫る刀を高くカチ上げる。

同時に荒魂の体勢も上に崩れて浮き足立った。

そしてその時

ドン

と

恭侍が初めて踏み込んだ。

刀の炎が腕を呑み、肌を燃やしてしまいそうなほどに一層燃え上がる。

荒魂の脇を抜け、背中を取る。

身を翻し、刀は天高く

両腕でしつかりと掴む

大上段の構え

その姿は介錯人のよう

『神居』

『破山』

恭侍の刀が地をえぐる

最後に溶け落ちたアイスのような橙色の小山が残った。

その中心には地に突き立った偽神刀

恭侍はランランと赤く輝く瞳をぐりぐりとまぶたの上からこねて光を治めると、緋色から徐々に輝きを失い赤錆色に戻る偽神刀を手に取り、空にかかげる。

恭侍の刀の形をした荒魂のような偽神刀とは違う、少しだけ赤みがかった刀身が日差しを遮った。

「山城、鞘を持ってきてくれ」

——これにて一件落着か

転がった八ツ橋がほんのりと甘い香りを運んだ。



さてさて、今回の事件の顛末を語るとしよう。

まず、偽神刀の暴走について

これは紫様がただの実験の失敗として、責任問題については不問としてくれた。つまりお咎め無し。

まあ、紫様は元々こうなる事が分かっていたんだと思う。

正体が正体だけに荒魂関係のことであの人に分からない事は無いだろう。その上でこうして事件を起こさせる理由は単純。

あの人は見た目に似合わずイベントが好きなのだ。

まったく、それならテレビでも見てれば良いのに（見れる時間が有るかは知らないけど）

ま、とにかくだ。

紫様は面白いモノが見られたとご満悦

アルカイツクスマイルで研究員たちを虜にしたのち、悠々と東京へ帰っていったご機嫌麗しゆうて良うござんしたねえ、まったく

残念ながら、今回暴走した偽神刀2号は折神家直轄の寺社に奉納されることになって

しまった。

彼がそれで満足するかと言えはしないだろうが、現状管理者が居ないため眠ってもらう他無い。

はたして彼が主を得る時は来るのだろうか

それは紫様にも分からないが、

とりあえずあの刀は、次に人に使ってもらう時までには侵食癖を直しておくべきだろう。

高田博士は今回の一件によつて、現在の京都特異災害研究所から異動することになった。

左遷と噂されているけど、実際は転属どころかワンチャン栄転の類いだつたりする。

荒魂技術の研究者として優秀な彼は、これから鎌府女学院の極秘の荒魂研究に関わることになるのだ。

高津^{ヒス}学^{おほ}長の部下は何かと面倒ごともあるだろうが、刺激的なのは間違い無いし、高田博士には悪く無い職場になるはずだ。

で、蚊帳の外で派手にやらかされた本間博士は今回の件を受けて意気消沈……

すると思いきや、いずれこうなる日が来ると思っていたらしく、きつぱり開き直って今日も鉄札の研究に励んでいる。

鉄札の研究費用も紫様の温情で微増という結果に終わり、一安心といった所。

山城は反省文とトイレ掃除1週間。

随分と古風な罰だが、思っていたよりさらに軽くて、ちよつと驚いたのは内緒の話。相楽学長の甘さが光る。

そして俺は紫様からお褒めの言葉と金一封を貰った。

以上

……うんまあ、それだけ

俺に関してはほぼ通常業務だったし、ちよつとボーナス貰えただけ儲けものだ。そもそも金貰っても使い所が無いしな。

早朝

食堂

「飛鷹さん、結局あたしってなんで荒魂に襲われたんですかね？」

そう疑問を俺に投げつけながら、今日の日替わり定食のチキン南蛮をパクつく山城。甘酸っぱい匂いが食欲をそそるが、今日の俺はもつとガツツリとした気分。

目の前にあるのはソースカツ丼に、マヨにラー油に追いソースのカツ丼お好み焼き味。

当然、店ではこんなことでできないし、出張が多い関係上、コンビニ飯かパン食がデフォルトな俺にとって、学食のセルフ調味料はジャンクな和食を食べるためのオアシスなのだ。

まあ、味は良いもの見てくださいは悪いので、人が多い時間帯はやらない。TPOは弁えているつもりだ。

「飛鷹さん？」

「——ああ、少し考え事をしていた」

「ああ、今回の件はアタシが知らない所でいろいろと組み合わせた事情があったでしょうし、仕方ないですね」

飯である

「ま——そんな所だ。で、山城が荒魂に襲われた理由だったか」

「はいー」

「ふむ、そうだな——その前に一つ聞きたいんだけど、山城、お前偽神刀の実験を始める前に何を考えてた？」

「え？ えつと——あー……その、偽神刀っていうよく分からない剣に触るのは怖かったんですけど、でも『未久のために頑張らないと！』て。ちよつと勇気を出して……て、えへへ。……何恥ずかしいこと言わせるんですか!？」

「どうどう、全然恥ずかしくないぞ。山城の志は実に立派だ。立派すぎて俺と相楽学長の首が飛びかけるぐらい立派だ」

「あう、すいません」

「ま、その話は置いて。山城が荒魂に襲われた理由は簡単『偽神刀が山城を気に入った』それだけのことだ」

ザクザクとトンカツを頬張り、米をかきこむ。

サクサク衣にキャベツのシャキシャキ、そしてとつぷり絡むソースマヨ。実にべつたりとした味のソースカツ丼。

たまに食べたくなるこの味。

ふんわり卵とじのカツ丼も、じくじくにソースに漬けた味噌カツ丼も悪くないが、このザクザクとした食感とソースのパンチによるジャンクフードにも似た美味しいけど

身体に悪い感じが最高だ。

「それってどういうことですか？」

「御刀は持ち主を選ぶ、荒魂には意思がある。なら偽神刀にも持ち主を選ぶ意思ぐらい有るに決まってる」

お味噌汁

小さいがシジミ入り。

このシジミが入っている時の味噌汁の風味が好きなんだ。

豆腐ワカメは味気ない。なめこは好きだけど。

「な、なるほど。でもどうしてアタシなんて」

「どうしてって」

「御刀はロリコンだから偽神刀もロリコンなんじゃねえか？」

——とは言えないな

「山城が妹ちゃんのために自分を使ったのが偽神刀の琴線に触れたんだろうな」

きゆうりののしば漬け

キュツと酸っぱい感じとぽりぽりとした食感が重たいカツ丼の味を洗い流してくれ
る。

「え」

「山城ちゃん健気で可愛い！ むさ苦しい男に使われるより山城ちゃんに使って欲しいー」って偽神刀が思ったんだよ」

「御刀がそんなこと考えるんですか？」

「さあ？ ただ人を判別できる以上、知性はあるだろう」

——隣の芝は青く見えて、庭の花は赤く見えるモノ。

荒魂——ノロの根源的に抱く感情は喪失感。

いわゆる『寂しさ』だ。

「物に心があるのなら、寂しい時だつてあるだろうさ。そんな時には暑苦しい男より可愛い女の子に慰めてもらいたいと思うのはある意味当然とも言える」

荒魂としての喪失感を抱えたままの偽神刀は、妹想いの山城なら、自分も受け止めてもらえるかもしれないと考えたのかもしれない。

ま、その姿ははたから見たら、知り合いの小学生にシヤアしようとするただのストーリーでしかない訳で。

この結果は必然と言えるだろう。

「——」

「……ん？ どうした」

「いやー、飛鷹さんってお世辞が上手だなあつて」

「世辞じゃない。山城は十分可愛い。背筋が良いし、清潔感があって——」

「いいですいいです！ 言わなくて！」

「い———そうか」

「もー、そういうのはもつと可愛い子に言うべきですよ！ たとえば——ほら、燕さんとか」

「結芽は褒めてあげないと拗ねるからな」

「デフォルトなんですか!?!」

「まあ、女の子を褒めるのも男の仕事みたいな所あるだろ」

「———はー、いつか刺されても知りませんよ」

「刺されるぐらいで許してくれるなら、俺は刺されても良い」

「あー！うわー！ 私もこんな事言ってみたい！ 女の子にキザな言葉言つてドキドキさせたーい!!」

お昼寝 〈安桜美炎〉

夏が終わりにかけて、森は静かに、空が晴れても暑く感じなくなった頃。

夏とも言えず秋とも言えないこの時期は過ごしやすくて私は好きなんだけど、物珍しさがなくなってしまうからか神社に人が来なくなる。

そんな時期に恭侍さんはやってくる。

◇◇◇

真つ赤な鳥居を抜けた先、荘厳な神社が顔を見せる。

その参道の横道を箒を持った老翁が歩く。

草鞋が敷き詰められた小石を踏みしめ、音が鳴る。

「美炎―」

娘にも婿にも先立たれた老翁が、遺された孫娘の名を呼ぶ

「美炎―」

お爺ちゃんの声

私に神社の掃き掃除を任せてからもう何時間か経っているから、きつと探しに来たん

だろう。

「美炎よー」

「はーい」

ガラリとおみくじ屋さんの戸が開く。

「お主ごんな時間まで、なにをして——」

私の膝の上を見つめるお爺ちゃん。

そこにあるのは男の人の頭。恭侍さんの寝顔。

恭侍さんは寝返り一つ打たずに、呼吸は規則正しく刻まれ、イビキも全くかかない。

お爺ちゃんは時々うるさかったりする。

「こ奴は」

私が恭侍さんの頭を撫でる。

「うん、恭侍さん。お墓参りだつて」

「なんと、もう一年か」

時の早さに驚くお爺ちゃん。

私にとっては、結構長かつたんだけど。

去年は艶やかな黒だったのに、今年ウチの神社に来たお兄さんの髪は白と染めた黒色になっていた。相当な苦勞をした1年だったんだろう。

「シート 恭待さん疲れてるみたいだから」

恭待さんは今日のために昨日から休暇を取りたかったけど、最低限の日数しか取れなかったらしい。普通、中学生が休みを取るために苦心するなんてことあり得ないと思う。

「う、すまない。ではなく、何故店の中に上げている？」

「だって眠そうだったし」

昨日もお仕事だったみたいで、ここに来た恭待さんは眠そうだった。

それこそ、私がおみくじ屋さんの中を貸してあげるって言ったら、いつもは断るのにほいほいついて来ちゃうぐらいいに。

「だってってお主……。——まあ良い、近藤の奴にも大目に見てやってくれと頼まれておるからな。暗くなる前に帰らせるなら煩くは言わん」

「うん、ありがとうお爺ちゃん」

「——うむ、居間に羊羹がある。そ奴を返してから食べなさい」

お爺ちゃんは、そう言えばきつと私がお昼には帰ってくると思つて言つたんだろうけど、私は当分恭待さんの側を離れないと思う。



天然……て言うのかな。

私は昔から少し変わっていた。

私にそんな自覚は無かったし、私にとっては疑問にならないぐらい当然の事だったんだけど、他の人にとっては違ったらしい。

そのせいで、ちい姉にはいっぱい迷惑をかけてしまった。

『幽霊っているのかな？』

『そんなのいる訳ないじゃん』

「いるよ、学校にも住んでるよ」

『え？』

普通の人は幽霊を信じないらしい。

幽霊や人魂は普通は見えないらしい。

私からすれば、幽霊や人魂と呼ばれる人の心残りは世の中のいたるところに残っていて、昼と夜に区別が必要なのか分からないほどで、幽霊は当たり前前に居る人たちだった。

『荒魂って怖いよね』

『そうだね、人を食べちゃうんでしょ』

「怖くないよ。今日も一緒に遊んでもん」

『』

荒魂は普通、人を襲うモノらしい。

うん、私も最近になって分かってきたことだけど、大きな荒魂は人を襲う。刀使でなければ止まらないとっても危険な生き物だ。

でも、小さい荒魂は子犬や猫みたいで可愛い。

人を襲うなんて信じられないぐらい、ちよつとだけ近づいて少しだけ私の手と遊んで、それでどこかに行ってしまう。

全然危険じゃないんだ。

――

『ねえねえ、安桜さんってさ――』

『あー、あの不思議ちゃん？』

『そーそー、あの子、真顔でオカルト話するんだよ？ オカシイったらありやしない』

『実家が神社らしいし、実はホントなんじゃねw』

『なわけ』

『だよねーw』

……誰も信じてくれなかつたけど。

「小さな荒魂つて可愛いな！」

偶然だつた。

神社の裏の森で荒魂と遊んでいる所を、恭侍さんに偶然見られたのがきっかけだつた。

恭侍さんは、ちい姉ですら半信半疑だつた私の話す何もかもを信じてくれた。

恭侍さんは小さな荒魂を見たことがあるらしい。

今までそう言つて私に言い寄つてきた男の子は居たけど、恭侍さんみたいに本当だと信じられる人はいなかつた。

「小さい荒魂には人を襲う力はないが、そもそも人を襲う意思も無いみたいだな」

手から腕に登つてきたリス型荒魂と戯れながら恭侍さんが笑う。

その事もあつて私は恭侍さんを信頼するようになった。

私の言う事ならなんでも信じてくれて、私も恭侍さんを信じて、時々騙して騙されて、ちい姉にできない相談をいっぱいした。

勉強の話とか、学校の話とか、

恋の話とか

まあ、相談については半分以上役に立たなかったけど、でも、小さな私にとって恭侍お兄さんはヒーローだった。

◇◇◇

恭侍さんがヒーローでなくなったのは4年前の話。

——え、4年前？

そっか、まだ4年しか経ってないんだ。

恭侍さんのお母さんが死んだ日から

その頃の恭侍さんは荒れていた。

あ、別に不良になっていたとかじゃなくて、いや、目に見えてイライラしていて街の不良が誰も近寄らない程度には凄いオーラを纏っていた。

原因は恭侍さんのお父さん。

お母さんが病気で亡くなって、半年で再婚したらしい。

しかも、再婚相手の人はお父さんのビジネスパートナーで、恭侍さんと3歳しか歳の

違わない女の子を連れていたんだって。

——たぶん、そういう事なんだと思う

その頃から恭侍さんは実家に帰らなくなって、習い事だった剣術にのめり込むようになっていった。

始めは実家に帰らない理由作りのはずだったんだけど、恭侍さんがあまりにも才能に溢れていたせいで、いつのまにか住み込みで鍛錬するようになっていた。

その頃の恭侍さんは清く正しく荒れていて、私の思っていた頼りになるお兄さんとしての姿はそこには無かった。

ただ、何を信じれば、何をすればいいのか分からなくなってしまった迷子がそこにはいた。

——だからって恭侍さんが嫌いになるとか、別にそんな事は無くて

幻想の混じったカッコいい恭侍お兄さんも好きだったけど、今のがむしろ好きな恭侍さんはもともと好きだ。

残念なのは、昔と違って恭侍さんはもう滅多に安桜神社に来なくなってしまうたつてこと。

安桜神社は中部地方、恭侍さんは京都と東京を行ったり来たりが主で、ウチに来るのはお母さんの命日だけ。

もつと会いたいと思う気持ちを私はどうすればいいんだろう？

◇◇◇

膝枕をしていた恭侍さんの頭が揺れる。

「ん……あ、う？」

「恭侍さん、起きた？」

「——ああ、今何時か分かるか」

「えーつと、午後4時だね」

「なんと、——これは夜行行きだな」

恭侍さんが気怠げに手でまぶたを覆う。

「早く起こした方が良かったかな？ ぶめんなさい」

「いや気にしないでくれ。どうせ帰るだけなんだ。どのタイミングで寝るかの違いしかない」

床に肘をついて起き上がろうとする恭侍さんの肩を抑える。

「どうせ夜寝ながら行くなら、もうちよつと寝ててもいいと思うんだけど」

「うーん、けど、美炎も膝枕は辛いだろう？ というかそもそも俺は美炎に膝枕を頼んだ

覚えが——」「まあまあ、気にしない気にしない。ほら、あと1時間ぐらい寝ようよ」

「しかし」

ぐいぐいと恭侍さんの肩を押す。

私の上で恭侍さんが下、押しこくつっていると、恭侍さんの頭がずんと私の太ももに乗った。

「——むう。分かった、もう少し休んで行く。だから肩に力をかけないでくれ、これ以上は肩がはずれる」

恭侍さんが観念して私の膝に身体を預けて目を瞑る。

「うん」

私は自分の手の甲にキスをして、その手で観念した恭侍さんの顔を覆った。

その剣は如何程か 〈此花寿々花〉

駆け足の太陽、こんがり焼けたイワシ雲。

見渡す山々は青々とした緑からカラツとした赤に変わっていた。

木々は冬を前に最後の晴れ着を着ていて、紙吹雪のように木の葉がハラハラと宙を舞っている。

秋

テレビでは紅葉狩りはいつとか、どこそこの文化祭の準備がどうで今年は気合いがウンタラカンタラと言われている頃。

多くの学校が文化祭に向けて湧き立つ季節

しかし、そんな中にこと有名ながらこの季節にイベントごとが予定されていないというか、年に一回の合同大会ぐらいしか大きなイベントが無い学校が存在した。

刀剣類管理局に所属する伍箇伝の五校の事だ。

実は伍箇伝の学校には、普通の学校には存在しうる文化祭や運動会と言った多くの行事が存在しない。

理由は様々だが、端的に言えば、「用意する時間が無い」から。

刀使として日夜人々を荒魂災害から守る側かたわら、学生として学業に臨む彼女たちにとって、刀使の仕事は熱心な部活動のように厳しい。

ましてや、その鍛錬が命に関わるとなれば、なおさら催し物にうつつを抜かせないのも致し方ない事。

その分、伍箇伝の生徒はそれぞれ近くの町から、幼稚園のお祭りチケットのような感じでお祭りの優待券を束で貰えるのだが、そうは言っても生徒主体の行事の少なさに味気なさを覚える刀使も一定数居る。

特に、技術班と呼ばれる「荒魂の討伐」という実務ではなく、勉強や研究に勤しむ刀使。

いわゆる普段日の目を見る機会が少ない文化系の生徒にとって、そういった学校行事というモノは貴重なアピールチャンスな訳で。

それが無い各伍箇伝の文化系生徒——研究班は、代々時期を見て文化祭の代わりに展示会を開いていた。



綾小路武芸学舎

伍箇伝最古の伝統ある学校

増改築によって古めかしさと新しさの交わる校舎

その中に少女たちの喧騒がどこからか微かに響いていた。

「なにやら騒がしいですわね？」

そう言いながら髪をくるくると指で遊ぶのを辞めたのは、優雅な立ち居振る舞いが目立つ赤い髪の刀使『此花寿々花』

彼女は前述した合同大会「御前試合」以来久しく聞いていない歓声に興味を惹かれてその音源へ足を向けた。

歓声の源は寿々花が居た場所に思っていたより近かった。

彼女が歩いていった旧校舎の通路からほど近い新校舎にふた回り大きなモノが建てられたため半ばレクリエーションルームと化した旧剣道場。

その中から、バタバタと体育の授業中のように大きな音が響いている。寿々花が扉のまえに立つ。

体育館の鉄板で出来た扉には『技術班成果物展示会』というポスターが貼られていた。技術班が旧剣道場を借りて展示会をしていたのだ。

けれど展示会とは静かに見るもの。では何故こんな騒音が？

その問いの答えはポスターの下半分に書かれていた。

『模擬戦実施中！ 勝てばスイーツバイキング無料！』

題名よりも大きな謳い文句

アピールポイントなのは誰が見ても明らか。

「なるほど、技術班の方々も考えましたわね」

技術班の展示会は総じて人気が無い。

普通の刀使では展示品を見てもよく分からないし、そもそも興味が無いので行かない。興味がある子の場合、その多くが既に技術班に入るなり協力なりしていてわざわざ展示会にお客さんとして行くとは無い。

伍箇伝の学校には関係者以外入れないため、外部からお客さんも呼べない。

つまり人が誰も来ないのである。

そこで今回技術班の彼女たちが用意したのが「景品付き模擬戦」だった。

たとえ展示会に興味がなくても女の子がみんな大好きスイーツの力によって、腕に多少なりとも自信がある刀使は「勝てば無料」の文言に釣られてやってくる。

そしてそんな友達を見に更に人が寄ってくるという算段だ。

技術班の女の子たちが客寄せのために用意した秘策だった。

「とは言え、技術班の刀使では普通科の刀使相手は分が悪いでしょうに」

技術班の刀使と一般の刀使には実力に確たる実力差がある。

もちろん技術班の刀使とて、実験のために荒魂と対峙する。しかし基本的に戦闘は腕の立つ普通科の刀使に任せて、自分たちは実験のデータ収集に回ることが多い。

そもそも彼女たちは科学者志望であり、実戦にもあまり出ない。そのため腕前では普通科の刀使に一歩も二歩も劣るのだ。

そんな彼女たちがスイーツバイキングを賭けて、本気の刀使と闘えば連戦連敗とはいかずとも相当数負けてしまうはず。

学校も流石に部費におやつ代は含めないだろうから、それらの支出は技術班の刀使の実費のはず。

となれば負けが込んだ場合、数万円、ともすれば二桁万にも迫る出費になるのかもしれない。

好物をコンビニ弁当の漬物と言ってはばからないが、その反面、毎日高級車を服のように入れ替えて登校する自称庶民派お嬢様は、技術班の少女たちの人集めのために身銭を切るような行為に、心配と興味が半々といった感情を抱いて体育館の金属製の扉を開いた。

瞬間、わあつと想像以上の歓声が寿々花の頬を叩く。

ざつと1クラス分、30人以上の刀使が輪を作っていた。

恐らくはその中央で行われている模擬戦の最中である刀使に声を投げかけているのだろう。

しかしその言葉はこれまた寿々花の予想を裏切り、応援の言葉が多数だった。

「リベンジだー！」

「頑張れえ！」

「勝てる勝てる！」

少女たちの隙間からちらりと試合を覗くと、少女たちの輪の中に居るのは、寿々花も見覚えのあるなかなか腕の立つ刀使の姿。

しかし、その彼女の表情に余裕は無い。むしろ険しい。

——彼女が苦戦するとなると相手の方はなかなかの腕前ですわね

辛うじて片方の顔は見れたものの、肝心の対戦相手が人垣に紛れて見えなかったため、寿々花は試合を見るために人垣に身体を滑り込ませる。

近くの女子たちは新しい観客が寿々花、此花寿々花様だと気付くとすぐにその場から退いた。

代々折神家に仕える由緒正しい正真正銘の名家の出のお嬢様であり、文武両道かつ綾小路最強と名高い此花寿々花の威光が為せる技だ。

あつと言う間に、彼女の目の前はモーゼの十戒の如く人波が割れ、寿々花は模擬戦を目にする事ができるようになった。

「感謝致します」

そう退いた女の子たちに寿々花が声を掛けると、小さくわあと黄色い声が上がった。

そうしている間に模擬戦は佳境に入っていた。

セミロングの（地毛なのだろう）艶やかな栗色の髪を揺らす少女が、オーソドックスな晴眼の構えを崩し、踏み込みながら袈裟斬りを放つ。

対する相手はその袈裟斬りを肩をすれ違わせるように踏み込んで躲す。

相手は1980年代のメタルヒーローを彷彿させる銀色の丸みを帯びたアーマーに身を包んでいた。

あけすけに言ってしまうえば古臭くてイマドキの女学生にはダサく見えるデザインだ。だが、その身のこなしから中身の人物が相当な腕前の持ち主で有ることが分かった。栗色の刀使の振り切った竹刀が飛び上がり逆袈裟斬りに派生。

しかし相手は冷静にその逆袈裟斬りの下にチャンバラ刀のような緑の蛍光色の刀身を持つ模造刀を滑り込ませ、大きく打ち上げた。

少女の身体が後ろに反る。だが体勢は崩れ、ない。

押し飛ばされる衝撃はそのままに。お腹に力を込めて胴が伸びきらないように、いち早く片足を下げて後ろに倒れ込まないように、浮き上がった竹刀を落とさないように手の形を変えて掴み直す。

少女は踏みとどまり突きを繰り返した。

銀のヘルメットがキラリと光る。突き出された竹刀の切っ先を模造刀が掠めるよう

に横に弾き、更に翻った模造刀が再び竹刀を高く打ち上げた。続く袈裟斬りの連携。

少女の竹刀は辛うじて少女と模造刀の間に滑り込んだ。だが胴の入った一太刀を受け切ることは叶わず、押し込まれた竹刀がバシンと少女の肩を打つ。

ピピーツ！

とホイッスルの音

「そこ」まで！ 勝者、飛鷹恭侍！

瞬間、一際大きく少女たちの波がざわめいた。

声の内訳は、残念がる声が5割、歓声3割、その他2割と言った所。

双方が礼を終える。

名を呼ばれた対戦相手——恭侍は、メタリックな丸くてスリットの入ったヘルメットを脱いで、眼鏡をかけた刀使——技術班の女の子の1人から受け取った飲み物を口にした。

女泣かせな父親の血を継いだ端正な顔立ちと汗で湿った髪。

彼の着ている銀色に光る陳腐なアーマー、1980年代の特撮ヒーローのような見た目を圧してなお恭侍の色香とも形容できる少年的な瑞々しさは一部の少女たちにほうと息を吐かせた。

対する恭侍との模擬戦に負けた少女は、敗北したにも関わらず、どこか晴れやかな顔をしている。

実は展示会は今日で3日目。彼女は初日から何度も恭侍に挑んでいたが結局、勝つことは叶わなかった。

その顔は持てる力を尽くしてなお勝てなかった事による逆説的な清々しさから来ていた。

少女と寿々花の目があった。

今の試合を見られていたのかと少女は少し恥ずかしげ。

「此花さん」

「何故彼が技術班の展示会にいるんですの？」

恭侍と寿々花は顔見知りだ。

刀使の中でも指折りの実力を持つ寿々花は次期指揮官候補として鎌府女学院ひいては折神家に研修に行くことが多く、綾小路の刀使が折神家を訪ねる場合、高確率で彼が案内人になるからだ。

「技術班の子が彼に応援を頼んだんです」

「ずるいですよね。と言って少女がくすくすと笑う。

「へえ。なかなかの腕前のようにすわね」

「知らないんですか？ 彼、何年前は京都天然理心流のタイニーデビルって呼ばれてたんですよ」

「あら？ わたくしの知っている限りでは、その名を冠したのは女の子のほうですよ」

「2人居たんですよ。タイニーデビルツインズは語呂が悪いし、女の子の方が目立っていたから知らなくても無理ないですけど」

「そうでしたの」

「ところで、此花さんは彼とやるんですか？」

少女の一言に寿々花の周囲がざわめく。

集まっている皆が、この展示会中、日を跨いで計数十戦無敗の恭侍と公式記録において綾小路最強の寿々花の対戦カードは是非とも見たいと思っていたからだ。

「こう言った催しに集まる以上、この場にいる刀使の中に強さ比べが嫌いな者はいない。」

期待の眼差しを一身に受けた寿々花が浅く頷いた。

「そうですわね。元々は冷やかしに來ただけなのですが、彼は相当に腕が立つようですよ、獅童さんに勝つため出来るだけ多くの経験を積みたいですから」

御前試合の決勝戦で獅童真希に敗北を喫した寿々花は、その敗北をきっかけにして打倒獅童真希を掲げ闘志を燃やしていた。

寿々花の言葉。仮にも綾小路の中でも腕自慢の刀使相手に連戦連勝を重ねる相手を練習台扱いする頼もしさに、栗色の髪の少女が笑う。

「油断していると負けちゃうかもしれないよ」

「それは要らぬ心配と言うものですわ。貴女が負けるのを見た以上、手を抜いて勝てる相手ではないことは重々承知しております」

なんだか褒められて栗色の少女が頬を赤らめる

「じゃ、じゃあ、勝っちゃってくださいね」

「ええ、言われずとも試合う以上、勝ちを譲るつもりは毛頭ありませんわ」

人垣を抜け、寿々花は自分の髪をかきあげフアサつと広げると、恭侍の前に立った。

「貴方がこれほど腕が立つとは存じていませんでしたわ。どうかしら、一試合受けてもらえますか?」

「もちろん受けます。でも、その前に係りの人に参加費200円を払ってください」

憎まれ口も喜色も無い。事務的で想定外の言葉に寿々花は面食らってしまった。

恭侍が手の平を向けた所には集金箱を抱えた女の子の姿。

キョトンとした寿々花の視線にあてられ、アタフタしていた。

「有料でしたの?」

「バイキングのチケット代もタダじゃありませんから」

1人2000円なら、スイーツバイキング1回分をチャラにするためには少なくとも18勝は必要。

そもそも何回かは負ける前提だったので、多少お金を取っても収支はマイナスになると予想されていた。

「それにしても随分と稼いでいるように見えますけど」

「否定はしません」

謙遜するでもなくそう堂々と言う恭侍。

その不敵な姿が寿々花は気に入った。

「フフツ、承知いたしましたわ。それでは……これでよろしいかしら？」

川の主を前にした千尋のようにガチガチの女の子が、寿々花の取り出した2000円を受け取る。

刀使は荒魂の発生場所によってどこにでも行く。当然、クレジットカードが使えない田舎にも行くため、遅刻しそうになれば戦闘機を持ち出すほどの大金持ちの寿々花でも、多少の小銭は持っているものなのだ。

「ア、アリガトウゴザイマス」

少女は緊張でカチコチだ。

踵を返した寿々花に、古臭いデザインヘルメット被った恭侍が出迎える。

「その被り物、見にくくありませんこと?」

「まあ確かに多少は見にくいですが、ここは展示会ですからね。一応出し物として格好だけでもそれらしくしておかないと」

「そう言うものですね」

他の技術班の子より一回り大人びた雰囲気を漂わせた先輩格の刀使が寿々花に竹刀を差し出す。

「これを使って下さい」

「わたくしは彼の持つている模造刀を使いたいのですが」

「アレ、重いですよ」

「構いませんわ。同条件でなければフェアではありませんもの」

「なら、あのアーマーも着ますか?」

先輩刀使はそう意地悪く言うが

「何か有用性が有るのなら着るのもやぶさかではありませんが、あの装備は飾りでしょう?」

先輩刀使は驚いた。

技術班の刀使は工学系大学に迫るクオリティの研究を独自に行なっているが、そこはやはり教授職の先生の大きな研究の一部をやらせてもらっている状態で、実用的なモノ

は少ない。

あとは個人が趣味で作ったゲテモノが多少有るくらいだ。

今回、展示会のために恭侍には色々脚が速くなる靴やら倒れなくなるバランスサーヤら試してみたが、結局は邪魔にしかならないという結果に行き着いてしまった。

結果として、今の恭侍が着ている装備は、色覚補正と暗視機能（未使用）の付いたヘルメットと、機能を完全にオミットしたハリポテ同然のガワだけアーマーで、ロボジーのように見た目をそれっぽく取り繕っているだけだった。

その事をこの短時間で見抜いたのかと驚いた。

「……………」明察の通りです」

そう言いながら、彼女は青い蛍光色の刀身を持った模造刀を寿々花に手渡した。

パステルカラーのポップな見た目ながら長さは竹刀と同等、刀身は厚手のビニールに水を入れたようなぷよぷよとした感触、だがそれに反してズッシリとくる重さ

「重いですわね」

「平均的な御刀と同等の重量と重心バランスによる実践的な使用感と、負傷を最小限にとどめるための工夫を幾重にも施した自慢の一品です」

——彼の打ち合いの強さはこの重さに起因しているのでしょうか

重い方が威力は上がるが速さの面では劣る。

ごく単純な二律背反

——けれど竹刀の速度にこの重量で比肩するのはそう容易い事ではありませんわ
恭侍の技量の一端を見て、寿々花は静かに闘志を燃やす。

2人が向かい合う。

恭侍がとるのは晴眼……否、手の形から平晴眼の構えだと分かる。

対す寿々花も恭侍に釣られるようにして剣先やや低めの下段の構えをとった。

相対する相手に対して、互いの目に傲りは無い。

「その胸貸していただきます」

「高くつきますわよ」

レフェリー役の技術班の先輩刀使が挙げた腕を振り下ろす。

「始め！」



——これほど手強いと思つていませんでしたわ！

油断した自身への叱咤……いえ、素直に彼を称賛すべきですわね。

ギシギシと横造刀が軋み、驚くほどに鐔迫り合う。

寿々花が剣を振るおうとすると吸い付くように恭侍の剣が飛んできて、その切っ先を撥ねて鈍らせ後の先を奪おうと企むが、軽く鈍らされた程度では寿々花も後手に回り切らず、恭侍に流れを容易には掴ませない。

結果、足は動かさずとも剣同士が激しくぶつかり合う。

ドン

と重く鈍い音

次いで

キチキチ

と風船が擦れる音を数オクターブ下げたような音が響く。

恭侍の突き上げに寿々花が対応した結果、横造刀がぶつかり合い、もう何度めか分からない鐔迫り合い、すぐさま結ばれた剣は分かたれた。

押し切ったのは意外にも寿々花。恭侍は潔く後ずさる。

押し切った勢いのまま、空いた間を埋めるように寿々花が一步踏み出した。

しかし後の先は恭侍が取った。

あえて鏝迫り合いは引いていたのだ。

キシ

と音を立てて剣がぶつかる。

今度は恭侍が押し切り、二太刀目を寿々花は避けて反撃を狙うが、それに恭侍が反応する。

機先を制するのは寿々花の十八番だが、

恭侍の十八番もまた機先を制する事。

キシ

恭侍の剣が一足早く、寿々花は恭侍の剣を辛くも受け流す。

剣劇の腕は恭侍が一枚上手だった。

寿々花のそれは勝つための心情であり技法だが、

恭侍にとって機先を制する事は勝利における絶対条件

その熱意の差が恭侍を一步先んじさせた。

恭侍は能力を無制限で使う刀使に勝つ事を目標としている。

それはつまり筋力も速度も防御力も全てにおいて上回る相手に技量だけで対抗する事を意味する。

その刀使の持つ能力の中で、剣術勝負で最も気をつけるべきなのが迅移だった。

当然、金剛身や八幡力も危険だが迅移は別格なのだ。

その歩みは

一步でアスリートの全速力より速く、

二歩で車より速く、

三歩で新幹線よりも速くなる。

一度発動してしまえば、同等の能力を持たぬモノに勝ち目は無い。

故にその起動を許してはならない。その初動は必ず一步で抑えなければならぬ。

——だから絶対に先手は譲らない。

その決意が寿々花を後手に回らせていた。

寿々花として先手を取れなければ勝てないような軟派な刀使ではない。

彼女の技量は間違いなく刀使有数だ。

だが、恭侍とてそれは同じ事。

その上で機先を抑えられ。強みの押し付け合いで負けてしまっている今の寿々花の

勝算は低いと言わざるを得ない。

「このままでは拉致があきませんわ」

恭侍の剣が弾かれる。

寿々花とて息継ぎ間近の気の抜けた剣を返す程度は造作もない。

寿々花の纏う気配が変わる。

カツカツと靴の音がよく響く。

弾かれても爆速で復帰してきた恭侍の剣が寿々花の次の剣の動きを封じようと振るわれる。

寿々花の軽いステップに相反する強い足取り。

寿々花の剣は軽く吹き飛ばされ、攻めに移れない

はずだった。

「やはり」

弾かれたはずの切っ先が宙に舞う木葉のようにクルリと一回転し、下段から突き上げて来た。

恭侍は驚きつつも冷静にその突きを半身になって躲し、横なぎ一閃。

「慣れた型が一番」

寿々花はひらりと身を翻し、避けるついでに剣をふるう。

目線の高さに飛来した剣を恭侍は受け流す。

「ですわね」

寿々花の動きの代わりようは劇的だった。

勢いよく回る身体にスカートのすそをつまみ、くるりと一回転した身体が静止する頃

には寿々花の構えは平凡な両手持ちの構えから変わっていた。

近い構えを言うのならフェンシングだろうか。

片手で中段に剣を構え、もう片方の手は腰に据えられている。

ひゅんひゅんと軽くバツの字に片手で剣を振るう。

「やはりこちらの方がしつくり来ますわね」

——なるほど確かに

此花寿々花の片手構え

なんとも優雅で実にしつくり来ている。

先手を取ったのは寿々花。

再び剣がぶつかると、鏑迫り合いは起こらなかった。

もう剣で押し合うことはなかった。

剣はボスンとぶつかるるとすり合い滑るように交差する。

寿々花の足は軽やかに、身体は右は左へダンスを踊るかのように躍動している。

恭侍は寿々花の動きを追いながら、追われるように軸を動かし続ける。

寿々花の剣は紙のようにたおやかで、しなやかで、鋭い。

寿々花の舞うような剣撃に恭侍は防戦を強いられる。

一合ごとの勝敗は6：4で恭侍が勝っている。だが寿々花はその不利を足で覆

す。

刀使が片手で御刀を構えるのは、実は割とメジャーな型だ。

両手で持てばいつでもそれなりの攻撃、それなりの防御に移れるが、両手で刀を握る事で腰が座つてしまい機動力が削がれてしまう。

その点、片手なら抜刀しながら動くのは容易だし、攻撃する時はその時だけ両手で握れば良い。もちろん片手持ちには反応が遅れるとまともに防御も攻撃もできなくなるというデメリットがあるため、この片手持ちはそれ相応の実力を持ち、その上で攻めつ気のある刀使だけが使う型となっている。

そして前述した通り、恭侍が最も危険視しているのは刀使の機動力。それを最大限発揮するこの型は恭侍にとって最も警戒すべき型なのだ。

「道理で不利を覆せない訳です。まさか初めから貴方に主導権を握られていたとは思いませんでしたわ」

冷静に自分を分析し、寿々花はそう結論を出した。

人に囲まれた小さなリング。

恭侍の堂々たる平晴眼の構え。

相手取る刀使も自然と型を取るようになってしまう。

その行動が既に恭侍の土俵に乗る行為だったのだ。

二つの条件が目に見えない圧力を作り出した結果、図らずも対戦相手の刀使は持ち味である身軽さを忘れ、恭侍最大の強みである真正面からの立ち合いに知らず知らずのうちに誘導されていた。

しかし寿々花は既にその事に気づき己の調子を取り戻した。

寿々花の動きが劇的に良くなったのに合わせて恭侍も構えを変える。

両手をハの字に広げ、片手持ち。

寿々花の左右に揺さぶるような動きに合わせ、模造刀をお手玉のように投げ渡して対応し始める。

二刀流に付随して両利きになったから出来た事だった。

——突き

を右手で弾き、左手に渡して袈裟斬り。

が弾かれたのに合わせて咄嗟に伸びそうになる右手を堪えて、両手で構えて逆袈裟を放つ。

恭侍の剣を受ける寿々花はその一撃の重さに息を呑む。

寿々花の動きは見違えるほどに洗練されているが、恭侍も一秒ごとに寿々花の動きに慣れていく。

——不味いですわね。

型を変えた直後は寿々花が優勢だったはずなのに、この僅かな時間で完全に拮抗。もう少し手の内を明かしてしまえばまた不利になる事は容易に想像できた。

「これ以上、長引かせるのは無駄ですわね！」

上段突きへの構え。刀を恭侍に向け斜に構える。

呼吸を整え、飛び込む様に突きを放つ。

——『天狗の太刀』!!

三連突きの末尾になぎ払いを繋げる4連撃

奥義に数えられる高等技

だが

「遅いー！」

三連突きが完遂される前に恭侍の剣が割り込む。パリイが決まり、寿々花の連撃のために脱力していた身体が押し飛ばされる。

寿々花がのけぞる。

「もらったー！」

大上段。頭に当たらないように角度を付ける。

一步踏み込み——

——足がすくわれる

ガニ股になって恭侍の動きが止まった。

寿々花がしやがみ、恭侍の踏み込む足を超低空で蹴り飛ばしたからだ。

「負ける訳にはまいりませんの」

恭侍の足を刈った足がぐるりと一回転して寿々花が立ち上がる。

そのまま流れるように両手袈裟斬り。

無駄なく滑らかに繋がったソレは、見た目にそぐわず一撃必倒の威力を秘めていた。

ガツンとここ一番の大きな音が鈍く響いた。

恭侍が押し飛ばされる。

——手応え……不十分ですわね

重かったが押し切った感じはしなかった。

寿々花は恭侍が咄嗟にスウエーバックしたのを肌で感じた。

「ですが、この勝機モノにさせていただきますわ！」

踏み込み再度左袈裟斬り

受けた恭侍の模造刀がたわみ恭侍の上体が反る。

——もう一撃！

右袈裟斬り

寿々花渾身の一打で

遂に恭侍の体が崩れた。

受けそびれた恭侍の身体が横に傾く。

あと数瞬で恭侍は倒れる。

だが寿々花は一分の油断もなく剣を構える。

恭侍が薄く笑った。

手が地面についた。

上半身に腕で回転をかける。

倒れる上半身。持ち上がる下半身。

寿々花と恭侍の目が合う。

寿々花の目に恭侍の足は写っていない。

——蹴りが——当たるな

カポエラか忍者のようなアクロバティックな逆立ち蹴り。

恭侍の技の引き出しにソレはあった。

『小僧テメエ、女の子蹴っぼるたあいい度胸してんじやねえかオイ』

——爺師匠……ッ

刹那、寿々花の肩を打つはずだった蹴りが、寿々花の模造刀を蹴飛ばした。

男の矜持か、甘さか

足を振り抜きその遠心力で、恭侍が側転を決めて立ち上がる。だがその動作はあまりにも大きく遅い。

恭侍が剣を構えながら面を上げるが、直後に

ゴスツ

と恭侍の胸のアーマーに模造刀の柔らかい切っ先がぶつかり音を立てた。

2人の動きが止まり、

周囲からも雑音が消える。

恭侍がゆっくりと両手を上げた。

「俺の負けです」

瞬間、爆発と見まがう様な歓声が沸き起こる。

——負けても惜しくないと思っていたけど、ここまで喜ばれると笑うしかないなあ
ヘルメットの下で苦笑いを浮かべながら恭侍が礼をする。

寿々花は我慢していたのか、今更になつて息が荒くなつた呼吸を整えている。

——わたくしの勝ち。のはずですが、どうも腑に落ちませんわ

恭侍には今回の試合で手を抜いたと言わないまでもおおよそ公式の場で使えない技がいくつもある。

最後の逆立ち蹴りだつて普通にアウトゾーンの技だ。

それらを全て使つた完全な恭侍の実力は未知数。

——勝つたはずなのに、どうしてこうも心乱されるのでしょうか……。それもこれも彼が怪しいのがイケないのですわ！

興味関心

獅童真希の時と全く同じ轍を踏んでいることに寿々花は気付いていなかった。